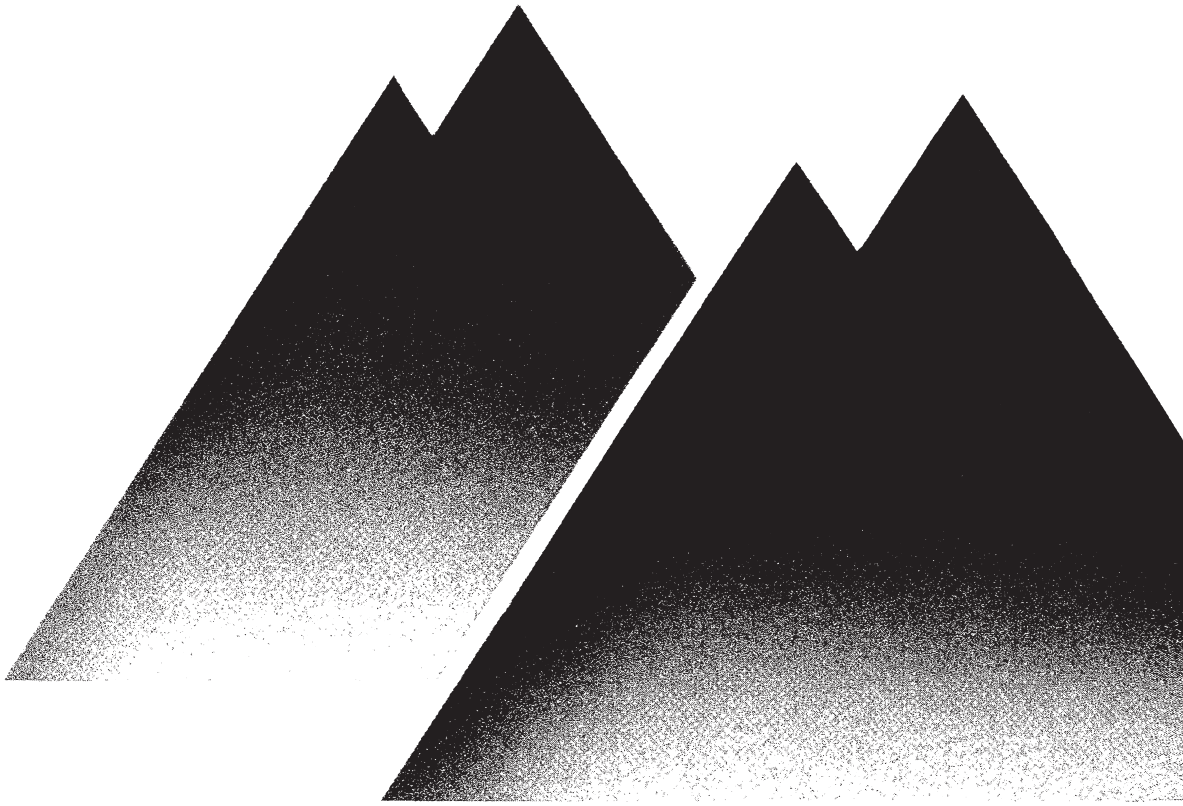
ISSN　1343－9642

研究紀要

2024　Vol.31 Bulletin



富山県［立山博物館］
Tateyama Museum of Toyama

ISSN　1343－9642

富山県[立山博物館]

研究紀要

第31号

2024年

目　　次

【資料紹介】
「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」について　奥　澤　真一郎　3

明治以降リライトされた「有頼立山開山説話」に関する一考察　吉　野　俊　哉　15
―様々なサブストーリーの存在とその拡散をめぐって―

立山山麓の芦峅寺集落の食文化　細　木　ひとみ　49
―宿坊での接待料理からみた一考察―

〈研究ノート〉
『日本旅行案内』にみる立山　河　野　史　明　65
―西洋近代登山の成立とイギリス人の立山登山―

【資料紹介】「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」について

奥澤真一郎

はじめに

この度、筆者は信州大学附属図書館所蔵の小谷コレクションの中に、立山連峰ならびに立山からみられる他国の山々、立山山麓の村落や宗教施設、登拝者などを描いた絵図があるのを確認した。資料名称を「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」（図１）というその絵図は、当館が所蔵する「立山曼荼羅」など、他の立山関連の絵図とは異なった特徴を多数もっており、今後の立山信仰史や登拝の歴史の研究に資する貴重な資料と考えられるので、本稿にて紹介するものである。

１．当該資料の概要

当該資料を含む小谷コレクションは、約8000点に及ぶ日本有数の山岳図書資料であり、小林義正氏が蒐集した「高嶺文庫（たかねぶんこ）」を母体としている。その後､昭和49年（1974）に小谷隆一氏に譲渡され蔵書数を増やし、平成15年（2003）に信州大学山岳科学研究所に寄贈され、現在は同大学附属図書館にコレクションが収蔵された。

当該資料の購入時に添えられていたとみられる値札（図２）には「安政四年彩色物　白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」とあり、価格が2,000円となっている。また販売元は､「木内店（ママ）書」（木内書店の誤り）とあり、東京都文京区本郷に店舗を構えていたようである。また値札に同書店の電話番号が記載されている。この値札の電話番号が市外局番なしの二けた番号となっている点について、東京都内で市外局番なしの二けたの番号だったのは、昭和27年（1952）の電電公社設立から昭和36年（1961）までである。以上の点から当該資料の履歴のうち、販売元と入手者、入手時期を推定すると、東京の古書店、木内書店が販売していた当該資料を、昭和27～36年の間に小林義正氏が購入したといえるだろう。

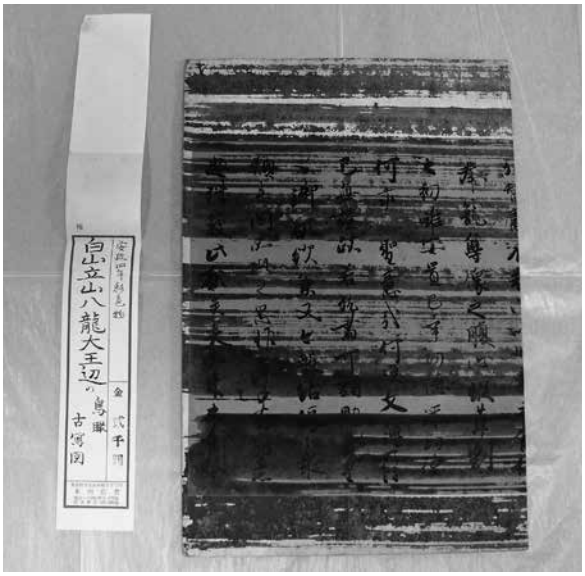


図２　値札と表紙の厚紙

当該資料に付属する値札に「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」と記載されている。現在の資料名は上記の通り、当該資料に付属する値札の絵図名称によることがわかる。この資料名称はこの古書店で定められたものである可能性が高いが、当該古書店以前の資料来歴は不明である。以下に基本的な資料情報を整理しておく。（令和６年11月26日、筆者が信州大学附属図書館にて当該資料を調査、撮影した）

・資料名称　　「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」
・書誌ＩＤ　　ＮＢ００００９４２１
・所 蔵 者　　信州大学附属図書館

・形　　態　　墨彩。マクリ。料紙を継ぎ合わせて１枚の絵図に仕立ててある。裏打ちが施され、絵図の裏側の右半分に厚紙を貼り、その厚紙を二つ折りにして表紙、裏表紙としているが簡易的なもので、表装はなされていない。元々はもっと大きな絵図であったとみられ、料紙を切り取って貼り合わせた痕跡や絵や文字が途中で切れている箇所、折り目の跡が随所にみられる。虫損はない。経年劣化によるスレ、ヤブレ、ツカレなどもほとんどなく、保存状態は良好である。

・法　　量　　本紙タテ 48.8cm ×ヨコ 68.8cm、外寸タテ 50.2cm ×ヨコ 69.4cm（厚紙部分の最大幅の部分を含む）

・附 属 品　　当該資料に付属する値札１点。

２．資料中の山座名・地名などの翻刻、分類について

当該資料を分析するにあたって、まずトレース図（図３）を作成した。そしてそこに描かれた山や河川、山中の地名、神社仏閣の名称などを翻刻し、資料内に書き込まれている絵や山型、方角などを手掛かりに描かれた事物を同定していく方法をとった。なお、トレース図内に記入した記号は、以下の基準をもとにつけた。

記号ａ：立山連峰以外の山座名、越中以外の地名
記号ｂ：立山連峰に属する山座名、立山に付随する地名、その他の事物名称など
記号ｃ：立山山麓の地名など
記号Ｒ：河川の名称
記号Ａ～Ｃ：当該絵図の由緒書、図面内部分の説明書きと考えられる詞書の箇所の翻刻。
これらについては後述。ａ～Ｒの記号は図面左側から右側の順に記号を付けているが、詞書Ａ～Ｃに関しては、時系列的な意味もあって絵図の右側から左側の順に記号を付けたことをお断りしておく。

さて、以上の基準によって作成した当該資料の山座名、地名などを一覧にしたものが「表１　「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」に描かれた山座名、地名など」である。なお、文字の判読が困難で翻刻に未詳箇所があるため、絵図内の記述内容には把握しきれない部分が残されていることを了承されたい。

３．資料の分析・考察について

まず、当該資料に描きこまれた山座、地名などについて、順にみていきたい。全国各地の有名な山座が名を連ねているが、中には山座名称というよりも神社仏閣や山号、山座に止住する神仏の名称と考えるのが妥当なところも散見される。また絵図の四隅のあたりに方角が記してあるが、各山座の存在する場所と方角が必ずしも一致していない。例えば、「立山大権現」と記されている山座は雄山と同定して間違いないと思われるが、この雄山を中心に立山連峰の山々があたかも「立山曼荼羅」の如くに並べて描かれている。一方で南の位置に加賀白山が描かれていたり、山城国も南の方角に描かれていたりしている。これはおそらく、様々な地点からみた山々の位置を複合的に重ね合わせて描かれているためで、一つの基準視点があるわけではなく、多視点からみた山座や事物の配置をつなぎ合わせて一枚の絵図に仕立てて描いているためであろうと思われる。

３－１．表１「ａ　立山連峰以外の山座名、越中以外の地名」について

さて、最初に「ａ」の項目に関して検討したい。絵図全体を見ると、全国の山岳信仰で有名な山座が細かく描かれており、例えば信州浅間山の様子が、噴煙が東の方向にたなびいているように描かれるなど、特徴

をとらえた描き方となっている。これらは立山連峰から遠望することが出来る山座が描かれていると考えられる。一方で、ａ－20にある「甲州佛山」については、山座名とも神社仏閣名あるいは山号とも考えられ、その同定は困難である。甲州（山梨県）といえば、古来南アルプスの地蔵ヶ岳（標高2764m）、観音岳（標高2841m）、薬師岳（標高2780m）の「鳳凰三山」や甲斐駒ヶ岳が有名であり、立山から遠望できる南アルプスの高峰群が一座も描かれないのは不自然でもあるので、この「甲州佛山」は、「鳳凰三山」等の信仰に係わる南アルプスの山座を表すとも考えられる。

次にａ－29について検討してみたい。まずは翻刻を以下にあげる。（図４）

志ヶ峯　　平家の落人里　　今百万石領

「志ヶ峯」については、詞書から山座ではないと考えるべきであろう。「今百万石領」とあるので、加賀藩の領内に存在する集落と考えられる。手掛かりとなるのは「平家の落人里」である。そしてａ－29に向かって左側には浄土山、薬師ヶ岳、下方には集落が描かれている。これらの位置関係から推測するに、この集落一帯は有峰村と考えられる。野崎雅明『肯搆泉達録』(1) にも、「何れの時にか詳かならず。平家の落人多くここに隠るといへり、いまなほ武具を伝ふ」とある。なお『肯搆泉達録』には、加賀藩政期のある時点まで、有峰村が加賀藩領か飛騨領か帰属が不明であったが、加賀藩が村民の嘘を見破り加賀藩領としたという伝承もあり、この詞書を書いた者もその伝承を踏まえて書いていると思われる。(2)

３－２．表１「ｂ　立山連峰に属する山座名、または立山に付属する地名、その他の事物名称など」について

次に「ｂ」の項目について検討したい。この絵図における立山連峰の山座名称の特徴として、「立山大権現」「白山大権現」「八龍大王」等、それぞれの山座に止住するとされる神仏名や「別山宮」といった頂上付近に建てられている祠の名称で表されているという点があげられる。『和漢三才図会』(3) には、「當國　神社仏閣名所」として、以下の山座、山中の地名および神仏があげられている。「立山権現…（中略）麓ノ大宮也。此自リ絶頂本社ニ至ルマテ凡ソ十三里八町…」「白山権現堂」「行者反（ママ）」「別山帝釈天」。一方で、同書には「浄土山阿彌陀堂」「折立富士權現」等の記載があるが、こちらの絵図には特に記入されていない。絵図の「立山大権現」については、祠（頂上社殿）が南向としるされているが、これも『和漢三才図会』と一致する。

また、剱山峯（剱岳、以下括弧内の山座名は、同定された山座の現代の標準的な名称を意味する。詳細は、表１を参照のこと）、地念塔、別山宮（別山）、白山大権現（大汝山）、立山大権現（雄山）、薬師ケ嶽（薬師岳）、御來光所、八龍大王山（龍王岳）、浄土山（浄土山）に「○」がつけられている。これらは立山連峰主稜部上に位置する山座等の名称と考えられる。この絵図において「○」がつけられている山座の並び順は、左から右側に、剱山峯→別山宮→立山大権現→薬師ヶ嶽→八龍大王山→浄土山となっている。「立山曼荼羅」においては描かれる山座にかなりのばらつきがあるものの、描かれる範囲は限定される。通常、剱岳→別山→（真砂岳）→（富士の折立）→大汝山→雄山→浄土山の並び順となっており、薬師岳が描かれることはない。これは、室堂平から立山本峰を遙拝した時の視点で各山座が描かれているためと考えられる。一方、この絵図では、山座は画面の左から右へ雄山→薬師岳→龍王岳→浄土山の順に描かれる。これは雄山山頂から見た山座の並び順（遠近は無視し方角の順とする）に一致し、これら山座配置を描いた視点は、雄山付近の主稜線上にあることがわかる。

ここで「ｂ」について、さらに詳細に見ていきたい。ｂ－３の地念（じねん）塔は、「立山曼荼羅」や「立山登山案内図」では、「自然ノ塔」などとされて必ず描かれるものである。この絵図では五重塔として描かれているが、「立山曼荼羅」では、三重塔で描かれていることが多い。前述の『和漢三才図会』でも、「劔山」の項に「山腰に石塔有り」とし、「不思儀（ママ）の石塔」といわれ、多くの「山絵図」にも「自然石也」と書かれている。また延命院玄清の写しとされ、「立山曼荼羅」の絵解きの台本といわれる『立山手引草』(4) には、「…向ニハ高々ト御前ヲ拝ミ後ニハ五古ノ剱山ヲ後光として自然ノ塔ヲ池ニウツシテ拝スルナリ…」とあり、この「自然ノ塔」が非常に重要な塔であるとしている。しかし周知の通り、この塔は実在していない(5)。この絵図の制作者が、

「地念塔」に関心を持っていたのはなぜであろうか。

次にｂ－８「岩屋蓮花穴」について検討したい。ここは立山信仰における聖地とされる「玉殿窟」と考えて間違いなかろうと思われる。「立山曼荼羅」においては、佐伯有頼が熊を追いかけてここにたどり着いたところ、窟から阿弥陀如来が現れたという重要な場所であるが、本絵図では阿弥陀如来ではなく、蓮台が描かれている。「立山曼荼羅」や「立山登山案内図」においても、阿弥陀如来の代わりに蓮台が描かれているものは多くあるので[(6)]、そのような絵図を見たことがある人物が描いているのかもしれない。また、ｂ－17「大日ヶ嶽」附近に錫杖をもった修験者のような人物がいる、ｂ－12「御来光所」、ｂ－20「延魔堂」など、仏教に起源をもつ地名（名称）も各所にみられる。次にｂ－27「六地蔵」、ｂ－28「わらんぢぬきとり所」である。六地蔵とされる場所には、この絵図の中で最も大きな堂宇が描かれているのが特徴である。この堂宇には非常に多くの登拝者であろう人物たちが行き来している様子が描かれている。この堂宇は立山大権現（雄山）の真下にあり、岩屋蓮花穴（玉殿窟）にも近いことから、室堂を指していると思われる。一方で、一人の人間がこのように登ったという、経時的変化を本絵図に表したという考え方もできるであろう。次に「六地蔵」の名称についてであるが、廣瀬誠はその著書『立山黒部奥山の歴史と伝承』の中で次のように書いている。「室堂から御前（立山頂上、峰本社）へ登る道にかつては六道と呼ばれる地点があって、ここに六道地蔵があった。今はその痕跡もない」[(7)]。このあたりで草鞋を脱ぐ習俗が果たしてあったのかについては検討を要するであろう。このほかｂ－38では刈込池の中に龍が描かれていたり、ヤゲン坂・カムロ杉など現在ではその場所が判然としない地名などがあったりして、絵図や文字から得られる情報が非常に多いのがこの絵図の特徴である。

３－３．表１「ｃ　立山山麓の地名など」について

ここでは「ｃ」の項目について検討したい。上滝から、岩峅寺、芦峅寺といった禅定登拝道上の集落に加え、ｃ－１、２の「岩不動道」「石不動」など大岩山日石寺に関する情報も盛り込まれている。ｃ－２については、堂宇や三重塔なども描かれており、その特徴をよくとらえている。また、ｃ－６「三途川　死出の山」は、「立山曼荼羅」には石碑に書かれているように表現されている（泉蔵坊本「是より死出の山」、宝泉坊本「死出之山路」、吉祥坊本「死出之山路」の３本がある）。

３－４．図３内の詞書Ａ～Ｃの翻刻とその内容に関する検討

さて、この項ではこの絵図の最も根幹をなす文字情報である、詞書Ａ～Ｃについて検討を進めていきたい。まずは翻刻を以下にあげる。（図４～図６）

原文	書き下し文
詞書Ａ（図４）	
行者	行者
矢内与右衛門	矢内与右衛門
安政三辰年	安政三年
七月十日登山	七月十日登山
當山地念塔尋参詣ニ	當山地念塔を参詣に尋ね
九月八日ヨリ十五日迠ニ□□（漸〃カ）	九月八日より十五日迠に（漸〃カ）（註）
奉登山見□（ルカ）	登山奉り見る
詞書Ｂ（図５）	
御當山の奥院	御當山の奥院
此邊より	此邊より

□□□（臨ミて（弓)ヵ）	臨みて（？）
御本社左右ヨリ	御本社左右より
二十五ヶ國ヲ見る	二十五ヶ國を見る

詞書Ｃ（図６）

安政四丁巳年	安政四丁巳年
八月十三四五六七八日	八月十三四五六七八日
留逗中於當飛騨國	當飛騨國に於いて留逗（逗留の事ヵ）中
四城郡阿曽谷（アソヤ）村利右衛門□	四城郡阿曽谷村利右衛門□
□□ニ留逗	□□ニ留逗
□□□□（被申ヵ）付中	□□□□（被申ヵ）付中
六十二歳老	六十二歳老
翁行者之為□（文字ヵ）	翁、行者の為□（判読不能）
陸奥國舘ヶ岡住人	陸奥國舘ヶ丘の住人
矢内与右衛門知義	矢内与右衛門知義
是越□（書ヵ）興シテ（合略文字シテ？）	是を□（書ヵ）き興して
申出登者也	申し出で登る者也

註　「漸〃」と判読するならば､「ぜんぜん」となり「徐々に」「少しずつ」の意となる。あるいは「ようよう」とも読むか。

詞書Ａ～Ｃのうち、ＡとＣが当該絵図来歴の由緒書のようなもの、Ｂは図面内の解説とすべきであろう。詞書Ａについては、矢内与右衛門なる行者が、安政３年（1856）に７月10日と剱岳の自然ノ塔に参詣するために９月８日から15日までの２度にわたり登ったとある。剱岳は久しく登頂が禁忌とされていた山である。資料的な裏付けが十分ではないのが残念であるが、事実とすれば非常に興味深い[8]。詞書Ｃの部分は、前半の部分に判読不能の文字が多く、文意が十分に読み取れない。安政４年は西暦1857年、四城郡阿曽谷（アソヤ）村は、現在の岐阜県吉城郡麻生野村のことであろう。後半部分は矢内与右衛門知義に関する記述の続きである。矢内与右衛門は陸奥國舘ヶ丘（現福島県須賀川市。鎌倉時代の作とされる舘ヶ丘摩崖仏がある）の行者で、矢内こそがこれを描いた人物だということであろう。

次に詞書Ｂについてみてみたい。この一文は本図中の薬師ヶ嶽と立山大権現（雄山）の間に書かれている。そのため、「御當山」「奥院」がどこを指しているのか判然としない。特に「御當山」は薬師岳、雄山のどちらも指しているとする見解も可能であろう。「奥院」については、『立山手引草』に次の一文がある。

「…冨士ノヲリ立眞砂ノ嶽ハ豊酎淳尊ニシテ炎王光仏ナリ。是レヨリ此ノ別山マテノ間ニハ様々ノ名所嶮嶍（けんなん）ヲ通リ是ガ奥ノ院別山ナリ帝釈天ノ御在山ニシテ…」

仮に「御當山」を雄山とし「奥院」を『立山手引草』に記載されている通り別山とするならば、なぜこの文章を絵図中のこの位置に書いたのかが判然としない。これについても検討を要する。また、「御本社左右ヨリ二十五ヶ國ヲ見る」とは、どのようなことであろうか。念のため、本絵図中にみられる国名（山座名称）を挙げると以下のようになり、19の国名が書かれている。

東北	出羽
関東	上野、甲斐、相模、武蔵
東海	三河、遠江、美濃、飛騨、伊勢
北陸・信越	加賀、越前、若狭、信濃、弥彦（越後）、（越中）

関西　　山城、伊吹（近江）、紀伊　　合計　19か国

（　　）内の国名は、絵図中には記載がないが、その国にある山座名があることから含めた。また紀伊と伊勢は文字が切れているので、断定はできない。通常、御本社といえば、雄山山頂の社殿を指すことが多いが、これについても検証が必要であろう。

まとめ

以上、検討してきたように、当該資料については翻刻に不十分なところを残し、文意が把握できぬままとなった箇所も少なからずあるのが現状である。このような点については、識者のご教示をいただきたいと考えている。

分析・検討してきた結果に基づき、この絵図の属性と立山に係わる絵図類における位置づけについて、以下にまとめる。本絵図では常願寺川や生妙瀧（称名滝）の描き方に「立山曼荼羅」や立山に係わる山絵図の影響が見られ、描き手はこれらの絵図をある程度は目にしていると思われる。

また加藤基樹は「立山曼荼羅」の認定基準を明快に論じている(9)ので、まず「立山曼荼羅」と本絵図との関連を見ておく。加藤は「立山曼荼羅」が礼拝画の機能を持っていることに着目し、「勧進布教、立山権現の礼拝・遙拝を意図した立山の絵」であること、「縁起の全場面あるいは一部の場面描写が備わるか、玉殿窟に感得仏の姿（蓮台も含む）が描かれている絵画」を「立山曼荼羅」と規定した。本絵図においては、勧進布教が目的の絵画とはいいがたく、また立山権現の礼拝を意図したものでもなかろう。玉殿窟に蓮台が描かれている点は合致するが、熊や白鷹は描かれず、立山の縁起の場面描写も見当たらない。よって本絵図は「立山曼荼羅」とは言えないだろう。

次にこの絵図には、大勢の登拝者が各山座を登り下りし、場所によっては遙拝している様子が描かれている。このように描かれた数珠つなぎにひしめく登拝者の列は、「立山曼荼羅」や立山関連の山絵図には見られない描き方である。これをつぶさに見ていくと、室堂から浄土山に登って、そこから一ノ越らしき場所に下り、雄山山頂まで行き、さらに稜線を縦走して行者返しから大汝山を経て別山に至っている。別山山頂では剱岳に向かって遙拝している登拝者の姿もみられる。別山から登拝者は、賽の河原まで下りて室堂に帰着している様子もみられる。そこからさらに一部の登拝者は地獄谷の方まで行っていることもわかる。この道筋はかつて「三山めぐり」といわれた登拝道であろう。このことから本絵図は、立山における巡礼の道筋を紹介する目的もあったと考えられよう。

またこの絵図の上部にはすでに述べた通り、中部日本を中心に東北地方南部から関西地方東南部に至る山々が描き込まれる。このような描き込みは、「立山曼荼羅」や立山関連の山絵図には類例がない。絵図の詞書に記された行者が、これまで巡った、あるいは行者間から得た情報に依拠した信仰登山に係わる山嶺の分布概念図のようにも見える。また、磐座や巨岩の存在で知られる山座が選ばれているようにも見える。

当該絵図資料についての要点は以上のようにまとめられるが、残念ながら、翻刻に不十分なところを多数残し、文意が把握できないままとなった箇所も少なくないため、明確な判断を下すことができないのが現状である。判断保留、未解明の部分については今後の課題としたく、このような点については識者のご教示をぜひ頂きたいと考えている。本絵図に関する知見が立山に係わる山絵図の研究の一助となれば幸いである。

［註］

（１）野崎雅明『肯搆泉達録』（『肯搆泉達録』、ＫＮＢ興産、1974年所収）。

（２）廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』Ｐ139（桂書房、1984年）を参照の事。

（３）寺島良安『和漢三才図会』巻六十八越中（『和漢三才圖會［下］』、株式会社東京美術、平成４年所収）。

（４）延命院玄清写『立山手引草』（林雅彦『増補日本の絵解き』、三弥井書店、1984年所収、原典は嘉永７年（1854）の成立）。なお、本書には別山より遠望できる山として、「越後の弥彦山」「タクケムリ信濃ニモユル浅間山」「冨士ノ御山」「箱根ノ山」「伊勢ノ国浅間ノ山［朝熊山］」「越ノ白山」「近江ノ鏡山」を挙げている。

（５）自然ノ塔については、平成25年度特別企画展『立山と帝釈天－女性を救うほとけ－』展示解説図録（富山県［立山博物館］、2013年）に所収する加藤基樹の論考に詳しい。そこで加藤は、この自然ノ塔が描かれる理由について、①剱岳全体を岩座としてご神体として祀り、その遥拝山として別山が機能したことから剱岳の塔は舎利塔であり、近世にもこの二山の関係性が残った。②元禄・宝永期に立山山麓に定着していた庚申信仰の影響で、作善を行った人の名を記して三重塔を建てるという信仰が近世に残り「立山曼荼羅」にも描き続けられたという、２つの見解を提起している。

（６）「立山曼荼羅」においては、中嶋家本、志鷹家本、立山博物館Ｃ本、同Ｅ本、同Ｇ本、飯野家本などがあげられる。

（７）廣瀬前掲書Ｐ593

（８）米原寛「「剣岳信仰」をめぐる若干の考察」（『研究紀要』第15号所収、富山県［立山博物館］、2008年）。

（９）加藤基樹「『立山曼荼羅』は何を伝えようとしたか－宗教的機能と思想史的背景－」（『研究紀要』第20号所収、富山県［立山博物館］、2012年）。

［謝辞］

本稿の執筆にあたっては、当該資料画像の撮影と本稿への掲載について信州大学附属図書館に便宜を図っていただいた。また吉井亮一氏には、山座名称や地名などの翻刻・同定や関連山座の山岳信仰に係わる知見の提示を得た。各位のご協力に深甚なる謝意を表す。

［付記］

当該絵図に描かれている全国の山座は、立山連峰のある地点から遠望できると書いたが、その後、当該絵図を多角的な視点で描いたという点を考慮しても、必ずしも遠望できない山座があることが分かった。

図１．白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図

図３.「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」トレース

表１「白山立山八龍大王辺の鳥瞰古寫図」に描かれた山座名、地名など

記　号	山座・地名など	比定される山座・地名など	備　　考
a　立山連峰以外の山座名、越中以外の地名			
a－１	佐渡	佐渡	
a－２	八彦山	弥彦山	越後
a－３	越後國	越後國（新潟）	山型の連続は、越後南部の山座か。
a－４	○に東　出羽國　太陽	東　出羽國（山形）　太陽	
a－５	春名	榛名山	
a－６	□□□（國カ）		表記、山座ともに不明。
a－７	□□		表記、山座ともに不明。
a－８	信州九頭龍山	九頭龍山	
a－９	上州赫城	赤城山	
a－10	信州戸隠	戸隠山	
a－11	鑓山	槍ヶ岳	鋸歯状の山型は、槍・穂高を併せた山域を示すか。
a－12	信州浅間山	浅間山	煙が東の方向へたなびいている。
a－13	飛彈國	飛騨國（岐阜県北部）	
	乗り倉	乗鞍岳	
a－14	笠岳	笠ヶ岳	
a－15	信州御嶽山	御嶽山	
a－16	武蔵國小佛	小仏峠カ	
a－17	冨士山	富士山	相模、武蔵、甲斐に山の神信仰で知られた複数の山座あり。相州の上方に位置する山。三□、六カ、雁坂カ
	山の神		
	相州□□	該当する山座不明	
a－18	甲州生延　七面山	甲州（山梨県）身延山カ　七面山	
a－19	濃州山嶽カ		嶽または獄か。これらは美濃の山々を指すか。
a－20	甲州佛山	山座不明	あるいは仏閣を指すか。鳳凰三山の可能性も有
a－21	美濃國　谷扱	美濃國（岐阜県南部）　谷汲カ	谷汲山華厳寺を指すか。
a－22	遠州　秋葉	秋葉山	本宮秋葉神社
a－23	参州　石巻	三河（愛知県東部）の石巻山	山が信仰の対象、石巻神社
	石巻山のやや右上に、「勢」の文字。・・・伊勢カ		
a－24	三州　猿投	三河（愛知県東部）の猿投山	巨石信仰の山
a－25	加賀白山	白山	
a－26	伊吹山	伊吹山	○に南の右側
	伊	紀伊カ	伊吹山の右側、文字が切れている。
a－27	若狭國　□法喜カ	山座不明	
a－28	越前　大野山	山座不明	
a－29	（翻刻）志ケ峰　　平家の落人里　今百万石領		山座不明。有峰か。平家の落人伝説有。
b　立山連峰に属する山座名、立山に付属する地名、その他の事物名称など			
b－１	○剱山峯	剱岳	「剱峯」の可能性も有。
b－２	御霊代	雪渓に見えるが、剱岳山中にこの地名もしくは場所があるかは不明。	
b－３	○地念塔	自然ノ塔（実在せず）	本図では五重塔。三重塔に描かれる場合が多い。
b－４	○別山宮		別山山頂の祠を指すか。
b－５	雪下有カ		
b－６	○白山大権現		大汝山を指すか。
	○行者返シ	行者返し	嶮難の地（「和漢三才図会」「金草鞋」等に記載有）
b－７	○立山大権現　南向	立山大権現　南向　雄山を指す。	雄山山頂の社殿
b－８	岩屋蓮花穴	実際の場所と異なるが、玉殿窟を指すか。	
b－９	歳の川原	賽の河原	石積みあり。
b－10	□□□（清め家カ）	祓堂カ	堂宇の上の文字
	雪下有カ		左側の文字
b－11	○藥師ケ嶽	薬師岳	山の中腹に太陽。
b－12	○御來光所	実在は不明	

記　号	山座・地名など	比定される山座・地名など	備　　考
b－13	○八龍大王山	龍王岳	
b－14	○淨土山	浄土山	
b－15	一枚帆の和船を指すか。とすればこの辺りは富山湾を指すか		
b－16	□山		瀧山と判読できるか。
b－17	大日ケ嶽　　太日	大日岳	太日は堂宇のことか、錫杖を持った修験者有。
b－18	生妙ケ瀧	称名滝	
b－19	五十丁の瀧	不明	
b－20	延魔堂	閻魔堂	堂宇有。地獄谷周辺と推測されるが。
b－21	八□	判読不能	
b－22	八□	判読不能	
b－23	畜生原	畜生原	
b－24	緑ケ池　山伏池（トモ）	みどりが池	合略文字「トモ」
b－25		川の中に文字有。判読不能	右から「右辺　深　底」と読めるか。
b－26	火車		文字のみで火車を表す絵はない。
b－27	六地蔵	大きい堂宇２つあり、中に参詣者。上に小さな祠。室堂を指すか 室堂から峰本社までの登山道に六道地蔵があったというが、現在はない。場所も未定。	
b－28	わらんぢぬきとり所	不明	実際にここで草鞋を脱ぐ習俗はあったのか。
b－29	雪		
b－30	雪		
b－31	弥陀ヶ原	弥陀ヶ原	「弥」の字が切れている。餓鬼田の絵がある。
b－32	一の谷	一の谷	この辺りでは、獅子ヶ鼻の「扇掛け松」が有名だが、これに比定できるか。
	福□杉	不明	
b－33	ヤゲン坂　　カムロ杉	両方とも所在地不明	
b－34	中空カ	不明	
b－35	八龍大王□（宮カ）西向	不明	料紙の切れ目で、「宮」か判読が困難。
b－36	藥師堂　西向	不明	
b－37	草生坂　小金坂　材木石坂 バリ穴　□（姫カ）杉　ヒメ	しかりばり、杉は不明	杉の絵あり。然り張りも杉も所在不明。
b－38	カリコミ池	刈込池	池の中に龍が描かれている。
b－39	吊り橋のような形状から、藤橋と推察される。		
b－40	多くの建物があり、煙らしきものが出ているところから、立山温泉ではないか。		
b－41	金山	不明	亀谷銀山などと関係あるか？
		c　立山山麓の地名など	
c－１	是ゟ岩不動道		
c－２	石不動	大岩山日石寺のことか。	堂宇、三重塔あり。
c－３	上瀧□□出ル	舟で川を遡る様子が描かれる。	
	是ゟ立山十三里		
c－４	岩倉寺　本宮	岩峅寺。本宮は何か、不明。	
c－５	此間三里三ケ村		宮路・横江・千垣のことか。
c－６	三途川　死出の山		立山曼荼羅との関連性
c－７	若宮有		下に鳥居の絵
c－８	ハシクラ寺	芦峅寺	
c－９	御死出山		大きな堂宇有。
c－10	太鼓橋のような形状から、布橋と推察。橋を渡ると大きな堂宇有。		
c－11	當山□（船カ）□川		
	飛彈國より出ル		
	茂登カ	不明	
		R　河川の名称	
R－１		現在の常願寺川	山絵図の川の描き方に類似している。
R－２		現在の称名川	
その他の河川		c－10を布橋とするならば、そこを流れる川は現在の姥谷川に相当。	

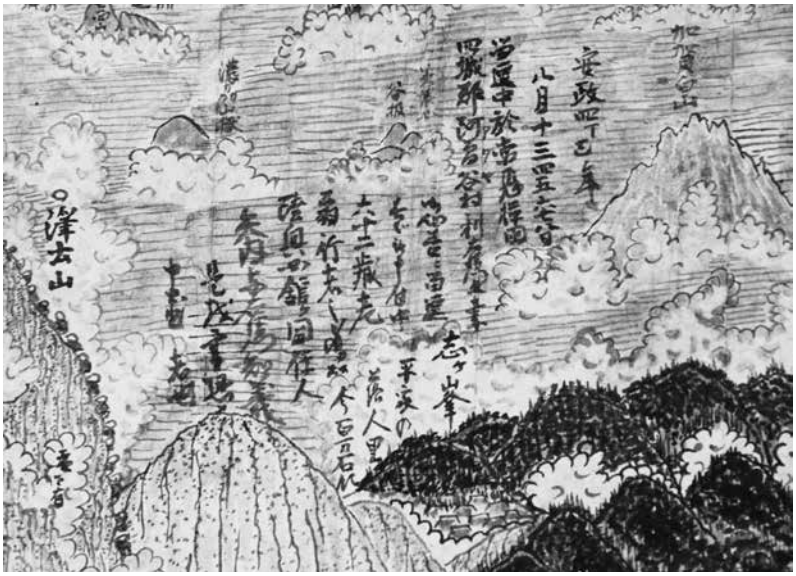


図４．詞書Ａ

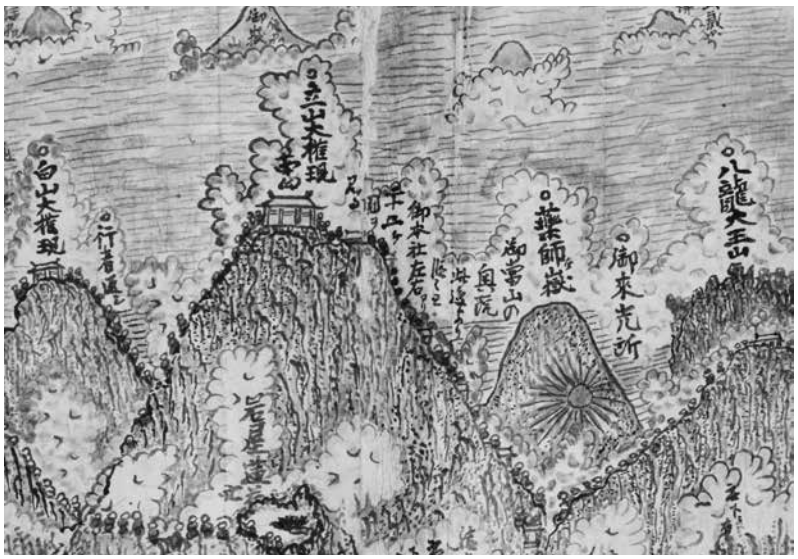


図５．詞書Ｂ

図６．詞書Ｃ

明治以降リライトされた「有頼立山開山説話」に関する一考察
―様々なサブストーリーの存在とその拡散をめぐって―

吉野　俊哉

はじめに

立山は、長い歴史の中で多くの伝説に彩られた山である。それは、古くから立山がそこに生きる人々の生活と密接に関わってきたことを示すものだが、立山信仰と関係する有頼の立山開山、女人禁制、山中の地獄や浄土にまつわる説話には、自然環境や景観に異界との接点を見出した、精神世界との深い結びつきが感じられる。立山は、そこに住む動植物や岩石、そしてあの世に纏わる伝説を生むインスピレーションに富む山だったとも言えよう。

その中で、佐伯有頼の立山開山は、立山信仰の始まりを印象づける説話である。立山曼荼羅諸本にも重要な要素としてその場面が描かれ、立山の衆徒が檀那場廻りで各地へ赴き立山曼荼羅の絵解きでも語られた、立山信仰の歴史やその権威付けとなる説話であった。

この、立山を開山したのは有頼だとする説話は、芦峅寺、岩峅寺の宿坊家に伝来する小縁起や略縁起（以下これらを総称して、立山縁起諸本）に見られる。『伊呂波字類抄』十巻本（鎌倉時代初頭）では有頼ではなく父の佐伯有若であったり、『類聚既験抄』（鎌倉時代）では一介の狩人であったりもするが、有頼の名前が現れるのはそれ以降である[(1)]。その後江戸時代には『和漢三才図会』（正徳２年〈1712〉）が刊行され、巻之六十八には「佐伯有頼の開山」を記した長文の説話が載り、広く流布した。同書にはその情報ソースを「彼ノ山ノ伝記ニ曰ク」と記しているが、これは編者寺島良安が岩峅寺の衆徒に取材したものと見られる[(2)]という。

現在立山博物館では、常設展示の音声解説や展示解説を求められた際にも、広く知られた有頼が立山を開山する説話（以下、「有頼開山説話」）を紹介している。

広く認知される「有頼開山説話」には、白鷹を追って山中を行く有頼が遭遇する様々な説話（以下、有頼が立山の麓から玉殿窟へ熊を追い詰めるまでの様々な場面に挿入された諸説話を、「サブストーリー」と総称する）が挿入されている。それらには立山縁起諸本に見えるものの他、後世に潤色された有頼の行動や立山山中の場所をめぐる地名譚、冒険譚などが多数ある。口承による説話なのでそれらの作者は特定できないが、その中には有頼が遭遇する出来事に対し芦峅寺と岩峅寺では異なった解釈による説話の併存が散見される。共通する内容の他に、芦峅寺と岩峅寺ではそれぞれの立場や立地を背景に別々の物語を創作し、複数の「サブストーリー」を別々に伝承しているのは、その背景に両村での衆徒たちと立山信仰との関わり方には微妙な違いがあったからであろう。

その要因としては、それらが主に絵解きなどを通して、口伝で継承されてきたことがある。立山曼荼羅の絵解きは、衆徒が皆同じ台本を用いて暗唱したものではない。各宿坊家では、自坊に伝わる立山縁起諸本を基に細部に潤色を加えながら、自坊の立山曼荼羅を用いて語り継いできた。廣瀬誠氏は「絵解きにあたつては、自坊伝来の縁起が典拠で、これを骨子として解説したものと思われるが、縁起の中では簡単にしか書かれて居ないものもあつて、それ自体は台本にはなり得なかつたと思われる。おそらく縁起に付随して、親から子へ、子から孫へと口伝えに伝えた伝承があったのであろう。坊の中には台本のあった坊もあっただろう。」と指摘している[(3)]。その際、衆徒にとって聴衆を満足させられる絵解きの内容は信者の獲得や護符などの頒布数に影響し、収入にも直結したであろう。そうであれば、興味を惹くような内容を工夫し聴衆を話に引き込むテクニックもまた必要だっただろうし、伝承する中に演者の解釈で様々なエピソードを挿入していっ

たことも想像される。その意味で絵解きは話芸であり、例えば古典落語では基本ストーリーを基に演者がマクラを工夫しながら聴衆層や時代に合わせて洗練されていったのに似ているとも言えよう。

また新たなエピソードが挿入される機会は、実際の立山禅定登山の山中でもあり得る。各地から立山を訪れた禅定登拝者を山中で案内した仲語は、単なる道案内ではなく、途中の名所にゆかりの説話を語り立山が育んだ信仰世界を伝える役でもあった(4)。彼らが案内の時、自らの知識と目の前にある山中の光景から、或いはサービス精神から作り出したストーリーを説話に加えていった可能性が考えられるからである。実際にかつては、禅定道途中の場所にエピソードを創作して付け加え、時に誇張し出任せに近い荒唐無稽な物語で禅定登山者たちを楽しませることもあったようである(5)。

これを踏まえた上で次に疑問としたのは、そのような解釈の異なる「サブストーリー」が、現在までどのように拡散して知られてきたかという点である。

「有頼開山説話」が、信仰に結び付いた伝承ではなく立山に伝わる説話の一つとして知られるようになったのは、近世まで口伝されてきた「サブストーリー」を採話して活字にした明治以降のことと思われる。それによって、宗教的な関心に拘らず昔話やお伽噺の一つとして幅広く読まれていくからである。このような、物語性の高い寺社縁起が基になったお伽噺は珍しくはなく(6)、広く知られる「浦島太郎」が、元は丹後の宇良神社の縁起物語であった例もある。

そこで小論では、「サブストーリー」拡散の実態を調査するため、明治以降に刊行された活字本に見える「有頼開山説話」を抽出し、内容や表現のバリエーションの分類と比較を行った。

その結果、明治30年代半ばから現在に至るまで、解釈を異にする「サブストーリー」が、基にした出典を明示しないまま内容や表現を変え、肉付けしたり要約したりして新たに作品として発表されてきたことが明らかになった。それらは説話集や冊子に繰り返し収録され現代も読み継がれているが、そのようなバリエーションが現在広く知られ受け入れられている背景には、明治から大正の頃に「有頼開山開説話」を潤色して創作されたリライト童話の存在が大きかった。具体的には、巌谷小波や久留島武彦たちによる近代児童文学成立の中で、神話や伝説、昔話を採話し子供向きにリライトした「お伽噺」の創作や口演童話の活動に共鳴した富山の童話作家大井冷光の活動がある。

そこで次章以下「有頼開山説話」について、先ず芦峅寺と岩峅寺に伝わる立山縁起諸本や宿坊家出身者の著作に収載された説話などを基に、「サブストーリー」の特徴的なバリエーションを整理して考察を加える。そして、明治以降刊行された説話集や冊子などを資料とし、玉殿窟へ向かう途中の場所や有頼の行動を描写した「サブストーリー」の種類やリライトの系統、内容や表現の変化を整理し、そこから「有頼開山説話」がこれまで県民に広く知られるようになってきた経緯とその背景を考察する。

なお以下、作者が何時かの機会に、それまで口伝で伝えられてきた「有頼開山説話」を聞いていたか、或いは新たな取材などで関係者から聞き取ることを「採話」とした。それをそのまま、或いは解釈を変えたり、潤色したりして作品化し公表すること、また既に公表されていた作品を、更に内容や表現の部分的な改変、編集したりして公表することを「リライト」とする。

1.「有頼開山説話」の基本プロット

小論では、当館展示館で立山曼荼羅の展示に設置する音声解説から「開山説話」の紹介を文字に起こし、以下にゴシックで示した部分を「基本プロット」、これに挿入される諸説話を「サブストーリー」として扱う。

父有若の可愛がっていた白鷹を放してしまった有頼は、布施城から白鷹を求めて山に向かって行くと熊に出会った。有頼は熊に矢を射、熊は血を流しながら立山山中深く入っていく。有頼は逃げる熊を追って山中へ。やがて熊は洞窟に姿を消した。〈有頼は続いて洞窟に入ると、突然洞窟の奥からまばゆい光が差し、そこには阿弥陀如来の姿があった。有頼はこの霊異に感動し弓を折り、出家して慈興上人となり、立山を

開いた。〉 ※〈　　〉内は小論では比較の対象外とした部分である。

この粗筋のような基本プロットを補うように、「サブストーリー」を挿入し内容を膨らませて「有頼開山説話」が形成されている。

なお、立山縁起諸本を比較すると、玉殿窟での阿弥陀如来との接触や、その場に現れる諸仏、出家し慈興となる際に師とした高僧との関係にも芦峅寺と岩峅寺では異なった説話が併存しているが、小論で取り上げた「サブストーリー」に直接関係しない部分は割愛した。

２.「サブストーリー」のバリエーション

最初に、伝承する「サブストーリー」の様々なバリエーションを分類して出典と共に挙げておく。口承により数字や名称の細部に錯誤が生じるのは当然としてここでは対象とせず、解釈の違いによるバリエーションを比較分析するため、次の二種類の資料を用いた。

一つは翻刻された立山縁起諸本である[7]。岩峅寺や芦峅寺の宿坊家が旧蔵した立山縁起諸本には、それぞれの解釈による差異を含む。その中から芦峅寺に伝わる「立山略縁起」(芦峅寺相真坊旧蔵、享保元年〈1716〉改記、以下「**①略縁起**」)、また岩峅寺に伝わる「立山小縁起」(岩峅寺雄山神社蔵、以下「**②小縁起**」)、「立山縁起」(岩峅寺延命院蔵、嘉永６年〈1853〉写本、以下「**③縁起**」)。その他に「有頼開山説話」の記載がある『和漢三才図会』(寺島良安編、正徳２年〈1712〉刊、以下「**④三才図会**」)、岩峅寺宿坊家の絵解き台本と考えられ、サブストーリーが豊富な『立山手引草』(岩峅寺延命院蔵、嘉永７年〈1854〉写本、以下「**⑤手引草**」)。

もう一つは、立山の宿坊家に伝わる様々な伝承を古老から身近に聞くこともでき、また伝来の文書に目を通せる立場にあった宿坊家出身者が、立山信仰で継承してきた様々な文化や歴史を記録し、その考察を纏めた著作である。これらは昭和30年代から50年代にかけて刊行され、その後の立山信仰研究の重要な基礎資料となったものである。佐伯幸長氏(芦峅寺大仙坊出身)の『霊峰立山』(立山開発鉄道、1959年刊、以下「**⑥霊峰立山**」)、『立山信仰の源流と変遷』(立山神道本院、1973年刊、以下「**⑦源流と変遷**」)、「立山をめぐる伝承説話」(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977年刊、以下「**⑧伝承説話**」)では、芦峅寺に伝わる説話を聞き取り収録している。また佐伯立光氏(芦峅寺泉蔵坊出身)は『立山史談』(私家版、1965年刊、以下「**⑨立山史談**」)で「立山の伝説について」と章立てし、「享保元年改記の立山案内記による」とした立山山中の様々な場所に纏わる伝説を紹介している。同書では複数存在するバリエーションを「また一書に」や「また一説には」、「別の話では」に続けて具体的に記している点に特徴がある。但し、その部分に明確な出典が示されていないのは、同種の説話が口承のみ、または限られた私的な文書で伝えられてきたためであろう。

以下、基本プロットに従って５つの場面に分類し、その場面の「サブストーリー」を整理しておく。

２－１　有頼の出自について

「**④三才図会**」や岩峅寺に伝わる縁起類では、有頼は父有若と一緒に越中へ下向し、有頼は越中に来たことで初めて立山開山に関わることになる。一方芦峅寺に伝わる「**①略縁起**」では、有頼は逃げた鷹を追っていて偶然立山を開山する立場になった訳ではなく、予め立山を開くべき「選ばれた人」として、越中で神から授かった形に伏線が張られている。ただ授けた神は「大汝山の神」や「刀尾天神」[8]などと揺れが見られ固定していない。その立場は、「立山に在す神仏」の範疇で緩やかに解釈して語られていたようである。

（１）下向時に子供の無かった有若が神に祈り、越中で有頼を授かるもの

①居城相続に一子なく、故に御夫婦共に城内に鎮座の住神に誓祈を願玉ふに、三七日の満願、暫く寝玉

ふに、不思議なる哉、宮殿の扉左右に開、中ニ八旬余の老人鬚をたれ、右の手に金扇を持、左の御手に白羽の鷹を止、汝有若告て玉わく（中略）一男を与ふ、（中略）御夫婦ハ漸く夢さめて、御喜悦不斜、（中略）玉を欺く男子御誕生ましまして、御夫婦の寵愛浅からず、是を名けて有頼公と申すなり「**①略縁起**」

②有若には年来子供がなく、大変さびしい生活を送っていたが、夫婦相計って東方の神仙に心願を立てて祈っていたところ、或る夜枕もとに神立ちあがり「我は大汝山の神である。汝らに一子を授ける。生まれたならば有頼と名づけよ」と言葉を聞いた。やがて一人の男子が出生し、有頼と名づけられた。「**⑥霊峰立山**」

③唯一の悩みは後嗣のないことである。名門の常として後嗣のないことは何にもまして残念でならなかった。有頼夫妻は何とか望みを叶えたいと、常に東方の神に祈っていた。一夜、奥方の枕辺に白衣の明神が神立ち、「汝の信行により一子を授く、有頼と名付くべし、吾はこれ刀尾明神なり」と申された。夫婦待望のうちに玉のような男子が出生した。すなわち有頼と命名された「**⑧伝承説話**」（「**⑦源流と変遷**」も同意）

（２）父有若が有頼を伴って下向するもの

①有若卿同嫡男有頼移㆓リ住㆑ス当国保伏山㆒「**④三才図会**」

②妻ハ都四条ノ主ナキ屋形ニ残シヲキ御父子［嫡男ハ／有頼公ト云］同様ニ荘リ今ヲハシメノ田舎旅「**⑤手引草**」　※［　］内は割り注、以下同じ。

③越中守佐伯有若朝臣、始㆓庁府㆒、仝二年九月十三日嫡男有頼、入㆓新川郡布施院㆒「**③縁起**」

（１）は芦峅寺に伝わる説話、（２）が岩峅寺に伝わる説話である。芦峅寺では開山堂に慈興上人坐像を祀り、入滅の地として御廟もあるためその存在を尊重し、有頼の権威や格式を高めるために、出自は神の啓示によることが創作されたのではないかと思われる。

２－２　白鷹を求める途中に遭遇する神仏たち

「サブストーリー」では父有若に叱責され白鷹を探す路中、様々な神仏からその行方を教えられる。熊と出会う伏線として、立山信仰に関わる神仏たちの加護を受け、「立山ゆかりの神仏が手を貸す」ことで有頼の特別感が色濃く表れているようである。

（１）森尻権現などに遭遇し、白鷹の行方を教えられるもの

①於㆑是森尻ノ権現示現シテ曰ク、汝当㆑尋㆓ヌ辰巳ノ方㆒ヲ「**④三才図会**」

②粤ニ有㆓リ化人㆒［謂㆓森尻権／現化現㆒也］示曰ク、化鷹ハ者入㆓ル巽之山㆒ニ、速ニ逐㆑ヘ之ヲ「**②小縁起**」

③粤に森尻権現容顕シテ（中略）是ヨリサキ辰巳の山ニ分ケ入リ尋ヌヘシ「**⑤手引草**」

④途方に暮れていると、森尻権現の神が示現して、「汝の尋ぬる鷹は辰巳の山中にあり」と示された。「**⑧伝承と説話**」

⑤木根岩角枕とし臥玉ふに、不思議なるかな、八十余の老人現れ、有頼に告て曰く、汝尋る、熊鷹ハ、従㆑是東南の嵩峰ニ登り、依て血汐を導となし、尋ね行くなバ再び手ニ入るなりと告玉ひて、姿ハ消て、夢覚にける「**①略縁起**」

以上が、有頼が白鷹を求めて布施城を出発し、途中神仏と遭遇する場面である。「森尻権現」の示現が４例、正体が明かされていない神仏と出会うものも１例見られる。何れも鷹の逃げた方角は辰巳（東南）で共通しているのは、最終的に玉殿窟へ向かうことの伏線になっているためであろう。

「**①略縁起**」では、正体を明らかにしていない「八十余の老人」から白鷹の行方を告げられるが、これは（１）

の①で有若の夢枕に立ち有頼を授けた「八旬余の老人鬚をたれた神」と同一神と思われ、有頼の守護神に設定されているようである。

（２）刀尾天神（天手力雄神・本地は不動明王）と遭遇するもの

①有頼問ふ君は誰そ　答て曰く　我は当山力(ママ)尾天神なり「**④三才図会**」

②有二異人一、右ノ手ニ執リ二利剣一ヲ、左手ニ持二シ念珠一ヲ云ク、我ハ是雄神山ノ之地主也［謂二刀尾天神／化現一ト］「**②小縁起**」

③八旬ニアマル老僧ノ色ロ黒ロク額ニハ水波ノ皺ヲタヽミ恐シゲニキバクイチガエ右ノ手ニハ利剣ヲモチ、左ノ手ニハ念珠トヲボシキ物ヲ持テ給ヘテ大盤石ノ上ニ御声高クシテ言ク 我レハ是立山ノ地主刀尾天神即チ太刀雄尊ニシテ不動明王ナリ「**⑤手引草**」

④一老人立ちて右に劔を持ち左に念珠をまさぐりて曰く、「吾は当山刀尾天神なり、汝の求むる鷹は大川の対岸に止まれり」と「**⑧伝承説話**」

②、③、④は不動明王の姿そのものの描写であり、岩峅寺では「有頼は不動明王に助けられて立山へ導かれる」というプロットを重視していたように見える。

（３）金剛童子と遭遇し同行するもの

①我（註：不動明王）今可レ附属二スー奇童子一ヲ［謂二金剛童／子化現一ト］、与共レニ之ト可二シ跋渉一也「**②小縁起**」

②汝ヂ（註：有頼）カ尋ル鷹ノ東ニ逍遊ス心ヲ改テ金巌ニ登ルベシト言ヘテ則ト金剛童子ヲ倶(トモニ)ツケ給ヘ此所ニテ重テ会ヘシト謂テ見ヘ給ス「**⑤手引草**」

（３）の①、②は共に岩峅寺に伝わる説話だが、何れも刀尾天神（本地は不動明王）から金剛童子を供に付けられている。不動明王（刀尾天神の本地）の眷属八大童子の意と考えれば、これが有頼を守護するために現れたことと矛盾しない。これも（２）の④と同様、有頼が不動明王の加護を得て立山を開く伏線と見てよいだろう。金剛童子は有頼の称名川渡河の場面でも関係しており、そこに現れる「黄金の獅子」との関連については後述する。一方、「**①略縁起**」に金剛童子の記述は見られない。

（４）芦峅で３人の老婆に遭遇し、試問されるもの

この説話は芦峅寺に伝わる説話で、岩峅寺の説話には見られない。芦峅寺で遭遇する老婆３人は媼堂に祀られる３体の媼尊本尊を想起させる。ここに見られるもう一つの特徴は、３人の老婆たちから「ここから先は険しい道のりだが、耐える覚悟はあるのか？」と意思を確認され、芦峅寺を過ぎて異界へ足を踏み入れる点である。有頼は立山を開いた志操堅固で立派な人物であり、その子孫を称する芦峅寺の佐伯一族にもその精神が受け継がれていることを強調するような部分である。ここでは有頼の存在感、或いは親近感に対する、岩峅寺との微妙な意識の差が関係しているのかもしれない。

①アシが繁って草むらをなせる神座（芦峅）があり、その側に白髪を垂れ長杖を持った三人の老婆が待っていた。老婆は有頼に向って「汝の尋ねる白鷹は東の山にいる。汝が行けば必ず得られるが、その山は川あり坂あり、道もなく難儀である。汝もし勇猛心と忍耐力がありあくまで初一念を貫かんとするならば上れ。苦しみを厭うならば、早々にここより立ち帰れ」と教えさとした「**⑥霊峰立山**」（「**⑦源流と変遷**」も同意）

②三人の老婆神が右手に長杖を持ち、左手に麻の葉を持って現れ、有頼を優しく労りながら「汝の求むる白鷹は東方の山上にあり、山中七日七夜の苦を経ざれば到達すること能わず、汝いかなる困難にも

耐ゆる決心あらば是を得ること叶うべし。若し耐ゆる心なくんば此処より直ちに引き帰るべし」と。「**⑧伝承説話**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

明治以降のリライト作品では、この部分は有頼の英雄像を強調するように取り上げられている。

２－３　称名川を渡る場面

有頼が川を渡った方法には、設定の異なる二つの説話が併存する。一つは猿が藤蔓を編んで橋を架けるもの、もう一つは獅子（狻猊）[9]が現れて有頼を背に乗せるもので、前者は芦峅寺、後者は岩峅寺に伝わる説話である。前者は「藤橋」の由来として知られるが、明治になって、先ず採話され活字になって拡散したのは後者の方であった。

（１）芦峅寺に伝わる説話

①思案にくれていると大勢の猿が出てきて、藤つるを使って細い橋を架けてくれた「**⑧伝承説話**」（「**⑥霊峰立山**」、「**⑦源流と変遷**」も共に同意）

（２）岩峅寺に伝わる説話

①（註：川に臨み）此時大地震動ス如レ見ニルカ狻猊ヲ異獣、跪ク前ニ、奇童（註：金剛童子）ノ云ク、跨レリ之ニ可シ以テ渡ルル深澗ク「**②小縁起**」

②Ⓐ葛ラ一筋ジ渡リテ赫ニソマレリ　弥熊ハ此ノフチヲツタヘシト見給フ所金色ノ師子イデタリ　時ニ金剛童子ノ言フハ「彼ニノリ玉へ、我モ共ニ」師子不レ見依テ爰ヲ金坂ト云［Ⓑ此由来ヲ以テ／今マ藤橋ナリ］「**⑤手引草**」

２－３－１　藤橋の地名譚としての説話

２－３の（１）が「藤橋」の地名譚となる。この説話は衆徒が絵解きでも語っていたようで、芦峅寺の宿坊家と関係が深い立山曼荼羅のうち９点（表１参照）では藤橋付近に猿が描かれている。また「**⑨立山史談**」ではこの説話のバリエーションとして、「道元禅師が立山を参詣した際に川が増水して渡れず、やむなく岩の上で座禅して減水を待っていると向こう岸から12匹の猿が現れ藤蔓で橋を作り道元を渡らせた。振り返って見ると藤蔓は南無阿弥陀仏の文字の姿に絡められており、猿は十二光仏に変化して紫雲に乗って光明を放ち姿を消した」という説話を載せている。猿を描いた立山曼荼羅９点のうち、５点には旅装の僧侶が、また４点には石の上で座禅を組む僧侶が一緒に描かれている。後年、高僧が立山を訪れていたと喧伝することで、布教の際に立山の権威や宗教的な格式を高めようとした意図が窺われる[10]。

ここにあるような「猿が蔓を使って橋を架ける」説話のモチーフを探してみると、動物になった釈迦や菩薩の前世譚の仏典「ジャータカ」の中に類似したプロットが見える。その第407話「大猿前世物語」（パーリ仏典小部経典第二編第二章「ガンダーラ品」所収）[11]には、「猿の王が敵（人間の兵士）に囲まれた猿たちを、川を渡らせて助けるため、川岸の籐の蔓を切って自らの腰に巻いて向こう岸に渡り、川の上に蔓を渡し自己犠牲を払いその上を猿たちに渡らせる」という非常によく似た部分がある。現時点で具体的に両者の接点を示す根拠はないが、ここでは仏典を通した宗教的な関連から、芦峅寺に伝わる藤橋の説話がこのプロットから何らかの影響を受けた可能性を提起しておく。

一方、（２）では供の金剛童子に助言され、その場に現れた獅子の背に乗り川を渡る。この説話では直接「藤橋」の名称は結びつかない。しかし「**⑤手引草**」では、絵解きの際に「藤橋」との繋がりを補足するように、有頼が獅子に乗る前の部分に下線Ⓐ「葛ラ一筋ジ渡リテ赫ニソマレリ　弥熊ハ此ノフチヲツタヘシト見給フ」とある。これは川の上を渡る一筋の蔓が赤く（血で）染まっていることから、矢を受けて血を流した熊がこ

の蔓を伝って川を渡ったことを示唆し、これを受けて下線Ⓑ「此由来ヲ以テ／今マ藤橋ナリ」と説明がある。岩峅寺では、逃げる熊が藤蔓の縁を（橋のように）伝って渡ったことで藤橋の由来とする解釈があったようである。

２－３－２「獅子」の解釈

「⑤**手引草**」に出てくる「金色ノ師子」とは、「②**小縁起**」では「狻猊を見るが如き異獣」とあるように、元来は唐獅子のような聖獣を指していたことは、岩峅寺の宿坊に関係が深い立山曼荼羅３点（表１参照）に唐獅子、或いは唐獅子と有頼を描いた場面があることからも分かる（写真１参照）。

しかし、後年には口承するうちにこの「獅子（ししし）」が「獣（ししし）」と混同して語られていったようである。「獣（ししし）」は猪（いのしし）、鹿（かのしし）、羚羊（かもしし）などの総称として使われた語であるため、口頭では衆徒や仲語が区別せず卑近な猪を想起して「シシ」と語っていた可能性がある。但し、各宿坊家の解釈によってバリエーションが生じていたと考えられるからである。但し、現存する立山曼荼羅に「猪（いのしし）」の姿で描かれるものはない。もし唐獅子が描かれた立山曼荼羅を用いて絵解きをするのであれば、それを猪と混同していたとは考えにくいだろう。口承によって「シシ」の解釈に違いが生じ、明治以降採話された際には「黄金のいのしし」として拡散し、有頼を渡すために「現れた」場所よりも渡り終えて「消えた」場所に黄金坂の地名譚を当てはめて伝承していた可能性がある。

そして実際の藤橋について、芦峅寺では猿による渡橋や高僧がそれを渡る説話によって「藤橋」の価値を印象付けようとしたのに対して、岩峅寺では「藤橋は当世に禅定登拝のために架けられたもの」であり、その事実を所与のものとして[12]、それ以前（橋が架かっていなかった頃）の有頼は刀尾明神（不動明王）の力を借りて渡河したことにポイントを置いたのではないかと推測する。その際、「獅子（狻猊）の背に乗る有頼」のモチーフとしては、白鷹を探す方向を刀尾天神（不動明王）が示していること、不動明王の眷属金剛童子が供に付き添うことから、有頼を当初から特別な聖なる存在と位置付けるため「獅子座に座る仏の姿」[13]がイメージされていたのではないかと推測する。

２－４　黄金坂・草生坂にまつわる説話

２－４－１　黄金坂の地名譚

２―３の（２）で岩峅寺に伝わる説話の②に挙げた「⑤**手引草**」の「師子不レ見依テ爰ヲ金坂ト云」を見れば、有頼を乗せて川を渡り終えた後、獅子がいなくなった場所を「黄金坂」とする地名譚となっている。しかし「黄金」の言葉が最初に出るのは獅子が現れた場所であり、この言葉を地名譚にするならば「出現した場所」をそう呼ぶ方が自然な成り行きではないかと思われる。事実、現存する立山曼荼羅ではすべて川の手前に獅子が描かれている。

事実関係に照らすと、かつて川の両岸には「座禅石」と「黄金石」と呼ばれる二つの大岩があり、それを藤蔓でつないで「渡し」が架けられていたという[14]。それを踏まえて考えると、元々渡河に纏わる説話は、川の手前側で座禅石に纏わる「座禅を組む僧の説話」、河上に渡された藤蔓の索道に纏わる「猿の藤橋架橋の説話」、そして河の向こう岸では「黄金石に纏わる説話」の三つが類話として別々に伝わっており、後年に元々黄金石があり「黄金坂」であった場所に、岩峅寺では有頼が渡り終わった場所という意味で獅子が消えた場所とする説話を被せたものではないかと思われる。

また「⑨**立山史談**」に載る道元禅師の説話は、芦峅寺の人々が川の手前にある座禅岩に高僧が立山を訪れその上で座禅を組んだ岩、藤蔓を渡して架けられた橋には、猿が架けたという因縁を被せたものではないかと思われる。

「獅子」が消えたことによる「黄金坂」の地名譚が岩峅寺の伝承だった一方で、芦峅寺では「シシ」を鹿と解釈した地名譚もある。

・また一書に、佐伯左衛門尉越中守有若公嫡男有頼が、父寵愛の白鷹を求めて深山に入りしばらくして坂に入ると、突然黄金の色をした一頭の鹿が出現して行手をさえぎった。有頼は、その鹿が放った毒気に当たって倒れた。黄金の鹿が現れたところから、この坂を黄金坂と名付けたのだとある「**⑨立山史談**」
・（註：渡河の後有頼が）幸いと喜んで行くと一頭の黄金色の鹿が前を塞ぎ、有頼はその毒気に当って倒れた（黄金坂）「**⑦源流と変遷**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

ここで注目したいのは、岩峅寺の説話で当初「獅子」であったものが、「獅子」と同音の「獣」と混同して猪へ解釈が変化したのとは別に、芦峅寺では鹿と解釈した説話が生成していた点である。この説話では「黄金色」の部分を「黄金坂」の地名譚に、また鹿の毒気を解毒した薬草が生えていた場所を「草生坂」の地名譚にする。但し、鹿の出現場所が曖昧で黄金坂の地名が出てこない場合もある。

立山曼荼羅の中に１点だけ、藤橋を過ぎてすぐの黄金坂付近に、倒れて横になった有頼を描いたものがある（表１、写真２参照）。鹿を描いた立山曼荼羅は現在まだ見つかっていないが、この事例は、絵解きでは有頼が黄金坂で鹿の毒気に中る話をすることがあった可能性を示唆している。

またこの他、獣にはカモシカの意味もあるので、「シシ」に羚羊の字を宛てている例（**２－４－２**の①参照）も見られた。

２－４－２　草生坂の地名譚

芦峅寺では、黄金坂に続く草生坂に鹿が登場する説話にも細部の異なるバリエーションが存在している。

①この坂（註：黄金坂・草生坂）に於いて黄金色の羚羊に出遭い、その毒気にあたり、気を失って倒れたその時熊王権現示現して曰く「汝、手当たり次第の草を採りて口中に入れるべし」と。有頼夢中に示現の如くに喰めば神気たちまち清爽となる。この羚羊に出遭いし坂を黄金坂と称し、草を喰みし坂を草生坂と称し「**⑧伝承説話**」

②また一書に、有頼が、黄金の色をした鹿が放つ毒気に当たって倒れていると、薬師嶽の守護仏が現れ、汝、最初に触れたる草を採りて食べよ、と告げられましたので、有頼は最初に手に触れた草をとって口にすると、不思議や病は体を離れ、心身共に生来の姿に戻りました。それ故、この坂を草生坂と名づけたものであるとある。「**⑨立山史談**」

③その時（註：黄金坂で鹿の毒気に中って倒れた後）、薬師嶽の神が現れて『汝、倒れるままに手に当る草を採りて口に入れよ』と告げた、有頼が苦い草を口に入れると忽ち心気さわやかとなり病気はなおってしまった（草生坂）「**⑦源流と変遷**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

以上の点から考えると、芦峅寺と岩峅寺には共に「黄金色のシシ」という原型が存在し、異なる解釈によって岩峅寺では獅子を介して渡河と黄金坂の説話をセットで見ているのに対し、芦峅寺では渡河とは別に黄金坂と草生坂の説話をセットとしているようである。

何れの場合も、危機を乗り越える冒険譚として有頼の英雄像形成に資するものであるが、芦峅寺の方には有頼に対して、倒れても立ち上がる、より大きな困難を乗り越える強力なイメージ作りに繋げようとした意識が感じられる。

これまで、草生坂の説話は立山に産する薬草のイメージアップで生まれたと思っていたが、その他に有頼の冒険譚として玉殿窟にたどり着くまで神仏の加護を受け、その困難を乗り越えていく試練を強調した意図も読み取るべきであろう。黄金坂は禅定道中では具体的にイメージするのが難しいためか、その前後の渡河や薬草（草生坂）を引き立たせるお膳立てのような印象も受ける。明治以降のリライト作品で、必ずしも猪の消えた場所を黄金坂と呼んでいなかったり、黄金坂説話そのものを割愛したりしている作品が散見される

のも同様である。

２－４－３　草生坂の薬草と神仏の霊威

草生坂と薬草の説話には、鹿が登場せず神から薬（神丹）を授けられて有頼が危機を救われるバリエーションもあるが、前項の①～③が鹿の毒気による中毒なのに対して、以下は傷（外傷）である。

・立山開山の人、有頼が、熊・鷹のあとを追って道なき山坂をよじ登り、全身に傷を受けてようやく玉殿窟に辿りつきましたが、傷口がますます痛み出し、起居も自由にならないことから、これも皆宿世の業なりと前非を悔し、もはや自害しておわびしようとするに、この時、薬勢仙人が現れ、この薬を傷口にと神丹を授けられた。この神丹によって、傷もなおり、立山を開峰して衆生を導くこともでき得たのであるが、神丹は、この坂に生えている千草を調合してつくってあると告げられたところから、これに因んで千種坂或いは草生坂と名付けたものであると・・・ある。「**⑨立山史談**」

・（註：玉殿窟で阿弥陀如来、不動明王に出会った後）次第ニ身体疲れ、是迄角岩木根に軽（転カ）セし疵口益々痛出、起居自由も難成、（中略）此時薬勢仙人爰ニ来り、神丹与へ、服すれハ、皮肉緩て朗らかに、心身悩みを忘ける「**①略縁起**」

この２つの説話では、単に草生坂付近は薬草が豊富で、手当たり次第に採集できる薬草の宝庫というだけではなく、薬効に神仏の霊威を借りた内容になっている。しかも説話によっては、有頼に薬草を教え、神丹を授けるのが「薬師嶽の守護仏」、「薬師嶽の神」であったり「薬勢仙人」であったり、また「熊王権現」であったりと揺れる。これはこの地に薬神の信仰が深く根付いていた訳ではなく、芦峅寺では立山山中で薬草を採取して売ることや、配札の際にはその場所の薬草で作った薬を携え各地で頒布する生業のために説話を利用したことを示唆していると思われる。

薬草との関連では、材木坂の手前辺りに、肩から葉を纏い何かを指し示すように腕を伸ばして立つ人物の描かれている立山曼荼羅が１点だけある[15]。筆者は今まではこれを、口に草をくわえて岩座に座る通常の姿との違いに疑問を持ちつつも、草生坂を象徴して立つ「神農」の姿であろうと考えていた。しかし草生坂に纏わる諸説話を踏まえると、これは純粋な神農と言うよりも、地元で薬と結び付けられていた薬師嶽の神、薬勢仙人などと融合させた「立山の薬神」のイメージとして描れたものと見た方がいいのではないかと考えるようになった。少なくとも立山曼荼羅に姿が描かれていることから、絵解きの中でも草生坂と薬草について語る機会にあったことが窺われる。

明治以降、草生坂の説話が立山信仰の枠を離れてリライトされていく中では鹿が現れず、有頼は神仏から解毒の薬草を教えられるのではなく、草生坂で薬草を食べ空腹を満たしたり、疲労を回復したりするという内容の変化形が見られることは後述する。

２－５　断截坂・かりやす坂の地名譚

禅定道に沿って登る中で、説話の基になったモチーフが可視的に現存している場所には説話は生まれ易いだろう。立山曼荼羅でも視覚的に表現でき、絵解きで語っても理解され易いように思われる。逆に地名として存在していても可視的な特徴に乏しい「黄金坂」、「草生坂」、「かりやす坂」などに纏わる「サブストーリー」は、自然発生的なイメージではなく、有頼の試練とそれを神仏の加護により克服する冒険譚として、後から意図的に基本プロットに組み込まれていったもののように思われる。特に「断截坂」には表記も含めて固定していない点が見られる。

２－５－１　断截坂

「だんさい」坂と呼び慣わされるが、立山縁起諸本や明治以前の説話では明確な有頼開山説話とは言い難い、

表記や内容の揺れが見られる。

①此坂ヲ断材ノ御坂ト申テ我等ガ罪障悉ク断滅スル故ニダンサイノサカト謂テ不断光仏ノ御説法アルナリ又タ此間ニシカリバリの穴ア（リ脱カ）詳クハ三才図会ニ見タリ「**⑤手引草**」

②〇断罪坂「**④三才図会**」

「**④三才図会**」では名称を挙げるのみで、それに続く有頼開山説話ではなくその付近の、立山禅定で女人禁制に関連した「叱尿（しかりばり）」の説話を載せている。富山藩校広徳館学正野崎雅明の紀行文『立山ノ記』（文化９年〈1812〉）では、叱尿について「此ニ至ツテ又十里、路傍ニ一穴アリ。其ノ深キコト測ル可カラズ。又、鬚頭杉（カムロスギ）、大キサ十尺囲ナル者アリ。一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ」と記している。「一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ」と、仲語が語った内容は怪しげなこじつけと断じているが、同時にそれは確かに仲語が途中でそのような説話を語って聞かせていたことの傍証となろう。

「叱尿」の説話は、「有頼開山説話」ではなく女人禁制説話の中で、止宇呂尼の供をして登山する童女が立山神の怒りで杉にされた侍女を見て怯えて足を止めたのを、止宇呂尼が放尿しながら叱ったため、或いは童女が怯えて失禁したために大地に大きな穴が開いたとする。

しかし「**⑧伝承説話**」では、

止宇呂尼随身の童女がこの急坂を罪の深さを断ずる所と聞いて、打ち戦き能く登らないので、尼が大声で叱りつけたので童女は益々驚き悲しみ、思わず小水を漏らしたところが、山神の怒りをかい、山道の真中に深い穴があき、叱られていばりをしたので「しかりばり」という

とある。童女は、「そこで自分の罪深さが罰せられる」と怯えたことが「断罪坂」の地名譚になったことを示唆する。この①と②を総合すると、最も早い時期の「**④三才図会**」では説話の内容が定まっておらず、「断罪坂」で止宇呂尼が童女を叱った説話を原型として、そこから「だんざい坂」と「叱尿」の説話に分化して伝承していったと思われる。ただ断罪について①では滅罪の意、②では罪を裁く意と、異なった解釈が併存する。更に、明治以降には「有頼が雷獣を截って成敗した場所」とするストーリーも見られ、更に異なる解釈の生じていたことが分かる。

現在「断截」の文字を見れば、そこが「獣を截った（成敗した）場所」とイメージし易い。管見した資料を見る限り、この説話は他の「サブストーリー」に比べて表記や解釈が多岐に亘ることから見て、かなり後になってから、複数の仲語の解説などを基にして挿入されたものであろうと思われる。そして、明治以降のリライト作品で雷獣の話が採られているのは、「有頼が雷獣を倒して先へ進む」という冒険譚の要素が、有頼の英雄像とも合致して定着していたため、拡散し易かったからではないかと思われる。

２－５－２　かりやす坂

かりやす坂の説話は絵解きで語られる機会が少なかったのか、立山縁起諸本に見える内容は僅かである。これも「だんさい」坂と同様に、明治以降のリライト作品になって具体的に書かれているものが目立つ。

①此ノ地大雷震ス、奇童云ク、七重勝妙滝也、雖レトモ然リ箇々法性寂然タラハ何ソ有ニ障碍一、可レシ安二心身一ヲ［加里屋須坂是也／以レ案ヲ俗言二加里屋須一ト］「**③縁起**」

②自ラ諸悪莫作ノ心口発テ心身共ニ受二テ勝妙ノ楽ヲ登一ルル故ニ此ノ坂ヲカリヤス坂ト謂ナリ「**⑤手引草**」

立山曼荼羅にはこの場所を具体的に描いた画像は見当らない。言葉のみで語ったとしても聴衆は具体的なイメージが持ちにくいため、絵解きよりもむしろ禅定登拝者が現地に立ち、滝の音と共に仲語の話を聞いた方が実感できた説話ではないかと思われる。

①の「此ノ地大雷震ス」とは称名滝が落下する轟音だが、それを「**③縁起**」では、悟りの本質は心静かであり、それを気にかけずに心身安らかに坂を登ることができる意に解釈されているようである。

富山藩士で歌人の佐藤月窓は、寛政10年（1798）に立山へ登った際の紀行文『立山紀行』の中で、「かりやす」（軽快に登りやすい）というのに実際は非常にきつい坂で立腹したとして、「いく程もあらで、鼻つくばかりさがしければ、彼の滝みしおもひにはようかはりて、汗は中々滝のごとし。名をとへばかるやす坂といふ。いと腹あしき名なりとて／藤かつらとりつく道のくるしきをかりやす坂と何名つけけん」と記している。「いと腹あしき名なり」とは諧謔だが、これも現地で仲語がこのような説話を語って聞かせていたことが分かる好例である。そのような仲語の話が明治以後に採話されて拡散した説話ではないかと思われる。

２－６　江戸時代までに伝承していた「サブストーリー」分析の小括

以上見てきたように、禅定道には多岐に亘る「サブストーリー」が挿入されている。衆徒や仲語たちは実際の絵解きや名所解説の中では、その場で使い分けることができる複数の話を用意していたのであろう。そして基本プロットに様々な説話が挿入され膨らんでいったのは、「絵解き」が各宿坊で縁起を基に潤色され布教勧進のための語り物として口承する中で、細部が変化していったためでもあろう。

説話の成立を時系列で並べることは難しいが、前の話が消えて後の話に置き換わっていくということではなく、代々の話者が新しい「サブストーリー」を生み、坊家間の情報交換によって共有して伝承された部分はあるだろう。それぞれの宿坊家に伝わる立山曼荼羅の構図や依拠した縁起にも細部に揺れがあり、また何年も仲語として禅定登拝者の案内に慣れてくれば、その場でアドリブを盛るのも自然な成り行きであろう。細部の名称や数字、内容の順序に齟齬が見られるのは口承では想定の内としても、それらの話を聞いた登拝者が在地へ戻り、土産話として再話して各地に伝えられることも考えれば、揺れの幅は語る人の数だけあってもおかしくはない。

開祖有頼の存在については、立山が霊山であることを象徴する意味で、芦峅寺も岩峅寺も有頼を開山者にふさわしい人物像として共通認識を持って語られてきたと思われる。また「サブストーリー」の中では登山の途中で遭遇する神仏や動物のバリエーションは多岐に亘るが、それらは有頼を助けるだけではなく、逆に試練を与える立場にもなっている。結果としてそれは語り物に冒険譚の要素を盛り込んで聴衆を惹き込むと共に、困難を経て立山を開く目的に到達した有頼の英雄像に繋げられてもいる。

また、「サブストーリー」には芦峅寺、岩峅寺双方の布教形態や宗教的な利権、山中での権限の違いが反映していたものと考えられる。それは曼荼羅の構図・絵柄にも反映しているが、立山信仰の継承を生業とする中での護符等の頒布、檀那場回りや出開帳での勧進活動に資するものであった。

芦峅寺や岩峅寺では歴史的な経緯、立地などから、共通する説話だけではなく、布教活動に結び付けるため意図的にそれぞれに異なった形の説話が生まれていた。芦峅寺では慈興上人坐像を祀り、開山以後芦峅寺に住み 83歳で示寂するまでの説話を伝え、辞世の歌や立山開山廟を祀ることから、岩峅寺に比べて有頼との結び付きは色濃いもののように見える。

３．明治以降の採話、リライトによる「サブストーリー」の拡散とその背景

現在伝えられる説話の多くは、明治初め頃までに宿坊で語り継がれてきた話を、直接或いは伝え聞いた記憶からの採話と考えられる。

「有頼開山説話」を立山縁起に基づく宗教的な立場から見たとき、様々な「サブストーリー」が付加された動機は二つあったと考えられる。一つは、芦峅寺や岩峅寺の衆徒たちが、開祖である有頼を偉大な存在として強調することで、立山の霊山としての権威や格式を強調するためであったと思われること。またもう一つは、絵解きを通した布教勧進で各地から立山禅定登山へ人を誘うための「語り物」の要素を持つことである。後者が、明治以降のリライト作品では冒険談として立山山中で数々の試練や困難に打ち克つ英雄としての有頼像を形成していく。それは有頼が立山を開くという宗教的な偉大さよりも、有頼自身が神仏の加護を

受けるにふさわしい勇気や誠実さを持つ少年の象徴として肉付けされていくことに表れる。

そのような明治以降のリライト作品は、長文のものや編集上ダイジェストにしたものなど様々である。またその作者は、小論で資料としたものに限っても児童文学者、郷土史家、教員など15名を超える。

子供向けにリライトした作品は、敬体を用い平易な言葉遣いを心がけ、作者の解釈で内容を咀嚼して創作されている。主人公としての有頼に人格を与え、白鷹を探す途中で遭遇する神仏の描写や会話の台詞回しにオリジナリティーを加えるなど、娯楽性を高めるとともに、教育的な配慮を意識したようである。そして、そんな有頼は神仏から開山を託された「英雄勇者」であること、「選ばれた人」であり、立山を開くにふさわしい人物であったことを、「サブストーリー」を通して証明するような展開の読み取れるものが多い。明治以降「サブストーリー」には、困難を自力と神仏の助けによって乗り越えて成長する冒険談、英雄譚としての価値を見出した有頼観の転換があり[16]、その端緒が冷光の童話創作にあったと見られることは、次節に後述する。

小論では、管見できた次の27点を資料として内容の比較と考察を行った（表２参照）。これらには、必ずしもストーリー性のある物語に限らず、登山案内書の中に見える登山道に沿った「サブストーリー」の紹介も含む。また資料の番号は刊行年順である。

なお、以下それぞれの資料から本文を引用した際は出典を示すため文末に資料番号を示した。また資料名が本文中に複数回表れる場合は、２回目以降は資料番号のみを示した。

【資料１】浅地倫『立山権現』（中田書店、明治36年〈1903〉）
【資料２】大井冷光『立山案内』（清明堂書店、明治41年〈1908〉）
【資料３】大井冷光「佐伯有頼」（『越中お伽噺 第二編』所収、清明堂書店、明治 42 年〈1909〉）
【資料４】大井冷光『立山昔話』（有頼会、大正４年〈1915〉）
【資料５】立山登山会『立山』（『立山案内』）（立山登山会・雄山神社社務所、大正４年〈1915〉）
【資料６】高見清平『最新越中立山案内』（高見活版所、大正７年〈1918〉）
【資料７】小柴直矩『立山案内記』（高見活版所、大正７年〈1918〉）
【資料８】大井冷光「白い鷹」（『母のお伽噺 プリムラの巻』所収、ヨウネン社、大正９年〈1920〉）
【資料９】吉澤庄作『立山遊覧』（中田書店、大正11年〈1922〉）
【資料10】吉澤庄作『立山』（北陸出版社、大正14年〈1925〉）
【資料11】小柴直矩「立山の史蹟伝説」（『史蹟名勝天然記念物調査報告　第九号』所収、富山県学務部、昭和２年〈1927〉）
【資料12】青木純二「白鷹（立山）」（『山の伝説 日本アルプス篇』所収、丁未出版社、昭和５年〈1930〉）
【資料13】「高志の白鷹 佐伯有頼公」（富山女子師範附属小学校編『高志の白鷹』所収、富山女子師範附属小学校、昭和９年〈1934〉）
【資料14】池上秀雄『立山千夜一夜』（中田書店、昭和22年〈1947〉）
【資料15】岩佐虎一郎「霊山立山を開いた有頼」（『越中いまはむかし』所収、越中史話会、昭和31年〈1956〉）
【資料16】野島好二「立山の伝説 白鷹の行くえ」（『立山のはなし』所収、北日本文化協会、昭和32年〈1957〉）
【資料17】小柴直矩「立山の開山」（『越中伝説集』所収、富山県郷土史会、昭和34年〈1959〉）
【資料18】稗田菫平「白鷹を追う少年」（『立山のてんぐ』所収、北国出版社、昭和46年〈1971〉）
【資料19】石崎直義「自然伝説 立山開山」（『越中の伝説』所収、第一法規、昭和51年〈1976〉）
【資料20】富山伝説散歩「立山開山・佐伯有頼」（石崎直義・大島広志・辺見じゅん編『日本の伝説 24 富山の伝説』所収、角川書店、昭和52年〈1977〉）
【資料21】「立山開山」（立山民話研究会企画『立山の民話』所収、立山黒部貫光・立山貫光ターミナル、昭和52年〈1977〉）
【資料22】高島昇一他「白タカとクマと立山」（『立山町の歴史物語』所収、立山町教育センター、昭和

56年〈1981〉）

【資料23】担当：長田陶吉「有頼少年と白タカ―立山開山―」（富山県児童文学研究会編『富山の伝説』所収、日本標準、昭和56年〈1981〉）

【資料24】担当：伊藤曙覧「有頼の立山びらき」（福田晃編『日本伝説大系 第６巻 北陸編』所収、みずうみ書房、昭和62年〈1987〉）

【資料25】石黒渼子「立山開山の話」（『富山の伝説』所収、桂書房、平成５年〈1993〉）

【資料26】遠藤和子監修「立山を開いた有頼少年」（『立山と黒部の昔ばなし』所収、立山黒部貫光、平成11年〈1999〉）

【資料27】稗田菫平編「立山をひらいた少年有頼」（『語りつぐ富山の民話』所収、富山県児童文学協会、平成14年〈2002〉）

３－１　後年に影響を与えた初期のリライト作品

（１）【資料１】『立山権現』

『立山権現』は、浅地倫が明治36年（1903）に立山へ登った時の紀行文に立山の紹介を加えたもので、立山の案内書としては最初のものとされる[17]。書名を「立山権現」としているように、先ず立山を霊山としてとらえ、縁起の引用から書き起こし、山中で仲語らが語った途中の名所に纏わる説話も収載している。この点から、立山案内書としてだけではなく立山に伝わる説話の最初期の採話と見られる。単なる登山記に止まらず、縁起に始まる信仰の歴史を踏まえていることは、重要な意味がある。この後に刊行される立山の登山案内書でも人文的な視点の記述が決して登山の添え物ではなく、純粋な信仰登山ではなくとも、山に登ることに敬虔な意識を持ちその歴史や宗教性を尊重する意味が踏襲されていくからである。同書末尾に載せた当時の県内新聞の批評を引用すると、刊行時から既にその価値が評価されていたことが分かる。

・昨夏単身登山を試みたるときの紀行に古来の伝説をも加え、最も詳細に最も精密に本邦の名山を紹介したり、為に一読座ながら同山を跋渉するの想ひあらしむると共に同山を探険せんとするものの栞とするに適せり（「北陸政論」）

・立山各地に於ける形勝は云ふに及ばず、坊主的の縁起神秘的の怪説に至るまで悉く之を網羅し、行文また流麗にして一読するに足る（「北陸新報」）

本書に載せられた「立山権現の由来」は、「藤橋の渡河」、「草生坂」の内容から見ると岩峅寺に伝わる説話を基にしていることが分かる。そして後年の刊行物には、『立山権現』での解釈や「サブストーリー」の描写表現をほぼそのまま引いてリライトが繰り返されていった部分がある。

そこで、本書の特徴的な部分を挙げ、後年のリライト作品と比較するためのポイントを示しておく。

○遭遇した、白鷹の行方を教える神仏の風体

・垢じみたる布子を纏ひ、Ⓐ銀線を束ねたらんが如き髪を長く垂れて童然たる禿頭隆く起きⒷ炯然たる眼球深く窪み言語動作また頗る倨傲なるⒸ一老翁

〈ポイント〉特徴的な点（下線Ⓐ～Ⓒ）は、①長く垂れた銀線を束ねたような髪、②炯然たる眼、倨傲な言動、③名前が無く「一老人」の３点である。

このような具体的な描写は、それまで文字に残されることはなかったと思われるが、浅地が創作したものではなく、絵解きや仲語たちの口伝の中で形成されてきたキャラクターを採話したものであろう。

○藤橋渡河・黄金坂・草生坂

・金色の猛猪現はれ、卿を負うて渓流を渡れり、卿漸くにして彼岸に達し心怪みながら後を顧み給ふに

猛猪何時しか消えて姿を隠しぬ。

・（註：草生）坂を攀登らんとし給ひしに腹飢を訴て進み難し、止むなくその辺に茂れる草を摘みて嘗め給ひしかは味食ふへくして忽ち満腹したり、今此処を草生坂となんいへり。

〈ポイント〉内容を整理すると、①現れたのは「金色の猪」。②川を渡した後、猪はいつの間にか姿を隠した。③有頼は空腹のため草を口に入れる。食べられる味で、空腹は満たされたという点である。

前述のように、本来は「獅子」であったものが口伝の中で変化し、幕末からは明治期には「猪」の解釈の方が一般的になったとすれば、それを採話し最初に文字化された時点で、以後はそれが一般化したようである。また、有頼が草を口にした理由についても採話の時点で、芦峅寺に伝わる「鹿の毒気」に対して神から解毒の薬草を教えられるのではなく、疲労や空腹が理由となり食草は自分から口にする形に文字化され、一般化したようである。

○断截坂

・忽ち一団の妖雲路に現れ出てゝ咫尺弁し難く篠衝く強雨地に溢れて歩む能はず、果ては雷鳴轟き電光閃きて巌石をも砕く勢ひに卿頗る困しみ、遂に腰に帯へる一刀を抜き放ちて雷獣を斬り給ひければ、雲去り雨止みて天地再び晴れたり、今此処を断截坂と云ふ

〈ポイント〉この説話のプロットは５点ある。①怪しい雲がわき、大雨になる。②雷鳴と閃光。現れたのは雷獣。③刀でその雷獣を殺す。④雲は消え雨が止んで再び晴れる。⑤その場所が、突然現れた雷獣の襲来の際に雷獣を斬った所。

前述のように「**⑤手引草**」では「罪や障害をことごとく断ち滅ぼす坂」、また「**⑧伝承説話**」では「罪の深さを断ずる所」と解釈にやや違いが見られたが、採話時点では更に別のバリエーションを整理して文字化したものが、一般化したようである。

○仮安坂

・忽ち声あり遠雷の轟くに似たりと雖も漠乎として其由りて来る所を知る能はざるを恨む、是ぞ即ち称名滝の瀑声なる、仲語云くこの坂にて人語を発せば滝壺より竜蛇来りて呑み去ると、例の府会の説ながら四辺の景色何となく物凄くして身の毛逆立つを覚ゆ、之れを仮安坂と云ふ

〈ポイント〉「**③縁起**」では、「称名滝の落下音は轟音ではあるが、悟りの本質は心静かで心身安らかに坂を登れる」という解釈による地名としていたが、ここでは「かりやす」に「仮安」の文字を宛て、轟音は聞こえるが滝の姿は見えないことを述べるに止め、「サブストーリー」は記していない。表記には「刈安」の文字を宛てているものもある。また下線部を見ると、仲語は通常から文字に残されていないような話を適宜登山者に応じて語っていたようである。

（２）【資料２】『立山案内』、【資料３】「佐伯有頼」、【資料４】『立山昔話』、【資料８】「白い鷹」

明治以降、「有頼開山説話」は家庭内で親から子へ語り聞かせる他、立山に纏わる伝説の一つとして採話され、童話や昔話として潤色したものが広く読まれることで[18]拡散したと思われる。

これには、個人的にも立山に深い思い入れを持って育った大井冷光が先駆的な役割を果していた。冷光は明治42年（1909）には、越中に伝わる伝承を基に創作した童話集『越中お伽噺 第二編』を刊行しているが、その中に「有頼開山説話」をリライトした作品**【資料３】**「佐伯有頼」を発表している。後年、特に児童向けにリライトされた「有頼開山説話」の多くがこれを含めた冷光の作品の影響を受けており、その後何人もの筆によって少しずつ表現を改めながら繰り返して刊行され、現在も読み継がれている。

そのような、冷光の解釈による「有頼開山説話」が読み継がれてきたのは、その描写や表現力の優れていたこともあるが、そこには有頼の行動の意味付けを変えたストーリーの潤色があったからではないかと考えられる。

近世立山信仰での立山曼荼羅を用いた布教では、立山曼荼羅を目の前にして絵解きを聴く人々は、有頼が逃がした白鷹を追い立山登拝道をたどりながら立山信仰の聖地である玉殿窟を目指すストーリーによって疑似登山する。聴衆は、それを通して有頼の行動と共感しながら、救いに向けた罪滅ぼしの方途とその必要性へ導かれる[19]、とする見方がなされる。これを、絵解きの中で有頼が果たした役割であったと考えるならば、明治になって開山の説話が立山信仰の枠を外れ童話にリライトされた際に、有頼の存在は立山の開山に尽くした有徳の高僧から、困難を克服し仏から開山の大命を受けるに相応しい勇士へとメインとなるキャラクターの転換があったと考えられる。

当然ながら、立山開山に対して有頼が成し遂げた大業というのは、熊を追って険しい山を登ったことではなく、救済を求める人々のために、出家して立山を開いたことだったはずである。だから布教の際の絵解きでは、既に立山は有頼によって開山されていたということは所与の前提とし、出家後に開山のために行った具体的な行為はほとんど出てこない。しかし冷光はリライトする中で、有頼が立山を開山した偉大な開祖というよりも、神仏の加護を受け度重なる試練を克服する、あたかも神話に登場する建国の英雄のような存在として描き、それを補強する形で「サブストーリー」を挿入している。

そして冷光以降の「有頼開山説話」は、ほとんどが冷光の目を通して確立した、そんな有頼観を下敷きにして更にリライトされていく。これによって「有頼開山説話」から宗教的な要素を捨象しながら、冒険譚としての「サブストーリー」や、立山に対する富山の風土的な思いが綯い交ぜになった模範的な少年像として有頼を偶像化していった訳である。

その動機にも関連する、冷光の立山観や創作活動に見られる立山への愛着の強さについては、廣瀬誠氏がその出自や幼年期に母の影響があったことなどを指摘している[20]。

そこで、これを承けた具体的な事例を二つ挙げる。

一つは**【資料２】**『立山案内』の執筆である。動機として執筆の前年（明治40年〈1907〉）にようやく立山へ登った感動が大きかったことは、その自序に「余を育て給ひし母君、祖母君は、常に余が立山参詣の日の、一日も早かれと、祈り給ひしが、あはれ、其を見給はで、逝きましぬ。（中略）昨年の夏に至り、初めて、余は立山登躋を、果すことを得たり。然るに、其後余の立山に対する趣味は、いや増し深きものあり、専業の余暇に立山を観察し研究せんとて蒐集したるものは、遂にこの小冊子を作せり」と書いていることからも察せられる。自序には「専業の余暇に立山を観察し研究せんとて蒐集したるもの」とあるが、その情報量は多分野にわたる膨大なもので、動植物、鉱物、気象など科学的な記述と立山開山関連や伝承、詩歌など人文的な内容を含む。廣瀬誠氏はこれを「立山万般にわたる総合的著述であった。その意味では最初の立山研究書」と評している[21]。

そこで**【資料２】**に見える「サブストーリー」から冷光以降のリライト作品と比較するための特徴的な部分を挙げ、そのためのポイントを示しておく。

○藤橋渡河・黄金坂・草生坂

・有頼卿熊を追ひて、此処に来りしに、黄金色をなせる猪現はれ卿を背に乗せて川を渡せしが、直ちに此の坂にて、姿を隠したり、と云ひ伝ふ、因つて黄金坂と称す。（中略）其れよりは草生坂と云ふ、名の由来は有頼飢えて草を食せし所なりと

〈ポイント〉現れたのは「黄金色の猪」で、川を渡した後猪は姿を隠した。有頼は空腹のため草生坂の草を食べた、という点は**【資料１】**の記載と一致する。冷光は、初めての立山登山に際し『立山権現』を閲覧し、引用した可能性がある。

○断截坂

・有頼雷獣を退治せし処とて、断截坂といふ

〈ポイント〉ここも【資料１】と同様、雷獣の登場と退散を元にした地名譚にしている。

○仮安坂

・此度は恰も平板を立てし如き至難なる急坂あり、但し僅か計りの間なり、之を仮安坂といひ、遙かに鞳々たる称名ケ滝の瀑声を聞くを得べし、（中略）有頼卿仮安坂に差蒐りて、彼の瀑声を、念仏の声の如く美妙なりと喜び、やすやすと坂を超え来て、此処（註：伏し拝み）に滝を拝みしとなり

〈ポイント〉仮安を「やすやすと越える」意で解釈しており、登山の際に現地で仲語などから聞いた話が基になった可能性があるだろう。

もう一つは、童話作家として非常に早い時期に「有頼開山説話」をリライトした童話【資料３】を執筆している点である。立山開山をモチーフにした文学性豊かな創作童話の刊行が「有頼開山説話」の拡散に大きな役割を果たしたのは間違いないだろう。執筆の動機には、新聞記者を続けながら児童文学や教育活動に関心が高かったことに加えて、明治末から大正にかけて、日本での児童文学の成立や口演童話の運動に尽力した久留島武彦に接し、巌谷小波たちの活動に参加したことが大きい。初版発行時の「佐伯有頼」の仮名表記には巌谷が提唱した「発音式仮名遣い（お伽仮名）」を用い、総ルビにしていることもその影響を受けて口演童話を意識したものと考えられる。

そしてそのような童話の内容が受け入れられたことには、富山で組織的に行われていた成人儀礼的な立山登山の風習や、明治末頃には始まっていた学校登山との関連も大きいだろう。但し、富山での成人儀礼的な立山登山は江戸時代からあった習俗と言われているが、行われた地域や規模、歴史的な経緯についてはまだ研究の余地がある[22]。

冷光以降にリライトされた童話作品を並べてみると、そこには冷光の童話をベースに英雄として偶像化した有頼の姿に教育的、修身的なメッセージを滑り込ませているように見える。それによって親や年長者への敬意、親孝行、勇気、克己心などの徳目を読み取り「有頼少年のような立派な子供になりたい、なってほしい」といった形で読まれていたとすれば、冷光の童話作品がそれ以降のリライトを方向付けたとも言えるだろう。冷光以降の作品は一般的な「有頼開山説話」のリライトと言うより、有頼をモチーフとした冷光の童話のリライト作品とも言えるように思われるが、そこには冷光の有頼観を基に、有頼を富山の子供の模範的な姿とし、その精神に学ぶようにとの願いがあったのであろう。

大正４年（1915）「越中の代表的名山たる立山開山者佐伯有頼卿の伝説を一般に普及せしめ、以て児童社会教育上資益あらしめたい目的」で「有頼会」が設立された。これは前述のような冷光の「有頼開山説話」に対する考え方を端的に表すものであろう。また会の事業として有頼卿の銅像を建設することを謳い建設基金を募るが、その際「金五銭宛寄附なさる小学児童に限り一部宛配布いたします」として「有頼開山説話」を基にした一作品のみ載せた20頁ほどの小冊子【資料４】『立山昔話』を作成した。

当初その内容は【資料３】を再録したものと思っていたが、実際は言葉遣いや内容を部分的に書き換えて改稿した別作品であった。内容の比較については後述する。

【資料４】の冒頭には「有頼会」の設立を記した後「この『立山昔話』の編述に関しては掌典佐伯有義氏の助言及校閲を受けました。」とある。岩峅寺永泉坊に生まれた神道学者佐伯有義が内容に目を通していたのであれば、当然岩峅寺に伝わる説話に基づく校閲[23]であったものと考えられる。【資料３】も岩峅寺に伝わる説話を下敷きにした内容だが、【資料４】では【資料３】には書かれていた草生坂の部分が全文削除されている。これが佐伯有義の校閲の結果によるものか否かは不明だが、この違いは、以降の冷光作品のリライトを特定する際に参考となった。

それだけではなく冷光は、「有頼開山説話」を基にした童話を、思い入れを持って納得がいくように発表順に【資料３】、【資料４】、【資料８】「白い鷹」の３回改稿して発表している。改稿の理由を示すものは残

されていないが、冷光の創作過程と思想にも触れつつ、それぞれに特徴的な内容や描写部分を抽出し、後年のリライト作品の表現と比較する際のポイントを示しておく。

先ず【資料３】では多用されていた有頼の会話文には､後には削除されている部分が多い。また【資料３】は富山での刊行であったが､【資料８】は東京で刊行されたものだったためか、富山の地理風土が分からない読者を想定したような、説明が必要な背景的内容を加筆する一方、宗教的な部分は更に割愛している。

○有頼の体格、特技

・この有頼わ大層体質の強い児で、何時も勇しい遊びをする事が好きでした【資料３】
・年齢に似あはぬ大きな体格で、人並みはづれた力を持ち、ことに矢を射ることが上手で、いつも勇ましい遊びばかりして居りました【資料４】
・体格といひ智恵といひ、人並み優れて立派な方でございました【資料８】

〈ポイント〉【資料３】､【資料４】の描写は、後に熊を矢で射ることの伏線になる。しかし【資料８】では、後述のように熊を弓矢ではなく剣で刺したことになっているので、伏線は外されている。

○全編で、有頼は父有若を何と呼ぶか

・お父さん、父【資料３】　・お父様、父上【資料４】　・お父様【資料８】

〈ポイント〉【資料３】､【資料４】には揺れている部分があるが、童話を読む児童への教育的な配慮を加えたためか、後になる程丁寧な表現に代えていったようである。

○逃げ去った白鷹の形容

・あんな立派な鷹【資料３】　・世に珍しい芽出度い鷹【資料４】　・あの芽出度い鷹【資料８】

〈ポイント〉【資料３】にはないが､【資料４】､【資料８】で「芽出度い鷹」とするのは、有若が白鷹を入手した際に、白鷹の出現は国にとっての奇瑞と喜んでいたという伏線がある。

○鷹を逃がした過失に対する、父有若への自責の念

・「全く私が油断して居たせいですから、お父さん、どうか勘弁してください」【資料３】
・若しこの為めにお気分が悪くなり、お勤めの上に障るやうなことがあつては大変である【資料４】
・若しあの鳥が逃げたために国を治めになるお父様のお体に災難がおこるやうでは相済まない【資料８】

〈ポイント〉【資料３】では謝罪しているが､飽くまでも父親に対する個人的なものである。それに対して【資料４】､【資料８】では、国にとっての奇瑞である白鷹を失うことで国の安定が脅かされることを懸念する心情が描かれる。自責の念は、父への個人的な謝罪から国司である父の職務遂行への影響や心配を含むものへと変化している。

○白鷹の行方を教える神の風体

・妙な格構(ママ)をした一人の老人が、出てきました。銀の針金の様な長い髪を下げて、眼をギラゝさして、如何にも恐ろしそうな人【資料３】
・銀の針金の様な長い鬚の生えた、気高い老人で、ギラゝした眼で有頼を見て居ました【資料４】
・髪も髭も銀の色をした気高いお爺さんが現はれました。【資料８】

〈ポイント〉【資料１】で浅地倫が具体的に視覚化した仙人然とした風体を踏襲し、品格は妙な格好の老人から気品ある老人へと変化している。「①**縁起**」などでは白鷹の行方を教えた後で自ら「刀尾天神」と名乗るが、ここでは何れも神の名前は書かれず、必要以上の宗教的な部分を削除する意図があったと思われる。

○一度見つけた白鷹を手元に呼び寄せようとする方法

・早速腰から甘い餌を取出し、それを鷹に見せ乍ら、「鷹こォい鷹来い、餌をやろ、おいしいおいしい、餌をやろ。」と幾度も呼びます【資料３】

・腰から呼子の笛を出して口にあてますと、細い優しい鈴を振るような音で、それを吹きました【資料４】

・腰から鈴を取り出しますと、静かにそれをうち振りました【資料８】

〈ポイント〉縁起には「鈴」を振って呼び寄せるものが散見される。冷光の解釈では「呼びかけ」→「笛」→「鈴」と変化が見られる。【資料３】はこの部分以外にも有頼の台詞が多用されており、初期には　口演童話として語り物の要素が強いように思われる。それ以降【資料４】、【資料８】は読み物としての描写を意識して改稿したようである。

○麓での熊との遭遇

・矢庭に一匹の黒熊が飛び出して爪を鳴らして有頼や鷹に喰つてかかゝる（衍カ）ものですら（か脱カ）（中略）、『おのれ免して置くものか！』と、持つて居た弓に、手速く矢を番い、其黒熊を目掛けて放ちますと、狙え外れずグサと熊の胸の処え当りました【資料３】

・不意にあらはれましたのは一匹の大きな熊であります。有頼目がけて爪を鳴らして襲ひかゝらうといたします（中略）「コラ無礼者ッ。」と有頼は、持つてゐました大弓に矢を番へて、その熊の胸元目がけて射付けました。狙ひ外れず月の輪にグサと刺さりますと、さすがの熊もタヂタヂとなりましたが、有頼続いて二の矢を番へるのを見ると、あわてゝ逃げ出しました。【資料４】

・忽ち恐ろしい勢ひで飛び出して来て、この白い鷹を捕らうといたしました。（中略）有頼は地団太ふんでくやしがりました。「無礼者ッ」といひさま熊に立ち向ひ、さしてゐた剣をひきぬくとその胸元の月の輪を突き刺しました。【資料８】

〈ポイント〉下線部を比較すると熊の襲い掛かる対象が「有頼や鷹」→「有頼」→「白い鷹」と変化しているのが分かる。立山縁起諸本や【資料１】には、このような対象の具体的な描写は見られない。これは冷光がリアルな場面をイメージし、改稿の度に襲った対象を先鋭化させて創作した部分である。【資料８】では自らが襲われる危険の回避からではなく、大切な白鷹を襲おうとした熊への怒りの展開が鮮明になっている。また【資料８】では、弓矢ではなく剣で熊を刺したことに改めた点が特徴的である。

○藤橋渡河・黄金坂での猪と有頼

・一匹の金の光を放つた猪が出て来ました、「オヤゝ今度わ金の猪か、妙なものが出て来たな」と有頼わ弓を取り直して、撃ち殺そうとしますと、この猪わ先刻の熊とわ違い、誠に馴れゝしく有頼の前に来て、背を出し、「サア私が負つて上げませう。」と云う様にしますから（中略）向こう岸に有頼を置き、又すぐに何処かえ行つてしまいました【資料３】

・忽ちあたりがキラキラとして黄金色の毛皮をした一匹の猪が有頼の前に出て来ました。「こいつ又手むかうといふのか。」と、有頼は弓を取り直して構へますと、猪は前の熊とはうつてかはつて、いかにも馴々しく静かに有頼に背を見せまして「さアお乗りなさい、川は私がおわたしいたしませう。」といひさうにいたしますから（中略）彼岸に有頼を下したと見ると、そのまゝ有頼がまだお礼もいはぬ中にフイと姿をかくしてしまひました。【資料４】

・忽ちあたりがきらゝして、有頼の前に金色の猪が跳び出しました。金の猪は有頼の驚くまへまで来ますと、馴々しく背中を出しました。「さアお乗りなさい、私が川を渡しませう」というふうに見えます、（中略）猪はやすやすと川を渡してくれましたが、そのまゝ姿をかくしました。【資料８】

〈ポイント〉猪の出現に対する有頼の対応と猪の様子の描写では何れも、①猪が突然に現れる、②猪は喋らないが有頼を背に誘う。③渡し終わったら自ら去る、と共通する。また猪の態度を「馴れ馴れしい」とした

描写も共通する。【資料３】と【資料４】では当初有頼は猪の出現を敵視し弓を構えるが、【資料８】では敵視する描写が削られているのは、何らかの意図があったのかもしれない。

○草生坂の記述

・有頼わお腹が透いて来ましたので、手当り次第に草木の葉を拷つて喰べますと、それが又大変美味しく、忽ち満腹が張りましたから、大に元気を盛り返して進みました【資料３】

【資料４】、【資料８】には草生坂の記述はない。

〈ポイント〉【資料２】、【資料３】では、草生坂で草を食べて空腹を満たすストーリーを書いているが、その後の改稿でこの話を削除している点は、単に紙面に合わせた割愛なのか、意図的なものか不明。

○断截坂で遭遇する獣

・やがて暗の中から怪しい獣が一匹飛び出しました。「おのれ何故こんなに邪魔をするか 、免しておけぬ。」と刀を抜き放つてその獣を切り殺します【資料３】

・闇の中を飛び廻る奇妙な獣が、しきりと有頼の行手を邪魔しさうに見えましたので、有頼は矢庭に腰刀を抜いて突き刺しますと、その獣はキヤツと叫んで姿をかくしてしまひました【資料４】

・その時妙な一匹の獣が跳び出して来ましたので、有頼は身をかはして剣で一突きにいたしました、獣がキヤツと叫んで逃げかくれた【資料８】

〈ポイント〉【資料３】では刀で切り殺す。しかし【資料４】、【資料８】では刀で刺すが、とどめを刺したとは書かれていない。童話として、敢えて殺すという刺激的な言葉を避け、成敗する、駆除するなど同様に、婉曲な表現に書き換えていったように見える。

ここは、前述のように近世までの口伝では解釈に揺れがあった内容である。有頼が雷獣を倒して先へ進む「サブストーリー」の初出は、管見した限りは『立山権現』だが、冷光はそれを『立山案内』でも引き、更にそれを基に【資料３】のリライトを行った可能性が高い、有頼が試練を経て立山を登る意味で、冒険譚として重要なエピソードにしたのではないかと思われる。

○カリヤス坂のエピソード

【資料３】、【資料４】、【資料８】何れにも記載がない。

〈ポイント〉冷光は【資料２】ではこの説話を紹介しているが、その後童話にリライトした作品では削除している。冷光のリライトでは、神仏の具体的な名称や宗教色を消す方向性が見られるので、滝の音が念仏に聞こえる宗教的な部分や、試練を経て玉殿窟へ向かう冒険譚的スタンスに照らせば、「念仏を聞いて軽やかに登ることができた」、という内容は意図には合わなかったのかもしれない。

○玉殿窟での遭遇

・有頼は勇み立つてその洞穴え飛び込みますと、これわ驚いた！　逃げ込んだ筈の熊が居ないで、其代わりに美しい、後光を放つた仏様が、それも胸に矢傷を受け乍ら、ニコニコ笑つておいでになるでわありませんか【資料３】

・やがて巌窟の入口に寄りそつて、そつと奥の様子を窺ひますと、闇の中からパツと眼をさすまぶしい光、有頼驚いてよくみれば、熊とはおもひの外の、かうゞしい仏が三体、それも胸に矢傷をうけながら、にこにことお立ちになつて居るではありませんか【資料４】

・やがて洞窟のふちからそつと中を覗いて見ました、すると、その窟の奥からぱつと美しい光がさして来ました。「おゝまぶしい！」有頼は眼をこすりながらよくその光る物を見ますと、まアどうでせう。熊ではなくてかうがうしい仏様がお三方、それも真中の方は胸から血を垂らしながら、にこにこして

おいでになるではありませんか【資料８】
〈ポイント〉玉殿窟で３体の仏に出会うのは、立山縁起諸本にも見られる。但し、血を流す描写には揺れがある。また、何れも遭遇した仏の名前は具体的に書かれていない。

○仏が伝えた開山

・「お前わ速やかにこの山の路を開いてお呉れ」【資料３】
・「有頼其方は世の人々の為めにこの霊山に道を開いて誰にでも山に登られる様にして呉れよ」【資料４】
・「この立山の頂までそなたに道をひらいてもらひたいのぢゃ、道をひらいて仏のいつくしみふかい心を、登る人々にしらせたいのぢゃ」【資料８】

〈ポイント〉冷光が認識した「立山開山」とは、先ず道を作り、人々が立山へ登る手段を整備することであった。有頼が出家する表現はないが、改稿の度にその目的が単なる道の整備ではなく、衆生の救済へと深まっていくようである。

３－２　浅地倫、大井冷光以降のリライト作品の特徴

明治以降刊行された「有頼開山説話」のリライト作品を時系列に並べてみると、初期に採話されたのは岩峅寺に伝わる説話であった。一方、芦峅寺に伝わる説話の刊行は遅く、一般に知られる機会も限られていたようである。
管見した中で、芦峅寺に伝わる「サブストーリー」をそのまま引いた最も古い作品は、昭和32年（1957）の【資料16】「立山の伝説　白鷹のゆくえ」である。また、最も早い時期に芦峅寺に伝わる説話をまとまった形で紹介する「⑥霊峰立山」の刊行は昭和34年（1959）なので、ほぼ同時期に芦峅寺に伝わる説話が刊行されていたことが分かる。しかも【資料16】と「⑥霊峰立山」それぞれが記述する「サブストーリー」を比較してみると、内容や表現はほとんどが一致している。

・そこには沢山の池があり、アシが生いしげった草むらなせる神坐（芦峅）があり、その側に白髪をたれ長い杖を持った三人の老婆が待っていました。（中略）　大きな流れがあって渡ることができないで困っていますと、沢山の山猿がでてきて藤をもつて橋をかけ（藤橋）てくれましたので、それを渡り、しばらくいきますと一頭の黄色の鹿が前をさえぎり、有頼はその毒気に当たって病にかかり倒れました（黄金坂）その時薬師嶽にいます神があらわれて、「汝、倒れるままに手にあたる草を取って食べよ」と告げました。有頼が何かにがい草を口にするとたちまち心がさわやかとなり病気がなおりました（草生坂）【資料16】
・そこには沢山の池があり、アシが生い繁って草むらなせる神坐（芦峅）があり、その側に白髪を垂れ長杖を持った三人の老婆が待っていた。（中略）大きな清流があって渡ることができない。思案にくれていると、沢山の山猿が出てきて、藤をもつて橋を掛けた（藤橋）幸いと喜んで渡り、しばらく行くと一頭の黄金色の鹿が前をさえぎり、有頼はその毒気に当たって病み倒れてしまった（黄金坂）その時、薬師嶽に坐す神が現れて、「汝、倒れたるままに手にあたる草を採りて食べよ」と告げた。有頼が何か苦い草を口に入れると、忽ち心気さわやかとなり病気はなおってしまった。（草生坂）「⑥霊峰立山」

両者は同じ資料を基にしていた可能性が高い[24]。これ以降も芦峅寺に伝わる説話を紹介した文献が限られていることも、芦峅寺に伝わる説話のリライト作品が少ない理由と考えられる。

３－２－１　芦峅寺と岩峅寺に異なる解釈で伝わる説話の比較と拡散

芦峅寺と岩峅寺に異なる解釈で伝承する説話の中で特徴的な部分、〈藤橋→黄金坂→草生坂〉の登山道に

纏わる説話を例に、特徴を分析しておきたい。

（１）藤橋、黄金坂、草生坂に見える猿・猪・鹿の伝承

芦峅寺､岩峅寺それぞれに伝わる内容が合体した説話は見られない。これは口伝する中でも両村の仲語は、登拝者に語る説話ではお互い意識的にそれを避けていたからかもしれない。

例えば、芦峅寺に伝わる説話の中で、猿が現れて藤蔓を編み橋を架ける設定は「藤橋」の語源になっているが、渡河と橋をめぐっては次のような四つの原則パターンが存在する。

（ア）猿と藤蔓はペアで語られる（猿が藤蔓で橋を架けるため)。

（イ）猿と猪が同時に現れる説話はない（渡し役は一つでよいため)。

（ウ）猪と鹿が同時に現れる説話はない（シシの解釈の違いで別々の話になるため)。

（エ）猪が有頼を渡した場合、黄金坂は猪が消えた場所となるが、橋を架ける役の猿と、毒気を出す役の鹿との組み合わせでは、黄金坂は「金色の鹿の出た場所」と設定される。

そして黄金坂は、岩峅寺では猪の消えた場所、また芦峅寺では草生坂は鹿が現れる場所とする原則的なプロットが存在するようである。その上で、草生坂は有頼が口にした草が生える場所として共通するが、そこに生える草には、（Ａ）鹿の毒気の解毒、（Ｂ）空腹を満たす（元気が出る）の二つの役割が設定される。つまり、鹿は毒気を持っており、鹿と草生坂の組み合わせでは（Ａ）となるが、一方の猪には毒気がないので草生坂との組み合わせた場合には、（Ｂ）の役目となる訳である。

（２）芦峅寺に伝わる説話を基にしたリライト作品

明らかに芦峅寺に伝わる説話を採ったリライトと考えられる作品には、**【資料16】**「立山の伝説 白鷹のゆくえ」、**【資料19】**「自然伝説 立山開山」、**【資料22】**「白タカとクマと立山」などがある。また昭和初期の早い時期に､芦峅寺の仲語などが語った記憶を登山者から再話したとものと見られる**【資料12】**「白鷹（立山)」、それらよりも更に潤色によるオリジナル度が高く、芦峅寺の説話に取材した形跡が見られる**【資料14】**『立山千夜一夜』、広く県内の伝説を紹介する中で、立山では芦峅寺大仙坊の佐伯幸長氏から聞き取り取材した**【資料20】**「立山開山・佐伯有頼」などを挙げることができる。何れも、必ずしも「サブストーリー」を皆載せている訳ではなく、作者の解釈や紙面の都合などの理由で割愛されたものがある（表２参照)。

歴史的には岩峅寺に伝わる説話が早くから活字化していたのに比べ、芦峅寺に伝わる別の解釈の説話がまとまった形で刊行物になったのは、前述のように昭和30年代以降と見られる。それ以前に書かれたリライト作品では、個別に芦峅寺旧宿坊家、雄山神社の関係者などから口伝の一部を取材した内容が反映しているものと思われる。

【資料16】では、有頼に開山するよう告げたのを「立山の神」として仏教色を避けている一方で、そこで発する言葉を「われは濁世の衆生を救わんがために十界をこの山に現して山を開けるのを待つていた。この立山は峰に九品の浄土を整へ、谷に一百三十六地獄の形相を現し、因果の理法を歴然と証示している（以下略)」としているのは非常に仏教的で、芦峅寺で佐伯幸長氏に取材した内容を生かしたものと思われる。

【資料19】では玉殿窟で仏に出会うが、「中央に聖観音、右に十一面観音、左に阿弥陀如来、さらに右脇に釈迦如来と薬師如来、左脇に大日如来と不動明王がおわした」としている。矢を受けた聖観音が開山を伝えるのは他には見られない。**【資料22】**の特徴については次項で後述する。

【資料14】は、白鷹の行方を教える老人のキャラクターに冷光以来の描写を踏襲している一方、主人公として有頼のキャラクターを立たせ、現れた熊に対して「オノレ待て、熊の胃(ママ)取つて薬屋に売つてくれる！」など独自のアドリブ的会話を多用して潤色するなど、臨場感を持たせたオリジナリティーに富む。それに続く藤橋、黄金坂、草生坂、断截坂、仮安坂の「サブストーリー」はすべて割愛しているが、結末を「一生をその山にさゝげてその尊い生がいを終えました、その子孫は、今だに芦倉(ママ)に伝え住み、祖先の遺志を守つて

北越の聖地立山の為に尽くし続けています。（中略）小さな堂（うば堂）を造つて其処に住み、人とつき合いも絶つて刻んだという母の木像が今でも子孫の手に伝わつています」と結んでいるところに、芦峅寺での取材の跡が窺える。

また**【資料12】**は、日本アルプス各地の山に伝わる伝承を集めて編集されたものだが、自序には「私は山男たちから、山に住む人々から直接聞いた口碑、古文書などに秘められた口碑をあさつて、こゝに山の伝奇話を集めた。」と書いている。それに従えば、「**①略縁起**」との内容の類似点から、明治～昭和初期にかけて登山の際に芦峅寺の仲語から聞いた話が基になっているようだが、著者が採話した時点で話者の記憶の曖昧さからか、それまで伝わっている内容とは部分的な差異が生じたとも考えられる。具体的な描写部分を挙げると、以下の類似点が見える。

- 白鷹の呼び寄せるため「金の扇で招くと**【資料12】**」と「金扇を上けて招玉ふ「**①略縁起**」の類似。
- 逃げた白鷹の行方を教えるのは、「八十ばかりの老翁が三人**【資料12】**」と「八十余の老人」「**①略縁起**」の類似性。その他「**⑥霊峰立山**」、「**⑦源流と変遷**」に載る、芦峅寺に伝わる３人の老婆が現れて有頼に覚悟を試問する説話との関連。
- 開山後に出家した有頼（慈興）が「自身で弥陀、釈迦、大日に三体を彫んで他の六十六体とともに、姥堂に安置した**【資料12】**」と、「麓の芦峅の里に七堂伽藍を建立し、爰に北方三身の如来、弥陀、大日に三尊を祀る「**①略縁起**」と類似。

特に弥陀、釈迦、大日の３体と他の66体の設定は、媼堂の本尊３体と66体の媼尊の類似から見ても、**【資料12】**には芦峅寺に伝わる説話の強い影響が窺われる。

３－２－２　時代背景

明治以降にリライト作品が作られていく背景には、時代相も反映していたと思われる。

（１）大正期の登山ブームとの関連から

明治末期頃から大正期にかけては、登山者を対象にした立山の登山案内書が短期間に繰り返して刊行されているが、これはその時代の登山人口増加が背景にあると思われる。その要因には、この時代に中流以上の人々が余暇休暇の使い方に登山を選ぶようになったこと。そのために登山者に提供される情報が、新聞や山岳雑誌に多く掲載されるようになったこと。そして山麓まで鉄道が開通し、容易に登山ができる社会的施設の整備されてきたことなどが指摘されている[(25)]。

この時期に刊行された登山案内書の特徴に、登山の行程や交通の他に地形、鉱物や動植物、気象、それに加え「立山と人文」といった項目を立てて、登山道に沿って簡潔に「有頼開山説話」を掲載していることがある。立山登山のルートや登山心得の紹介、地形や博物的な自然の紹介に終始せず、信仰の歴史や縁起、伝説まで掲載するのは、前述のように『立山権現』以来踏襲されることだが、これも禅定登山同様に頂上社殿を目指す登山が多かったためであろう。

そんな中で、立山登山会が立山登山ガイドの冊子**【資料５】**『立山』（大正４年〈1915〉初版）を編集して発行した。この冊子は初版発行後、大正11年（1922）まで５版を重ね[(26)]、広く人気のあったことが窺える。加えて登山ブームの中で立山の情報が求められ、他にも同様の立山登山ガイドの冊子**【資料６】**『最新越中立山案内』（大正７年〈1918〉）、**【資料７】**『立山案内記』（大正７年）が刊行された。そこに載せられる「サブストーリー」は、「有頼開山説話」の基本プロットの中ではなく登山道に沿った随所に纏わる参考情報として載せられているものである。

○藤橋・黄金坂・草生坂

- 往古は藤蔓を以て架けたりし故此名あり　橋を渡りて忽ち嶄巖崎嶇の険阪あり　有頼卿熊を追ひて此

処に来たりしに黄金色の猪現れ卿を背に乗せて川を渡せしが直ちに此地にて姿を失せたりと云ひ伝ふ、因つて黄金阪と称す、それより草生坂に至る、名の由来は有頼卿飢えて薬草を嘗めし処なる故名付けたりと此の二険阻を経て眼界稍開く所あり【資料６】

・藤橋といふ　昔は藤蔓を結んだからこの名がある　橋を渡ると忽ち険阻な阪路となる　有頼卿が熊を追ふて此処まで来た　するとどこからともなく黄金色の猪が駆け走り来て卿を背中に乗せ川を渡つて来たが　此の阪で間もなく姿が消え失せてしまつたといふので黄金阪と呼ぶ　夫れから有頼卿が飢えて薬草を食べた所だといふ草生阪【資料７】

○断截坂

・美女坂（美女杉）六部落を過ぎて断截坂となる　開祖有頼卿の雷獣を斬りし古蹟にして有頼卿此処にて正気を失ひ大汝神に霊薬を授かり給ひし霊蹟なり【資料５】

・断截阪は開祖有頼卿の雷獣を斬りし古蹟にて有頼卿は此処にて生気を失ひ大汝神に医薬を授かり給ひし霊蹟にて立山に大汝神を祀るはこの因縁によると云へり【資料６】

・有頼卿が雷獣を斬つた古蹟を断截阪といふ　卿は此処で正気を失ひ医神から医薬を授かつた霊蹟で立山に大汝神を祀るはこの縁によるといふ【資料７】

○刈安坂

・○称名滝　有頼卿が刈安阪で滝の音を聞えて念仏の声の美妙であると打喜び安々と阪を越えて此処で滝を拝んだと伝へ【資料７】

この他に吉澤庄作の【資料９】『立山遊覧』（大正 11 年）、【資料10】『立山』（大正14年〈1925〉）も登山案内と同じ系統である。吉澤は登山家でもあったが旧制魚津中学校の博物学教師であり、内容に学術的な正確さを期したようで、神保小虎（地質鉱物学）、山崎直方（地理学）、岡田武松（気象学）、武田久吉（植物学）、小泉源一（植物学）といった当時の錚々たる学者の校閲を受けている。また佐伯有義（神道学者・岩峅寺永泉坊）が序文を寄せているが、当然縁起や伝承の内容にもその校閲が入っていたと思われる。人文系は「立山の伝説」を項立てし、「かりやす坂」には「有頼此地に来りて遠く響く勝妙滝（称名滝の古名）の、さながら称名念仏の声の如く美妙に響けは容易く登り得たりとて名つけたり」と説話を載せている。その他に材木坂、禿杉、姥石の説話も記述するが、特に禿杉、鏡石については、女人禁制を犯した止于呂尼の説話ではなく、以下のような芦峅寺に伝わる有頼に仕えた少女が杉になる説話、有頼の乳母が投げた鏡が石になる説話を載せている点が注目される。登山の際に芦峅寺の仲語から聞いた話が元になっていたのかもしれない。

○禿　杉

・伝え曰ふ「開祖有頼に仕へし一女子、卿を慕うて乳母と共に此地まで来り、進むを得ず杉に化したり」と【資料９】（【資料10】もほぼ同文）

○鏡　石

・伝え曰ふ「有頼卿の姥が、尋ねて姥懐まで来たが、もう進むことが、出来なくなつて、せめては鏡にてもとて携へたる者を投げたのが石に化したり」と【資料９】（【資料10】もほぼ同文）

（２）学校教育との関連から

明治末年以降、尋常高等小学校や中学校、女学校の生徒が学校登山を行うようになるが、この流れもまた間接的に関わりがあったと考えられる。

その他に、大井冷光が大正４年を中心に県内の小学校で口述童話会を行っていたことが挙げられる[27]。**【資料３】**やそれを改稿した**【資料４】**もその演目にあったことは十分に考えられるからである。そこでは、有頼を模範的な少年としてとらえ、それに倣うことで少年の健全な成長に繋げようとした冷光の意識が、大正期の「児童中心の個性教育」や「道徳意識の発達」を踏まえた学校現場の思いに重なり、道徳的な読み物に援用されていたのではないかと思われる。

【資料13】「高志の白鷹 佐伯有頼公」は富山女子師範附属小学校で昭和９年（1934）に編集されたものである。既に他県では大正時代から師範学校の附属小学校で児童への修身教授のための実践的な研究が見られており[28]、本県でも同様の動きがあったのではないかと想像される。そう考えると**【資料13】**の内容は、修身的な教育で副読本のような利用を想定して作られたのではないかと思われる。内容の比較については、後述する。

次に、**【資料22】**「白タカとクマと立山」では、巻頭に置かれたはじめのことばに、「立山町と自分のかかわりについての理解を、今まで以上にすばらしいものにしていただけたらと祈ってやみません」。また、あとがきには「郷土立山町のほこりとして、末長く心にとどめておきたい、先人の話やいい伝えなどを書いたものです」とあるように、郷土教育、ふるさと学習のために同町の小学生向けの副教材を想定してリライトされた作品と考えられる。本文は、文末に「この物語は、古い書物『立山縁起』に立山開山にまつわる物語として書かれている」と示した上で、芦峅寺に伝わる説話を基にしている。また、有頼が横から現れた熊に矢を放った場所が「横矢」→「横江」の地名譚、熊が流した血が懸った場所が「血懸」→「千垣」の地名譚として挿入される他、「サブストーリー」が作られた場所「藤橋」、「草生坂」、「断截坂」、「刈安坂」をほぼすべて文末に〈 〉で載せており、郷土立山に伝承する「有頼開山説話」の全容を紹介しようとしていることが窺われる内容である。

また、神仏名は生かされて「立山の大汝の神様」、「阿弥陀如来様」の言葉が出て来るが、宗教的という意味ではなく、郷土に伝わる説話の内容をなるべく原話を生かしつつ、易しくリライトした意図が見える。

○藤　橋

・どこからともなく数十匹のサルが集まり、藤づるを持ちよって、みるみるうちにかけ橋を作り、またたく間に姿を消してしまった、（中略）その橋を渡り、おく山へ進もうとした。すると今度は、金色の大シカがあらわれ、前に立ちはだかり、行手をさえぎった。「じゃまだてするな。」気の強い有頼は、刀を抜いてその大シカにたちむかい、うちたおそうとしたが、大シカの毒気にあてられ、気が遠くなり、その場にたおれてしまった。〈藤橋〉

○草生坂

・そばらくして息をふきかえした有頼の体は、寒さとつかれと空腹で思うように動かなかった。（中略）岩かげに芽生えている青草をとって食べると、不思議や、体中に力がみなぎり元気をとりもどした。〈草生坂〉

○断截坂

・歯をくいしばり、いくつかの坂をこえた時、にわかに辺りがまっ暗になり、いなずまがひらめき、雷鳴がとどろき、とつぜんうなり声をあげた雷獣が暗やみからおそいかかってきた。すかさず、有頼は、刀をぬいてきりつけると、たしかな手ごたえがあり、急にまわりが明るくなり、雷鳴もおさまった。〈断截坂〉

○仮安坂

・有頼はさらに、けわしい山坂をはうように登っていったが、ついに力がつき、動けなくなった。その時である。どこからともなく、おおぜいの仏様の、合掌念仏をとなえている声が聞こえてきた。それをじっと聞いていると、つかれもなおり、そのけわしい坂を、やすやすと登りつめることができた。〈仮安坂〉

（３）観光化との関連から

【資料21】『立山の民話』、**【資料26】**『立山と黒部の昔ばなし』は、立山の観光関連企業、立山黒部貫光、立山貫光ターミナルが刊行したものである。どちらも「サブストーリー」は黄金の猪による渡河のみを載せている。

立山が観光地として脚光を浴び立山黒部アルペンルートが開通すると、昭和50年代はじめからターミナル駅売店などでの販売を目的に観光客用に立山に纏わる昔話を集めた小冊子が作られるようになった。発行部数は不明だが、**【資料21】**は好評だったようで、毎年のように装丁を改版しタイトルを変え、立山黒部アルペンルートの旅記念スタンプを押す頁も付いた異本が増刷されたようである。また**【資料26】**はタイトルを変えた『立山の昔話』（立山黒部貫光・立山貫光ターミナル、刊行年不明）も作られている[29]。国立国会図書館の所蔵目録情報には「100万部出版記念特別号」と入った版も見えるので、観光客用に大量に販売されたことが窺われる。県内外への「有頼開山説話」の拡散という点では非常に大きな役割を果たしていたと言えるだろう。

何れも基本的な「有頼開山説話」のストーリーに大きな違いは見られないが、それでもリライトした作者の感性や言葉の選び方で差異の生じている箇所が見られる。玉殿窟の場面ではそれぞれ、

・その時、有頼少年は矢傷をうけながら立っておられる神の姿を見たのです。あまりのかしこさにおどろきひれふす有頼に「大熊も金色の猪も、みな立山の神の化身なり。汝、僧になって、この山を開くがよい。」とお告げになられました。**【資料21】**

・金色に輝く阿弥陀如来が立っておられました。なんと、阿弥陀如来の胸に矢が立っているではありませんか。思わず、ひれふした有頼に、仏がお告げになりました。「大熊も白鷹も、猪も、立山神の化身（神仏が、姿を変えてあらわれること）であったのです。さっそく僧になって、この山を開きなさい」**【資料26】**

とある。両者とも「猪も阿弥陀如来の化身であった」と告げるが、この表現は他のリライト作品には見られない。また、何れも有頼に出家を促しているが、**【資料21】**では神仏の名前を出さず「神＝立山の神」の構図なのに対し、**【資料26】**では阿弥陀如来の名を出し「阿弥陀如来＝立山神」とする点で仏教色が残されているようである。

３－２－３　リライトの方針や系統の小括

（１）推定されるリライトの方針

明治以降、プロットが胚胎していた宗教的な枠を離れ、民間説話として拡散する際に大きな役割を果たしてきたのは、伝承を採話しリライトして創作された物語やお伽噺であった。

明治末から今日までたくさんのリライト本が刊行されているが、小論で資料としたうち童話や伝説集・説話集に載るリライト作品の表現を比較したとき、それぞれに作者の解釈が加わるのは当然として、リライトの傾向、或いは方法が見え、それは凡そ次の４点にまとめられる。

（ア）元々は宗教的な説話であったことで書かれている特定の神仏名を書き換え、宗教色を希薄にする。

（イ）登場するキャラクターに具体的な描写の肉付けを施し、人格を持たせたり台詞を創作し会話を挿入したりすることでストーリー性を強め、臨場感を高める。

（ウ）有頼の登山行程にすべてのサブストーリーを網羅するのではなく、有頼の出自から開山、入滅まで

の場面を選択的に割愛し、要約している場合が多いようである。そこにはリライト者の意図があったと思われるが、原稿の長さの制約も関係しているのではないかと思われる。

（エ）「有頼開山説話」に登場する者、または別のキャラクターを登場させた全く新しいオリジナルでのスピンオフのエピソードを創作し挿入するような形の改変は見られない。

（２）冷光の童話からのリライト作品の系統

現在読まれる「有頼開山説話」は、先行して刊行された内容を基にして大なり小なり表現を変えながらリライトが繰り返されてきた。そのため、細部の表現や登場人物や場面設定を子細に比較することで、リライトの際に作者が参照した基の話の系統を遡れるものがある。

冷光の童話をリライトした作品には、**【資料３】**を基にしたものと**【資料４】**を基にしたものとが存在するが、３－１の（２）で前述したように、描写の違いを比較することでどちらが基にされたのか区別できる箇所がある。リライト作者の選択の意図を知るには至らないが、これは冷光作品の評価にも関係する点であろう。

①【資料３】「佐伯有頼」をリライトして創作されたと考えられる作品

【資料13】は、前述のように学校教育での副読本に利用されたと見られるものだが、冒頭に東宮時代の昭和天皇の御歌を載せ、続けて「この御歌は、おそれ多くも、今上天皇が東宮におはしまたころ、我が富山県へ行啓あそばされた時、大空にそびえてゐる立山の雄々しい姿を御らんになつて、お読みあそばされた御歌であることは、皆さんよくごぞんじの筈であります」と前書きを付ける。続けて、**【資料３】**では「仏様」とあった部分をすべて「神様」に、また「阿弥陀如来」を「立山権現」と書き換えたのは、皇国史観に基づく時代背景の影響があろう。その他は**【資料３】**の表現や台詞回しをほぼそのまま使ってリライトしているが、**【資料３】**は会話を多用しているので、低学年の児童にも分かり易いと考えて使用したのかもしれない。

②【資料４】『立山昔話』をリライトして創作されたと考えられる作品

【資料３】と**【資料４】**の違いは、草生坂の部分の有無の他、３－１の（２）に挙げたように、冷光の改稿による比較の〈ポイント〉に見える。管見した中で**【資料４】**とのリライト関係が分かる作品は、**【資料15】**「霊峰立山を開いた有頼」、**【資料17】**「立山の開山」、**【資料23】**「有頼少年と白タカ―立山開山―」、**【資料25】**「立山開山の話」の４作品である。

【資料15】は、登場人物の表現や場面設定の類似、草生坂の場面の割愛などで**【資料４】**の内容と表現とほぼ一致するが、以下のように僅かに創作を加え書き改めた部分が散見される。

・或る日のこと、この有頼は二人の召使をつれて野原に出て、鷹狩りをしようと思ひました**【資料４】**
・ある日のこと、一人の召使をつれて野原にいで鷹狩りえおしようと、父の飼っている白鷹をお願いして借りだし、こおどりして出かけた。**【資料15】**

・「アア、その白い羽の鷹ならはこの方角、東南の方を指して尋ねてごらん」**【資料４】**
・「ああ、あれか、あの白鷹なら、北の方をさして尋ねてごらんなさい。」**【資料15】**

藤橋で黄金色の猪を発見したとき、その前の場面で熊が出てきたことを承けて、

・「『こいつ又手むかうといふのか』と有頼は弓を取り直して構へますと」**【資料４】**
・「『一難去ってまた一難来るか』と弓を構えると」**【資料15】**

と、特徴的な台詞の創作が見られる。

【資料17】も部分的に創作を加え書き改めつつ基本的な表現はほぼ類似するが、直接的には**【資料15】**を基にリライトしたと言った方がいい作品である。

そこで、**【資料４】**と上記のリライト作品４つを校勘すると、次のような特徴が見える。

・「召使いの数」は【資料４】では「二人」、【資料15】と【資料17】は共に「一人」とする。
・白鷹の去った方角は、【資料４】には「東南の方」、【資料 15】では「北の方」とあったが、【資料 17】では「辰巳（東南）」となっている。
・【資料23】では、草生坂の割愛、白鷹を呼子笛で呼び寄せようとする点、熊が白鷹ではなく「有頼に」襲いかかってきた設定で書かれているなどの点では【資料４】と描写が一致する。但し紙面の都合からか、藤橋から仮安坂までの「サブストーリー」はすべて割愛しており、内容の関係性はそれほど強いとは言えない。白鷹の行く先を教える森尻権現と、数珠と剣を手にした刀尾天神を書いているが、『和漢三才図会』から引き写しによる誤記[30]は無い。
・【資料25】は、全体を簡潔に要約しているが【資料23】と同様の点に加えて、断截坂で遭遇した獣にとどめを刺していない点で【資料４】を参照した形跡が見られる。

結びに代えて

明治以降「有頼開山説話」が拡散した経緯を見ると、霊山の伝統、立山の民俗や地理を踏まえた浅地倫による登山記『立山権現』の刊行が大きな役割を果たしていたことがわかる。それに続き大井冷光は、岩峅寺の伝承に取材して採話したストーリーに潤色し解釈を加え「サブストーリー」を選択した童話を創作したが、そこには自身の立山や有頼への思い入れも込めた有頼観の転換があったと考える。その後のリライト作品の多くが、そのような初期の童話作品などをアレンジするものであったから、「サブストーリー」については、結果的に浅地倫や大井冷光が最初期に採話しリライトをした岩峅寺に伝わる説話を多く紹介することになったと考えられる。

そして近代登山の中で山を楽しむ人々との関係では、大正時代の大衆登山ブーム時に相次いだ登山案内書の刊行や、立山黒部アルペンルート開業に関連して観光客向けに作られた各種の冊子も、同じ文脈の中で見ることができるだろう。

また富山では、小中学生向けに様々なリライト作品が作られてきたことも特徴と言える。それらを通して郷土学習の中で立山の歴史や信仰文化に触れる機会が少なくないため、児童生徒にとっては最初に出会った童話や伝説に書かれた「サブストーリー」が記憶に定着することになるのであろう。

リライト作品とは異なるが、当館遙望館で開館当初から上映する人文系映像「新立山曼荼羅絵図」（島村達雄監督、白組制作、1990年）は、有頼の渡河シーンでは猿が藤橋を架ける説話を採った一方で、勿論そこには制作者の解釈があった訳だが、鹿や草生坂、断截坂などのサブストーリーはカットされている。アニメーションやＳＦＸを駆使して視覚的に分かりやすく訴求力のある作品で、これまでたくさんの方々に観ていただいているので、「サブストーリー」拡散の上で果たした役割は小さくない。また展示館エントランスに設置したビデオブースの「立山物語」（北日本放送制作）も「有頼開山説話」の紹介で開館以来放映しているものだが、『和漢三才図会』を基にしつつ、脚本の表現やキャラクター設定を見ると【資料14】が参照されていたようである[31]。これら映像作品の内容も、少なからず「サブストーリー」の定着に関与してきたと言ってよいだろう。

立山信仰に関連する伝説には「有頼開山説話」以外にも、山中の登山道には荒唐無稽な話も含め、豊かな内容の説話が形成されている。小論では「有頼開山説話」に限定した資料を基にしたために割愛したが、女人禁制にまつわる美女杉、禿杉、姥石、鏡石、材木石の説話や、桑谷、獅子が鼻、立山地獄、みくりが池など多数があり、これらにも芦峅寺、岩峅寺でそれぞれ解釈の異なる説話の伝承が散見される。それらもまた、衆徒が自坊に投宿した登拝者や布教先へ出かけ、立山曼荼羅を絵解きした際に語られたり、立山へ禅定登山に訪れた者に仲語が現地で道々語って聞かせたりしてきたものであろう。

長い歴史の中で淘汰された話もあっただろうが、今日まで「立山信仰に纏わる様々な伝説」として流布し

てきたものは、立山を彩る無形の資料群である。

解釈の異なる様々な「サブストーリー」に対して、聞き慣れた一方を正しい説話とか、馴染みのないものが異説とするような見方は偏見で、先に広く拡散したため聞き慣れているものに親しんでしまっただけのことである。本来はたくさんの説話を生んだことを、立山の自然とそこで暮らす人々の関わり豊かさとして認識すべきであろう。その意味で、現在も多様な説話のバリエーションを採話し、残すことの重要さは増していると考える。

［註］

（１）加藤基樹氏は、隠岐の島の高田神社に南北朝時代の嘉慶２年（1388）に奉納されたものを基に慶長４年（1599）の写本で元和元年（1615）に奉納された丹表紙本『高田大明神縁起』に見える「在能、有頼、求メシカハ熊獣ヲ血塗ニ、聖容顕岩室而、示金身」から、これを有頼の初出としている。加藤基樹「立山開山縁起研究の展望」（富山県立山博物館平成27年度後期特別企画展「立山と白山―北陸霊山の開山伝承―」解説図録）59～61頁参照。それに対して山吉頌平氏は、慶長４年（1599）の写本の中にある有頼の記述は、『麗気記拾遺鈔』（応永８年〈1401〉）にある有頼について記載した部分から引き写されたものであること基に、現時点で有頼の初出史料を『麗気記拾遺鈔』としている。山吉頌平「丹表紙本『高田大明神縁起』の再検討」（『富山史壇』193号、2020年）、１～13頁参照。何れにしても『伊呂波字類抄』、『類聚既験抄』よりも後の初出となる。

（２）加藤基樹「立山権現［矢疵阿弥陀如来］の史料的考察―立山信仰と生身仏信仰―」（富山県立山博物館『研究紀要』24号、2017年）、53頁参照。

（３）廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、昭和59年）、53～59頁参照。岩峅寺延命院に伝わる『立山手引草』は、開山縁起に「サブストーリー」が挿入された内容で、絵解きの台本と言われているが、現在それ以外に同様のテキストは発見されていない。

（４）廣瀬誠「立山開山の縁起と伝承」（高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977年）、225頁参照。宿坊の衆徒は各地で絵解きによって開山の由来を語り、仲語は山中を案内し実地唱導を行う立場であったことを紹介する。

（５）翁久允「立山伝説の考察」（『高志人』第２巻９号、1937年）、63頁参照。昭和の初め頃に立山ガイドと登山した際のことと見られるが、「この間、『仲語』と山を歩きながら、立山伝説を少しきかしてくれとねだつたら、勿論われわれの知つている範囲以外の何物も知ってはゐなかったけれど、彼の語り口は頗る嘲笑的だつた。（中略）みんな昔の坊主や神主共の子供だましなお賽銭取りの為に作つたようなもので、今の人達に話しなどしたら叱られますよ、と言ふのだつた。仲語それ自身が昔は、この伝説が一つの金袋でもあつたのだ。だから彼らの悧巧なもの共は坊主以上に勝手な伝説を創作したことであつたらう。鍋冠杉だの、尼の小便所だの（中略）、言はれて見れば、なるほどさうかなァと頷かれるやうな断片的な荒唐無稽な伝説は、恐らく彼らに依つて作られたものに違ひない」とある。また、大井冷光も『立山案内』の中で「古へは御中語様と称へて甚だ山法師気質を有し、登山者に対し、山中の奇岩怪木に誇大的迷説口碑を付して浄財喜捨をすゝめしもの」と書いている。近代以降に立山で禅定登山に関わっていた者の中にあった仲語に対する考え方が窺われる内容である。

（６）五来重「寺社縁起からお伽噺へ」（宗教民俗集成６『寺社縁起からお伽噺へ』、角川書店、平成７年）、43～51頁参照。五来氏は寺社縁起について「歴史的縁起」と「物語的縁起」の分類を主張し、物語的縁起からお伽噺や昔話への発展の視点を提起している。また民間説話についても何らかの形で奇跡や怪異、呪術など宗教性が必要であったと主張する。同じ視点から、神仏の加護に依って難を逃れたり、神仏の化身としての動物を登場させたりする点を指摘する。

（７）昭和30年代後半から50年代にかけて、芦峅寺、岩峅寺の旧宿坊家、岩峅寺雄山神社などが所蔵する文書類の調査、研究者による翻刻が進められ、『越中立山古文書』（木倉豊信編）、『越中立山古記録』（廣瀬誠・高瀬保編）が刊行された。『富山県史』や『立山町史』の付録にも立山の縁起類を翻刻し収録している。小論での引用は、『富山県史 史料編Ⅰ 古代』や『立山町史 上』に収録の翻刻による。

（８）『和漢三才図会』の木版本では「刀尾」は「力尾」と誤刻され、「力尾天神」となっている。そこから直接引用したリライト作品では、誤りのまま「力尾天神」としているものがある。また「力尾大神」としたものも見られるが、これは版が違う木版本の後刻のためか、リライトした際に見誤ったものか確認できない。

（９）『和漢三才図会』巻第38 獣類の「獅子」の項では「狻猊」を当て、「西域に出づ、状虎の如にして小なり、黄色亦金色の尨犬如にして頭大く尾長し」と説明されている。

(10) 立山曼荼羅には猿のみが描かれるもの、有頼と猿がペアで描かれたものは見つかっていないので、藤橋の説話は、絵解きで語られる際には、有頼の渡河よりも高僧が訪れたことを強調するものになっていたとも考えられる。
(11) 中村元監修・松本照敬訳『ジャータカ全集 5』(春秋社、1982年)、89～93頁参照。
(12)『越中志徴』(富山新聞社、1973年)、592頁参照。森田柿園『越中志徴』巻6には『卍山広記立山寄付券記序』を引用し「山径険而茅塞。山川急而無レ橋。古来欲レ登レ者無レ不レ患レ之。茲加州金沢道俗。見二其如一レ是。捨レ財作レ券。寄二附之岩崎(ママ)寺一。」とある。岩峅寺にとって、実際の「藤橋」が浄財によって架けられ岩峅寺が管理する事実があることを尊重して、芦峅寺に伝わる「猿による架橋」という伝承は排除する立場であったのではないかと思われる。
(13)「浄土宗」公式サイト 浄土教新聞「連載 仏教と動物 第4回 師子にまつわるお話」https://jodo.or.jp/newspaper/special/2276/(参照 2024/11/4)参照。「獅子座」とは獅子の姿を模った仏座で、日本にも中国から「唐獅子」の伝来と同時に仏教の獅子座の思想も伝わった。奈良時代や平安時代に密教が伝来するが、それら密教の仏には獣を模った仏座(獣座)に坐るものが多い。その中で獅子に乗るのは、毘盧遮那如来(大日如来)、文殊菩薩、また不動明王など、とある。また『望月佛教大辞典』(増訂版)には「大聖不動明王守護国界法にも『金色の師子王に乗りて座とす。左右には八童子使者侍立し、本尊を囲繞す』」とある。
(14)『立山町史　別冊』(立山町、昭和59年)、205頁「藤橋の伝説」参照。
(15) 立山曼荼羅金蔵院本(金蔵院蔵)。当館では芦峅寺宿坊の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅に分類している。
(16) 奥澤真一郎「Ⅳ 立山に魅せられた越中の文人たち」(富山県立山博物館平成26年度特別企画展「近代の文人と立山」解説図録)、56頁参照。
(17) 廣瀬誠「解題」(『〈復刻版〉立山連峰誌料』、新興出版社、1991年)、11頁参照。
(18) 大正期には学校や講堂などで童話を子供たちに語って聞かせる「口演童話」が盛んであり、冷光も巌谷小波や久留島武彦らと供に積極的に童話の口演を行っていた。その際に「有頼開山説話」をリライトした自作の童話も語っているが、これは家庭内の親子間での語りとは性格が違い、刊行物を読むことで拡散することと同様と見てよいと考える。
(19) 加藤基樹「こころをうつす絵鏡―立山博物館会場における展示概要―」(富山県立山博物館開館20周年企画展「綜覧 立山曼荼羅」解説図録、2011年)、124～127頁参照。
(20) 廣瀬誠「山と児童の文学者　大井冷光の生涯」(『とやま文学』第8号、平成2年)、126～138頁参照。
(21) 註(20)に同じ。
(22) 大井冷光は、「少年銅像を建設の計画を持つて五年振りに富山に帰る」(『少年』第142号、時事新報社、大正4年)の中で、「立山に初めて登った小勇士この越中の代表的の名山立山には昔からこの国の男と生まれて十三になるまでに必ず登ることと定まつてゐた、あの九千九百尺の頂上の室堂に一夜をあかし、権現様に参詣をして、(中略)麓までかへると、そこでは村中の人々から馬を飾り酒や肴を持つて、凱旋将軍を迎へる様に賑はしく迎へられる。(中略)村へ帰へると、先ず氏神様へ参詣をして、個別に挨拶も済んでさて愈よ祝宴となる。この立山帰りの祝宴は又或意味に於いてこの児首尾よく青年となり得た、立山登山したことによつて一人前の男子となり得る資格を備へたと、いふその意味の祝宴でもあつたのだ。(中略)この様に立山登山なることは旧藩時代から越中全国に亘つて風教上の力強い感化を与へてゐるものである。」と書いているが、これは自身の体験ではなく、また目撃談でもない。また、廣瀬誠氏は『立山のいぶき』(シー・エー・ピー、1992年)で、古来富山にあった元服登山の習慣によって、縁起に書かれる開山が有若によるものから有頼を主人公にするものに変わった可能性を指摘する。
(23)『立山昔話』には、大井冷光が建立を立案した「佐伯有頼像」の原型を畑正吉が製作する際にも、佐伯有義の考証を受けたことが記されている。
(24)『立山のはなし』の作者野島好二氏は、同書に「私は先日、芦峅寺にある開山堂に詣で、親しく立山開山佐伯有頼の法体慈興上人の尊像をおがませていただいた」と書いている。その際に『霊峰立山』筆者の宮司佐伯幸長氏に取材した可能性が高く、幸長氏が纏めた草稿などの資料も参照していた可能性が推察される。
(25)「Ⅲ 大衆、山へ―社会と山の相互作用―」(富山県立山博物館平成20年度特別企画展「大衆、山へ」展示解説書)、16～27頁参照。
(26) 立山登山会が編集した『立山』は大正4年に初版発行後、大正6年には内容はそのままに『立山案内』と改題して立山登山会が発行、以後大正7年には3版を発行する。4版は同8年に雄山神社社務所が発行。同11年には再び『立山』と改題し雄山神社社務所が発行している。
(27) 大村歌子編『天の一方より 大井冷光作品集』(桂書房、1997年)、「大井冷光(勝信)年譜」414～415頁参照。大正4年5月から12月までに県内で60余りの小学校や社会団体で口演を行っていたことが紹介される。

（28）篠崎正典「大正期の修身教授における「道徳意識の発達」の導入―長野県内小学校修身訓練研究会（1913）への対応に着目して―」（『信州大学教育学部研究論集』第17号、2023年）、24～35頁参照。

（29）富山県立図書館には一種のみ所蔵するが、目録を見る限り国立国会図書館には15冊の所蔵がある。昭和50年代には毎年のように改版して刊行し、お土産品として売り上げていたもののようである。

（30）**【資料 9】**、**【資料10】**、**【資料11】**、**【資料14】**には、何れも『和漢三才図会』木版本や初期の翻刻本に見られる、刀尾天神を「力尾天神」、「力尾大神」とする誤記をそのまま引用している。

（31）脚本、制作は川内康範。漆間元三氏が内容に助言を行ったようである。作品中で採られている「サブストーリー」では、有頼が飛来した白鷹を「白丸」と名付けて飼うこと、刀尾天神に会いそこで伝言を受ける場面、有頼が刀尾天神に「貴方は鳥の言葉が分かるのか」と尋ねる台詞などが**【資料14】**にのみ見られる特徴的な点である。

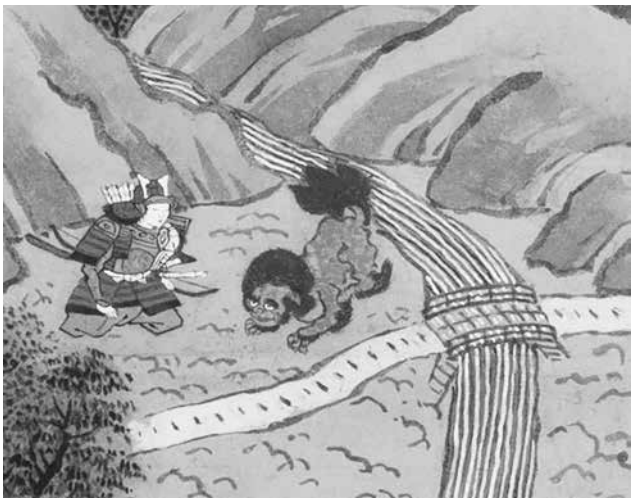


写真１
「立山曼荼羅 専称寺本」（富山県立山博物館蔵）より部分
川の手前に描かれる「有頼」（左）と「黄金の獅子」（右）

写真２
「立山曼荼羅 立山博物館I本」（富山県立山博物館蔵）より部分
川を挟んで左に僧、右に猿。川を渡った後に倒れる有頼。中央の橋は左の大岩（座禅岩）に巻き付けられた藤蔓が表現され、中央下の川べりには逃げる熊が流した血のような跡が描かれる。

表２　「明治以降のリライト作品」

番号	書　名	作者 / 編者	刊行年	発行元	有頼誕生の場所	遭遇して白鷹の行方を示す者（風体）	覚悟を問われる	藤橋渡河
1	『立山権現』	浅地　倫	明治36（1903）	中田書店	記載なし	１老翁（名前なし。垢じみた布子を纏って、銀線を束ねたような髪を垂らし、禿頭隆く炯然たる眼球が深く窪み言葉が倨傲な風体）	記載なし	金色の猛猪が現れ、有頼を背負う。
2	『立山案内』	大井冷光	明治41（1908）	清明堂書店	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猛猪が現れ、有頼を乗せて渡る。
3	『越中お伽噺 第二編』「佐伯有頼」	大井冷光	明治42（1909）	清明堂書店	未　詳	妙な格好の１人の老人（名前なし。銀の針金のような長い髭、眼をぎらぎらさせて恐ろしそうな人）	記載なし	金の光を放った猪が現れ、その背に乗る。
4	『立山昔話』	大井冷光	大正4（1915）	有頼会	未　詳	気高い老人（銀の針金のような長い髯、ぎらぎらした眼で有頼を見る）	記載なし	黄金色の毛皮をした猪が現れ、有頼はその背に乗って渡る。
5	『立山』（『立山案内』）	立山登山会	大正4（1915）	立山登山会（雄山神社社務所）	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が現れ、有頼を背に乗せて渡す。
6	『最新越中立山案内』「立山と人文」	高見清平	大正7（1918）	高見活版所	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が現れ、有頼を背に乗せて渡す。
7	『立山案内記』「立山と人文」	小柴直矩	大正7（1918）	高見活版所	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が走り来て、有頼を背に乗せて渡す。
8	『母のお伽噺　プリムラの巻』「白い鷹」	大井冷光	大正9（1920）	ヨウネン社	未　詳	気高いお爺さん（髪も髯も銀色）	記載なし	金色の猪が跳び出す。有頼は背にとび乗り、川を渡る。
9	『立山遊覧』「立山の開基に関する伝説」	吉澤庄作	大正11（1922）	中田書店	未　詳	①森尻の権現 ②１老人（右手に剣、左手に念珠） →「当山力尾大神」と明かす	記載なし	記載なし

表１　「有頼渡河の場面に特徴的な立山曼荼羅」

番号	名　称	所　蔵	宿坊家との関係	特　徴	備　考
1	泉蔵坊本	円隆寺	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前で座禅を組む僧。	
2	宝泉坊本	個人	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹、奥に２匹。藤橋手前に旅装の僧。	３と模写関係
3	吉祥坊本	立山博物館	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹、奥に２匹。藤橋手前に旅装の僧。	２と模写関係
4	立山博物館Ｄ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹。藤橋手前に旅装の僧。	
5	立山博物館Ｆ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	
6	立山博物館Ｉ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋奥に猿３匹。藤橋手前に旅装の僧。	黄金坂・草生坂付近に倒れた有頼。藤橋付近に熊の血の跡。座禅岩に藤を巻く。＊写真２参照
7	立山町本	立山町	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	芦峅寺長覚坊旧蔵
8	筒井家本	個人	芦峅寺	藤橋手前に猿３匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	芦峅寺宝龍坊旧蔵
9	立山黒部貫光株式会社本	立山黒部貫光株式会社	芦峅寺	藤橋奥に猿２匹。藤橋手前に旅装の僧。	
10	中道坊本	個人	岩峅寺	藤橋手前に黄金の獅子。	
11	専称寺本	立山博物館	岩峅寺	藤橋手前に黄金の獅子。	＊写真１参照
12	竹内家本	個人	岩峅寺	藤橋手前に有頼が背に乗る黄金の獅子。	

黄金坂	草生坂	断截坂	カリヤス坂	備考／その他の特徴事項
向こう岸に着き、振り返ると猪は姿を隠していた。	空腹のため止むなく辺に茂る草を摘んで嘗め、食べると忽ち満腹する。	妖雲が沸き、強雨、閃光雷、鳴雷の中雷獣が現れ、刀で斬ると雲が去り雨止み天は晴れた。	遠雷のような称名滝の轟音。仲語は「ここで人語を発すれば滝壺から竜蛇が来て呑まれる」という。	カリヤス坂で仲語が語る内容は付会だが、景色は物凄いとの感想。
猪は渡河の後姿を隠した。	有頼が飢えて草を食べた所	雷獣を退治した所	有頼は瀑声を聞き、念仏の声の如く美妙なりと喜び、易々と坂を越えた。	玉殿の岩屋では、夜に奇瑞の夢を見る。
有頼を置き、すぐにどこかへ行く。	空腹で、手当たり次第に草木を毟って食べると大変美味しく忽ち満腹になり、元気を盛り返す。	俄かに雷雨。闇から出てきた怪しい獣を刀で切り殺すと、明るく好天になる。	記載なし	玉殿の岩屋では、御光を放った仏様が胸に矢傷を受けながら笑っている。
有頼がお礼も言わない中にフイと姿を隠す。	記載なし	俄かに曇り雷鳴、夕立ち。闇中の奇妙な獣を腰刀で刺すと姿を隠し、晴れて明るくなる。	記載なし	玉殿の岩屋では、神々しい仏は３体、胸に矢傷を受けながら立つ。資料４は資料３を改稿したもの。
猪の姿が失せた。	飢えて薬草を嘗めた。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	記載なし	大正４年に第１版発行の後、6、7、8、11 年に版を重ねる。
黄金色の猪の姿が失せた。	飢えて薬草を嘗めた処。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	記載なし	資料７と資料８は同年同月に同じ所（高見活版所）から発行され、内容も同じ。
黄金色の猪の姿が消え失せた。	飢えて薬草を嘗めた処。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	滝の音が念仏の美妙な声に聞こえ喜び、坂を越えて滝を拝んだ。	
そのまま姿をかくした。	記載なし	真っ暗になり夕立ち。闇の中の奇妙な獣を剣で刺し、逃げると雨が止み晴れあがる。	記載なし	玉殿の岩屋では、仏様がお三方、真ん中の方は胸から血を流す。資料５は資料４を改稿したもの。
名称のみ	名称のみ	名称のみ	遠くの滝の音が称名念仏のように微妙に響き、容易に坂を登り得た。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。

番号	書　名	作者 / 編者	刊行年	発行元	有頼誕生の場所	遭遇して白鷹の行方を示す者（風体）	覚悟を問われる	藤橋渡河
10	『立山』「立山の開基に関する伝説」	吉澤庄作	大正14(1925)	北陸出版社	未　詳	①森尻の権現 ②当山力尾大神（右手に剣、左手に念珠）	記載なし	記載なし
11	『史蹟名勝天然記念物　調査報告　第九号』「立山の史蹟伝説」	小柴直矩	昭和2(1927)	富山県学務部	未　詳	①森尻の権現 ②一老人（右手に剣、左手に念珠）→当山力尾大神と明かす	記載なし	有頼が金色の猛猪に背負われて渡った跡。
12	『山の伝説　日本アルプス篇』「白鷹（立山）」	青木純二	昭和5(1930)	丁未出版社	未　詳	夢の中で八十ばかりの3人の老翁（阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来）が現れる	3人の老翁から（鷹の行方と同時に）	記載なし
13	『高志の白鷹』「高志の白鷹　佐伯有頼公」	富山女子師範附属小学校編	昭和9(1934)	富山女子師範附属小学校	未　詳	妙な身なりをした１人の老人（名前なし。銀の針金のような長い髭、眼をぎらぎらさせながらそばまで来る）	記載なし	金の光りを放った猪が出てきて、その背に乗って渡る。
14	『立山千夜一夜』	池上秀雄	昭和22(1947)	中田書店	都（有若は息子の有頼を連れて越中の国に着く）	①たきぎを担った１人の老人 ②１人の老人（髪も眉もひげも雪のように真白で、右手に剣、左手に数珠を持ち、けいけいと有頼睨む。当山力尾天神の化身）	記載なし	記載なし
15	『越中いまはむかし』「霊峰立山を開いた有頼」	岩佐虎一郎	昭和31(1956)	越中史話会	都（有若は息子の有頼を連れて都を出発、越中の国に着く）	気高い老人（名前なし。銀の針金のような長いひげの生えた、ギラゝした眼で有頼をにらみつける）	記載なし	黄金色をした猪が現れ、有頼は背に乗って渡る。
16	『立山のはなし』「立山の伝説　白鷹の行くえ」	野島好二	昭和32(1957)	北日本文化協会	越中（大汝の神に授けられる）	記載なし	3人の老婆から（芦峅で、白髪を垂れ長い杖を持つ）	沢山の山猿がでてきて藤をもって橋を架ける。
17	『越中伝説集』「立山の開山」	小柴直矩	昭和34(1959)	富山県郷土史会	未　詳	気高い老人（名前なし。銀の針金のような長い髯、ギラギラした眼で有頼を睨む）	記載なし	黄金色の毛皮をした猪した猪が出てくる。有頼はその背に乗って渡る。
18	『立山のてんぐ』「白鷹を追う少年」	稗田菫平	昭和46(1971)	北国出版社	未　詳	１人の仙人（名前なし）	記載なし	金のいのししが有頼を背に乗せて渡す。
19	『越中の伝説』「自然伝説　立山開山」	石崎直義	昭和51(1976)	第一法規	越中（刀尾明神から夢のお告げで授かる）	１人の老人（名前なし）	記載なし	たくさんのサルが出てきて藤蔓をつないで橋を架ける。
20	『日本の伝説 24　富山の伝説』富山伝説散歩「立山開山・佐伯有頼」	石崎直義・大島広志・辺見じゅん編	昭和52(1977)	角川書店	記載なし	矢を放った熊を追う途中で会う、芦の生い茂る神座（芦峅）の老婆	記載なし	記載なし
21	『立山の民話』「立山開山」	立山民話研究会企画	昭和52(1977)	立山黒部貫光／立山貫光ターミナル	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪があらわれ、猪の背を借りて渡る。
22	『立山町の歴史物語』「白タカとクマと立山」	高島昇一他	昭和56(1981)	立山町教育センター	越中（大汝の神様に授けられる）	記載なし	記載なし	数十匹のサルが集まり藤づるで橋をかけ、消え去った。
23	『富山の伝説』「有頼少年と白タカ　－立山開山－」	富山県児童文学研究会担当：長田陶吉	昭和56(1981)	日本標準	未　詳	①１人の老人（名前なし） ②別の老人（右手に剣、左手に数珠）→この山の刀尾天神と明かす	記載なし	記載なし
24	『日本伝説大系 第６巻　北陸編』「有頼の立山びらき」	福田晃編担当：伊藤曙覧	昭和62(1987)	みずうみ書房	未　詳	森尻権現、刀尾天神など	記載なし	記載なし
25	『富山の伝説』「立山開山の話」	石黒渓子	平成5(1993)	桂書房	未　詳	白く長いひげの気品ある老翁	記載なし	金色輝くイノシシが現れ、有頼は背に乗って渡る。
26	『立山と黒部の昔ばなし』「立山を開いた有頼少年」	遠藤和子監修	平成11(1999)	立山黒部貫光	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪が出てきて、有頼を背に乗せて渡す。
27	『語りつぐ富山の民話』「立山をひらいた少年有頼」	稗田菫平編再話：稗田菫平	平成14(2002)	富山県児童文学協会	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪が現れて、有頼を乗せてくれた。

註：有頼誕生の場所欄の未詳は、越中にいたことを示すのみで、生まれが都か、越中か書かれていないもの。

黄金坂	草生坂	断截坂	カリヤス坂	備考／その他の特徴事項
名称のみ	名称のみ	名称のみ	遠くの滝の音が称名念仏のように微妙に響き、容易に坂を登り得た。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。
有頼を導いた猪の失せた処。	薬草を嘗めて飢えを凌いだ処	雷獣を斬って正気を失った時、医神大汝命から薬草を授かった処。	滝の音を聞き、念仏の声の美妙と喜び、安々と坂を越えられた。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では夢の中に阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来が現れる。
すぐにどこかへ行ってしまった。	お腹がすいて、手当たり次第に草木の葉をむしって食べると、大変美味しく忽ち満腹になり元気がつく。	急に曇って電光と雷鳴、風雨。闇から出てきた怪しい獣を刀で切り殺すと、明るく元の好天になる。	記載なし	玉殿の岩屋では、御光を放った神様が、胸に矢傷を受けながら笑っている。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、３体の仏像が安置。矢を受けた像が阿弥陀如来になって現れる。力尾天神は刀尾天神の誤記（「和漢三才図会」を参照か）
有頼を下ろしたと見ると、そのまま姿を消す。	記載なし	空が俄に曇り、雷鳴と夕立、闇から奇怪な獣が行く手を遮る。刀で刺すと悲鳴を上げて消え、空は晴れ上がる。	記載なし	玉殿の岩屋では、黄金色の仏が３体、胸に矢傷を受けて微笑んで立つ。
黄色の鹿が前を遮り、毒気に当たって病になり倒れる。	薬師嶽の神が現れ「手に当たる草を食べよ」と言われ、何か苦い草を口にすると心が爽やかになり病が治った。	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、神々しい立山の神が胸に傷を受けてにこやかに示現。
有頼を下ろすと、そのまま有頼がお礼も言わない中に、フイと姿を隠す。	記載なし	にわかに曇り、雷鳴と夕立、闇を飛び回る奇怪な獣が行く手を邪魔。腰の刀を突き刺すとキャッと一声叫んで姿を隠すと、空は晴れ上がる。	記載なし	玉殿の岩屋では、仏が３体、胸に傷をうけながらにこにこと立つ。内容から見て、資料15「霊峰立山を開いた有頼」のリライトか？
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、「立山のほとけ」が現れた。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では後光さす仏が三尊（聖観音、十一面観音、阿弥陀如来）、右に釈迦如来と薬師如来。左に大日如来と不動明王。中央の仏の胸に矢が刺さっている。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、胸に血を流す阿弥陀如来が立つ。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	熊も金色の猪も皆、立山の神の化身であったと告げる。観光用の冊子で、改版した異本が多数ある。
金色の大シカが現れ、その毒気にあてられ倒れる。	寒さと疲れと空腹の中、岩陰に芽生える青草を食べると力がみなぎり元気になる。	にわかに暗くなり、稲妻と雷鳴が轟く。襲いかかる雷獣を刀で切ると手ごたえがあり、明るくなり雷鳴もおさまった。	力尽きたて動けなくなったが、大勢の仏様の合掌念仏が聞こえ、それを聞くと険しい坂をやすやす登りことができた。	左胸に有頼が射た矢が深く突き刺刺さった、燦然と黄金色に輝く阿弥陀如来が立つ。白タカ、クマ、猿、鹿、雷獣は化身だったと明かす。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、３人の仏が金色の光を放って立つ。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、光輝く仏が立つ。
ふっとその姿は消えた。	記載なし	空が暗くなり雷鳴と夕立、闇から獣の声が上がり行く手を遮る。刀で切ると手応えがあり、姿が消え晴れる。	記載なし	玉殿の岩屋では、胸に矢傷を負った仏が３体立つ。
向こう岸に着くと去っていった。	記載なし	記載なし	記載なし	同じ内容の異本『立山の昔話』（立山黒部貫光・黒部貫光ターミナル）も刊行された。
そのため向かい側の坂を黄金坂と名付けた。	疲労と空腹で倒れたが、草食べて元気を回復。 鹿の毒にあたって倒れるが、薬師嶽の神から草を食べるよう言われ、草を摘んで食べると元気になった。（２つを紹介）	記載なし	何とも言えないいい滝の音が遠くから聞こえ、近づくと沢山の人の称名念仏にようにも聞こえた（称名滝の地名譚） ※かりやす坂の地名はなし。	草生坂の説話は、岩峅寺の説話の後に「また別の話では」として芦峅寺の説話も併記している。

立山山麓の芦峅寺集落の食文化
―宿坊での接待料理からみた一考察―

細木ひとみ

はじめに

平成25年２月、日本人の伝統的な食文化として「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されて以降、日本の食文化が注目されている。日本には、多様な豊かな自然があり、これに寄り添うように生まれた食文化は日本人の気質に基づいた食に関する習わしであると認められたのである[(1)]。

立山山麓の芦峅寺集落でも、豊かな自然から与えられる山の恵みを生かした食文化が育まれた。そして、江戸時代に立山への登拝者が増加するに伴い、芦峅寺集落でも宿坊経営が盛んとなり、登拝者に対する食事を伴う宿泊においての道具類が国の重要有形民俗文化財「立山信仰用具」[(2)]にも「宿坊接待関係」の分類[(3)]で含まれていることから、立山山麓の「食文化」にも注目する必要がある。

しかし、芦峅寺集落にのこる古文書史料には、江戸時代の宿坊での接待や提供された御膳内容が記されているものは残されていない。また、現在の芦峅寺集落は若い世代の流出に伴い、270人ほどの集落となり、立山山麓の昔の生活の暮らしや「食文化」を次の世代に語り伝えることも大変困難な状況になりつつある。

そこで、これまでにも、立山博物館の施設管理を担当している富山県文化振興財団が宿坊での接待体験イベントとして、接待の様子を再現した「道者衆の接待―坊家御膳の再現―」[(4)]を旧宿坊の教算坊で開催したり（写真１）、立山芦峅ふるさと交流館内のまんだら食堂が芦峅寺の宿坊で道者衆に出されていた、かつての御膳をイメージした「芦峅御膳」を提供したりしている。この「芦峅御膳」は、芦峅寺で生まれ育ち、長らく芦峅女性の会の会長を務めていた佐伯照代氏（昭和22年生）を中心に、芦峅寺集落の伝統的な食文化を継承していこうと再現されたものである。

私自身も令和３年度の富山県博物館協会の研究補助費を活用して、宿坊での接待の様子を伝えるために芦峅御膳をもとに食品サンプルを製作し、特別企画展や教算坊で展示した[(5)]（図１）。また、芦峅寺集落に住む女性たちに聞き取り調査を行ったり、立山信仰用具の食に関わる道具を復元したりしてきた（写真２）。

本稿では、芦峅寺集落に伝わる話と聞き取り調査の成果をまとめ、江戸時代に立山へ訪れた人々の記録と併せて考察したいと思う。

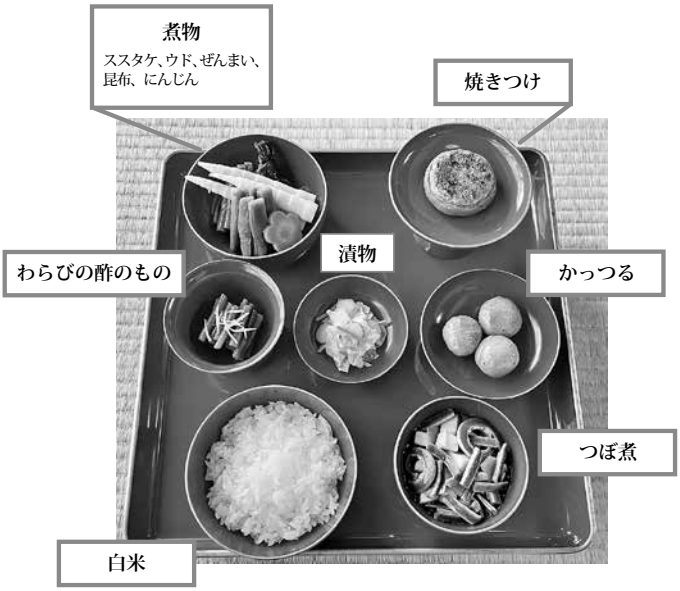


図１　芦峅御膳の一例
（教算坊で展示中の食品サンプル）

１．『立山民俗』からみる芦峅寺集落の宿坊での接待―昭和43年・44年の聞き取り調査から―

芦峅寺集落の宿坊での接待については、昭和43年から44年にかけて行われた、芦峅寺集落の古老からの

聞き取り調査の報告書である『立山民俗　立山地区民俗資料緊急調査報告書』（以下、報告書）[6] が一番詳しい。報告書によると、芦峅寺の宿坊では立山登拝者を「道者衆」「参連衆」「女人講」「行者」にわけて行ったという伝承があるという。

芦峅寺大仙坊の家に生まれ、雄山神社宮司もつとめていた佐伯幸長氏もこの調査に関わっており、著書『立山信仰の源流と変遷』の「立山禅定」に、

> 諸国霊山では登山者を道者と呼ぶのが通例である。立山では古来登山者を分けて『ドウシヤショウ』と『マイレンショウ』の二通りにしている。マイレンショウというのは『参り連衆』の転訛であって一般登拝者のことである。加越能三国即ち前田藩治下の人とフリーの人々のことである。
>
> ドウシヤショウというのは『道者衆』のことで芦峅寺の衆徒と師檀関係にある諸国登山者である。

と記している [7]。同様に、芦峅寺宿坊家の一つ、泉蔵坊の出身であった佐伯立光氏も著書『立山史談』[8] において、

> 当時立山仲宮寺では、参詣者の呼び名を二種類に区別し、仲宮寺衆徒と師檀関係を持たないで、岩峅寺と師檀関係をもっている加・越・能の数ヶ村の参詣者を「参連衆」と称し、自坊の巡教先より訪れた講中の参詣者に対しては「道者衆」と称して、その取扱いは丁重を極めた。それ故、道者衆は、参詣の折には、寺社境内の献植・常夜燈・石垣・宿泊用具・重箱・三宝・地蔵尊・立山曼陀羅作製の費用など数多くの寄附奉納が見受けられ、この師檀関係は、昭和の時代に至るも、「越中の立山様」と称されて、なお存続され、現在一坊を留めている。

と述べ、講中の参詣者を「道者衆」と称してその取扱いは丁重を極めたというのである [9]。

つまり、「道者衆」（どうじゃしゅう）というのは、芦峅寺宿坊の衆徒にある信徒（檀那場の檀家）のことであった。しかし、江戸時代の史料には「道者衆」や「参連衆」といった記載は見られず、岩峅寺集落の宿坊家では芦峅寺のように立山登拝者をわけて接待を行ったという伝承は聞けない。それでも、芦峅寺衆徒にとって、諸国の道者衆は「立山曼荼羅」を使用して獲得した大事なお客様であり、「丁重なおもてなし」をすることで師檀関係をより強固なものとしていったことはうかがえる。

報告書にはさらに、宿坊での道者衆への接待の様子について、「夏期諸国から立山へ登拝する「道者衆」などは宿坊のドル箱であった。その接待は、道者衆が坊に玄関より入ると、早速、洗足だらいを出して、洗足し、室に入れば、たばこ盆と茶道具、座布団それに渋団扇を出し、朱の高つきの上に違い鷹の羽を打ち出した紅白の落雁（を）のせて進める（この菓子はもとうどん粉と豆を入れてふかして、油であげたものを使い、また、まんじう［※饅頭］を用いたこともあった）。宿帳をつけ、仏間に入り、法華懺法を行い、自室にもどると夕餉の膳が出る」とある（写真３）。

そして、道者衆へは「朱漆の膳と皆具」を用い、出される膳の内容は、

とっぺ皿	セトモノの大皿に豆腐を入れたもの、冷奴でたべる。
ちょうし	（徳利）盃、盃洗、白酒（どぶろくのこしたもの）
こうこう	鉢、漬物、わらび、ぜんまい、すゝたけ、くぐみ、大根など、数日滞在する客には内容を変える。
お平	あぶらげ、ぜんまい
吸物椀	わかめ、いわたけの和物
つぼ	さといも、ぜんまい、にんじん、赤豆（隠元豆）
汁わん	あられ、なすび、ねぎなど
飯	白米

であったという（図２は『立山民俗　立山地区民俗資料緊急調査報告書』70頁の図より作成）。

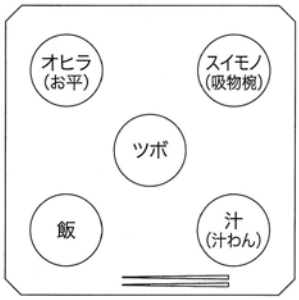


図２　道者衆への御膳内容の一例

ここで記されている「とっぺ皿」は瀬戸物の大皿のことで、「豆腐を入れたもの」とあるが、国の重要有形民俗文化財「立山信仰用具」にも直径46.3cm の「とっぺざら」（資料番号415）が含まれている（写真４）。

調査カードにも「９丁余りの豆腐（冷奴）を盛り、道者衆をもてなした」と書かれており、「とっぺ」は芦峅寺集落では豆腐のことで、皿の真ん中にタマリを入れた猪口を置き、それぞれがタマリ（醤油）をつけて食べたというのである。また、「つぼ」は、今も芦峅寺集落に伝わる「ツボ煮」のことである。

それに対して、芦峅寺中宮寺僧徒（衆徒）と師檀関係を結んでいない一般の立山登拝者は「参連衆」（まいれんしゅう）と呼ばれ、岩峅寺と師檀関係にあった加賀、能登、越中などの数ヶ村の参詣者も含まれていた。参連衆は、芦峅寺村の入口の取締所（案内所）で、国名、氏名、宗派などを申告することで、指定の宿坊に案内されるが、自分勝手に坊家を選ぶことも泊まることも許されなかった。宿坊においては、洗足ダライや水指も出されず、部屋も雑同居であったという。

この参連衆の食事について、報告書には「酒はドブロクのこさないものを出した。どぶろく徳利（２合～５合入）に小形のちょうし、盃を出した。水指しを出さないのが道者衆と異る。」とあり、食事内容は詳しく記されていないが、御膳は「黒漆塗り」のものであったという。そして、弁当の菜メンパには、道者衆だけでなく、参連衆などにも「わらび、ぜんまい、すすだけ、くぐみの煮付けと、つけもの（沢庵）を添える」というのである（写真５）。

また、行者への接待は、「諸国からの行者は１宿１椀の意味で、茶道具はなく、酒はどぶろくと、どぶろく呑、御飯はお代りなく、盛り切り。めしわん、しるぼん。丸ぼんの上にとっぺい皿（豆腐を入れる）高つきの上に菓子がつく」と記されている。女人講への接待についても「女人講の室にはオハグロ壺、針箱、カゞミ立、手ヌグイ掛が備えられる。食事には、トッペイ皿（豆腐皿）、盃、銚子などの酒器もつけない」とある。

宿坊到着の翌日の道者衆については、

> 朝食は午前四時前である。料理は夕食と同じだが、酒はぬきである。その代りに梅干しがつく。午前四時が出発でその時は仏間の前の式台から出る。そこで宿坊の主人から白酒がふるまわれる。（かわらけで、漆器の角瓶子）
>
> 弁当は、メンパ（柳行李）は飯がくさらない、それに飯を何食分も入れる。別にサイ（菜）メンパがあり、副食を入れた。この外に焼きめしのものもあった。

とあり、登山に持っていく菜メンパについても、

> わらび、ぜんまい、すゝだけ、くぐみの煮付と、つけもの（沢庵）を添える。
>
> 「道者衆」「参連衆」などにつける、ぜんまい、わらび、すゝだけは、附近の山から坊の家族、親類一同が採集する。仲宮用のものは寺小僧が採集する。

と記されている[10]。

さらに、立山下山後についても、報告書に「チカ迎い」と記されており、

> 道者衆などが登拝が終ると、坊の者が藤橋まで迎いにいった。これを「チカ迎い」という。坊の子供などが重箱に御飯と煮〆（ぜんまい、わらび、たけのこ）を入れて持って行った。坊に帰って、赤飯を出し、酒宴をもよおした。そこですぐ帰国せずお籠りするものもあるし、又立山講を結成した。

というのである。つまり、芦峅寺の宿坊では、夕餉の膳とおもてなし以外は道者衆でなくともそう変わらず、現在の立山駅近くに架かる藤橋まで迎えに行く「チカ迎え」も行うのが当たり前だったようであり、その際にはご飯とぜんまいやわらび、たけのこの煮しめを重箱に入れて持って行ったという。

ただし、先述した『立山信仰の源流と変遷』[11]には、

> 異るところは芦峅寺に到着すれば登山者取締所に登録する必要はなく、直接に自分の檀那坊へ行く。坊では全家族出迎えて冬期主人廻国中の礼を申し、一番奥の上間へ通し直ちに主人か子供が袴をつけて神社と中宮寺に参詣案内をし、自坊の霊壇前で大太鼓を打って一同祈禱する。この時は同宿のマイレン衆も参列しなければならない。
>
> それともう一つ特に異るのは下山の時、マイレン衆は坊へ立寄って一言礼をいって帰るだけだが、道者衆の場合は『近迎い』といって坊の者が男衆に重箱に詰めた御馳走を持たせて藤橋まで出迎えに

ゆくのである。とに角、マイレン衆とは格段に違って丁重極めた送迎であった。何分にも院主が毎年配札(札カ)巡教に厄介になる特定の檀那、講中の人々であるから、洗足には湯を出し、紺の禅定浴衣を着せ、大変な待遇だった。マイレン衆はどちらかといえば泊めてやるという態度で、洗足は前庭の井戸端へゆけといい、浴衣も出さず横柄なものであった。然し食事は両方とも同じ物であった。

道者衆は坊に下山後は一二日滞在して中宮寺媼堂以下の諸堂、立山権現大宮若宮開山堂廟所等を巡拝し、院主や家族と交誼をあたため、次年度の先達を約束する。

と記されている[12]。下山を祝って宿坊の者が重箱に詰めた御馳走を持って藤橋まで迎えに行く「近迎い」は、道者衆に対して行う、「丁重を極めた送迎」であったというのである。

以上のように、宿坊での道者衆の食事を見ると、まず宿坊に到着後の御膳には「わらび」、「ぜんまい」、「すすたけ」、「くぐみ」などといった山菜を使用した料理が多い。立山登拝の弁当の副菜も同様に、わらびやぜんまい、すすたけ、くぐみの煮付を入れており、下山後の近迎えにもご馳走としてぜんまいやわらび、たけのこの煮しめを重箱に入れていた。道者衆と参連衆への接待（おもてなし）には差があるものの、参連衆に提供された立山登拝での食事もまた、肉や魚を使用しない「精進料理」であり、立山周辺で採れる山菜が主な食材であったことは同様であった。

２．立山登拝者の道中記にみる宿坊接待

江戸時代、立山にやってきた登拝者の中には、その道中で見聞した名所や宝物などの様子や伝説、感想などを記した者がいる。そして、その中にはさらに、宿坊で提供された食事について記した日記も少なからずある。そこで、管見の限り、宿坊での様子や食事内容が確認できた道中記７冊から考えていきたい（※道中記の読み下しの読点と改行部分の「／」、及び必要部分の下線は加筆。以下同じ）。

（１）文化10年（1813）と文政７年（1824）の道中記

文化10年（1813）の『三禅定道中日記』（①、個人蔵［購入］）は、表紙に「文化十年／三禅定道中日記／六月廿五日」とあり、筆者は記されていないものの、文化10年（1813）６月25日に袋井（現・静岡県袋井市）を出発し、富士山、立山、白山と巡った道中記である[13]。立山では芦峅寺の三学坊に宿泊し、７月15日に御前（雄山山頂の御本社）に参詣している。

三学坊は、『立山町史』上巻[14]の近世期における各衆徒の布教地では摂津国と和泉国とされているが、遠江国にも檀那場を形成していたというので、三学坊の信徒（檀家）であった可能性が高い[15]。

この道中記には料理についての記載が多く、三学坊に到着した日についても、

落着之酒出ル。夫ゟ素麺出ス。夕飯ニハ菜二ツ付、明朝坊を立。弁当ハ坊ゟ不自由不成様ニいたし遣ス。

とあり、到着後には「落着之酒」と「素麺」が出され、夕飯には「菜二ツ付」とある。また、下山後には、「藤橋迄坊ゟ酒一樽、赤飯面々、弁当ニ而迎ひ出ル」とあり、藤橋まで酒一樽と赤飯など弁当を持って迎えに行き、坊へ到着後は、

先例として白粥に二菜ニ而出ス。又夜食に餅をつき砂糖付ケ皿爪もミ汁も付酒も出ス。硯蓋二面出ル。

と記されている。白粥に二菜、夜食には餅をつき砂糖をつけ、汁と酒、硯蓋二面も出るというのである。さらに、明朝は一汁七菜とご飯とであったという。

同じく筆者は不明であるが、同一の家から出品されたものと思われるのが、文政７年(1824)の『三禅定道中記』（②、個人蔵［購入］）である。文政７年(1824)６月12日に袋井（現・静岡県袋井市）を出発し、富士山、立山、白山と巡った道中記である。そして、先述の道中記と同じように芦峅寺の三学坊に泊まっている。

姥堂へ五六丁有。姥堂五間四面、日本六拾余州のうば六拾六躰アリ中ニ天ゟ下り給ふうは一躰、堂の前ニ下給ふ時の御足跡有。三途川橋有。手前ニえんま堂アリ、参詣いたし。三学坊江帰り、落息ニ酒出ル。

夫ゟ素麺出ル。

とあるので、文化 10 年（1813）の時と同様に、三学坊に到着後に落息の酒と素麺が出たことがうかがえる。さらに、下山後についても、

藤橋迄坊ゟ酒一樽、赤飯面々、弁当にて迎出ル。夫ゟ坊へ付、先例として白粥に二菜ニて出ス。又夜食ニ餅を出し砂糖付酒も出ス。硯蓋二面出ル。明朝、一汁七菜ニて御飯出し、漸く五ツ半ニ坊を立。

と記されていることから、藤橋での出迎えの様子も三学坊での夕食メニューも11年前の文化10年（1813）と同じであったことがわかる。

（2）文政10年（1827）・明治13年（1880）・明治40年（1907）の伊藤家の道中記

文政10年（1827）の『三禅定道中記』は、表紙に「丁　文政十歳／三禅定道中記／亥　六月吉日」、裏表紙に「尾州知多郡佐布里村／伊藤藤右衛門」とあり、文政10年（1827）に知多郡佐布里村（現・知多市）の伊藤藤右衛門が行った三禅定の道中記（③、知多市歴史民俗博物館蔵）である。藤右衛門は、６月19日、古見の妙楽寺を出発し、富士山、立山、白山と巡っている。

立山では、芦峅寺の宮之坊へ11日の九ツ時（お昼の12時頃）に入り、「荷付ニ御酒そうめん出○御ばさまへ参り、ばんト朝御膳出○」とある。13日の早朝に権現様（立山和光大権現）へ参詣後に下山しており、藤橋まで宮之坊が迎えに来ていて「御酒せきはんニ而待合有」と記されているので、近迎えがあったようである。宮之坊へは八ツ半時（午後３時頃）に入っているが、その後の数行は損傷のために判読しがたい。

さらに、この道中記を記した伊藤藤右衛門の家には、明治13年（1880）と明治40年（1907）にも三山を巡った道中記が残されていた。

その１冊、明治13年（1880）の『三禅定道中確』（④、知多市歴史民俗博物館蔵）の裏表紙には、「尾張國知多郡／佐布里村ノ明寺連中」とあり、知多郡佐布里村の明寺連中の三禅定の道中記とわかる[(16)]。

６月２日に佐布里村の密蔵院を朝６時に出発し、立山には６月20日に芦峅寺日光坊へ到着している。その時の様子については、「芦倉日光坊七ツ時ニ入りヲチツキニヒヤそうめん御酒」と記されている。同家であるにもかかわらず、文政10年（1827）の三禅定時には宮之坊に宿泊、明治13年（1880）には日光坊に宿泊しているのは、文政期ごろまでは宮之坊と師檀関係があったが、それ以降は日光坊と師檀関係があったからだと推測されている[(17)]。

また、22日の下山後については、「藤橋ニ降テ出向ニ御成。せき飯ニ御酒、又坊エ降りヲチ付カイ御酒ニ白餅ニ白砂糖付テ」とあり、日光坊は藤橋まで赤飯とお酒を持参して迎えに行き、坊に帰ってからはお酒や白砂糖付きの餅が用意されていたようである。翌朝についても「朝ノ御膳二ノ善付」と記されている。

もう１冊は、明治40年（1907）の『三山道中日記』（⑤、知多市歴史民俗博物館蔵）である。裏表紙に「明治四拾年旧六月／登山者人名　新海繁太郎　伊藤増三郎／濵島金之助　真田鉄次／蟹井源治　伊藤吉之助／伊藤孝義　蟹井重治／以上」と記されており、明治40年（1907）に８名で三山を巡った道中記である。筆者は、伊藤孝義である[(18)]。

出発してから９日目の６月20日の項には、

滑川ニ下舩後休息シツゝ、上市町ニ至リ朝支度ヲナシ所々ニテ休息シツゝ諸村落ヲ経テ岩倉村ニ至り、難路ヲ越へ芦峅寺村日光坊ニ着ス。時ニ午後三時、滑川ヨリ七里余。日光坊ニ着シテヨリ暫ク休息シ案内人ニ携ヘラレテ立山開山タル立山開山神社ニ参詣シ、身ヲ洗情シ種々ノ物語ヲ聞キ、帰リテ夕食ヲ喫シテ臥床ニ付ク。此夜大雨アリ。

と記されているが、日光坊での接待内容については「夕食ヲ喫シテ」とあるのみである。

６月22日に浄土山と立山本山（雄山）へ登って参詣しており、室堂で昼食をとった後に下山している。その後の様子については、

藤橋ニ於テ日光坊出向人ニ逢遇シテ御酒赤飯ヲ喫シテ、無事日光坊ニ帰ル。時ニ午後四時、夫ヨリ湯

ヲ濟シテ多大ナル御馳走ニ預リ眠ニ付ク

と記されており、藤橋では酒と赤飯での近迎えがあり、日光坊での夕食については詳細な記載がないものの、「多大ナル御馳走ニ預リ」と記すほどかなりのご馳走が出されたとみられる。

（3）天保15年（1844）の『立山遊記』

『立山遊記』（⑥、個人蔵）は、加賀藩の儒者である金子盤蝸が、加賀藩士の榊原守郁とともに、天保15年（1844）６月22日に金沢を出発し、７月８日に帰宅するまでを記した立山登拝の道中記である。

６月24日、宿泊した富山の旅籠町にある菊屋清次郎方を出発した一行は、岩峅寺の多賀坊で昼食をとっており、素麺と酒の他に「カタ瓜ヲ水ニ浮かシ肴ニ進ム」とあるものの、金子盤蝸の口には合わなかったようである。この日、芦峅寺では紹介された玉泉坊に宿泊しているので、金子盤蝸は芦峅寺の信徒ではなく、参連衆であったと考えられる。玉泉坊での夕食は「菜汁ニゼンマイ、干大根ノ煮物」、翌日の朝食は「菜汁ニゼンマイ煮物」と記されている。

６月26日、室堂に泊まるべき時刻であったが、中語を先に返したために食事も不自由ということで下山している。本来であれば、行きと同様の宿坊に宿泊する掟であったが、「登山ニハ岩峅ニ宿ス。夜ニ入りタレハ岩峅迄往く能わず」と欺き、芦峅寺の福泉坊に宿を請うている。当時の福泉坊の住持が幼かったこともあり、叔父である吉祥坊が世話をしているが、芦峅寺に着いたのは午後９時過ぎとかなり遅かったためか、夕食の記載はない。

（4）明治４年（1871）の『山連場道中記』

宿坊での食事について詳細に記されている道中記として、明治４年（1871）６月と記された『山連場 白山／立山／冨士 道中記』[19]（⑦、個人蔵）がある。これは、知多郡松原村（現在の愛知県知多市）で庄屋をつとめた人物である小島茂兵衛氏が白山・立山・富士山を巡って記した日記である。小島茂兵衛氏は、芦峅寺日光坊の檀那であり、同じく檀那であった集落の人々（茂兵衛同行４人）と三禅定の巡礼に出掛けたことから、「道者衆」として接待されたと考えられる。

まず、芦峅寺の宿坊家（日光坊か）[20]に６月21日の午後５時頃に到着すると、宿のご馳走として「そうめん（胡麻唐／からし）、駒舟ひや酒」、次に御膳として「平　茄子三切、汁、大根漬二タ切」が出されている。

翌日（22日）の立山登拝前の朝御膳は、「平　角ふ二切、汁、大根漬二タ切、外ニ握り飯壱ヅゝ、之レハ途中ニテ食する分」とあり、平として角麸二切れ、汁、大根漬け二切れを食し、登山の途中にて食べる分として握り飯を１つずつ持参しているようである。

道者衆などが無事に立山登拝を終えると（23日）、弁当箱にご飯や煮しめなどを入れて持っていたという。小島茂兵衛氏ら一行の藤橋付近での様子については、「元藤橋迄下ると、茲に坊より向ふ人アリて、大井なる川の畦に小石の沢山アル極綺麗なる場所ニ持受アリ、先酒ニ赤飯（俗ニ／コハイ）、切干ニ茄子ノ重組、茲ニテ御馳走之饗応ニ預り、夫より帰坊す（之レヨリ坊／へ壱里ナリ）」と記されている。

また、宿坊に到着すると、落付に粥を出し、風呂へ入っている。入浴後は、「酒　口取りニ茄子のからしあゑ」が出され、「跡ニ粉糯と白糯と前ニ白砂糖少しあり。夫より酒ノ口取、太平　五月ささげ、うり、硯蓋　長芋、氷ごんにやく、かんてん、長ひぢき、大皿　とんがんにて龍のかたちを作り（後略）」と記されている。

出発の朝（24日）は、「二ノ膳付　御飯、坪、とんがほそ引、皿ミ島、赤青白ひぢき、かんてん花壱ツ、呑口、ささぎ胡麻あゑ、汁　うり、平　丸ふ角ふ、前付　大根漬二タ切、茶碗、ゆバ、みよが、引物　竹の子、しい茸、長芋、婦ぬすび、かんぴう、大丼ニ御地走に相成」であったという。

宿坊での食事について記してある、これらの道中記７冊を見比べると、まず宿坊に到着時、酒と素麺が出されている（①、②、③、④、⑦）。①と②の道中記から「落着之酒」と「素麺」と考えていたが、④の道中記では「ヲチツキニヒヤそうめん御酒」とあることから、落ち着くための冷やし素麺とお酒であったとい

える。また、⑦の道中記に「そうめん（胡麻唐／からし）、駒舟ひや酒」とあるので、そうめんは胡麻唐辛子味であったようである。

さらに、⑥の道中記では、岩峅寺の多賀坊での昼食にも素麺と酒が出されている。芦峅寺集落で素麺というと、お盆の13日に先祖を迎えるために仏壇に供える「足洗いそうめん」が思い浮かぶ。これは、全国的な「お盆に素麺を供える」という無病息災を願った風習であるが、先祖に対して、おもてなしの意味の素麺であったとすると、宿坊へ到着した道者衆たちに対しても疲れを癒すおもてなしの料理が素麺であったとも考えられる。

次に、宿坊到着後の夕食について記されている道中記は、①、⑥、⑦である。①の道中記では、「菜二ツ付」、⑥の道中記では「菜汁ニゼンマイ、干大根ノ煮物」とあるので、ご飯と副菜が２つ、ご飯と菜っ葉の汁ものとゼンマイ・干し大根の煮物であったようである。また、⑦の道中記には「平　茄子三切、汁、大根漬二タ切」とあり、底が浅くて平たい平椀に茄子（漬物か）三切れと汁物、大根漬けが二切れであったと記されている。これらの食事内容を見る限り、先述した『立山民俗』の報告書に記されたような御膳であったとは言い難い。

立山登拝後の藤橋では、下山が遅くなった⑥を除いたすべての道中記（①、②、③、④、⑤、⑦）に、『立山民俗』の報告書通りの近迎い（近迎え）が行われた様子が記されている[21]。主に赤飯と酒で無事の下山をお祝いしたようだが、⑦の道中記には「酒ニ赤飯（俗ニ／コハイ）、切干ニ茄子ノ重組、茲ニテ御馳走之饗応ニ預り」とご馳走でもてなされたとあるので、何種類かの副菜もあったと考えられる[22]（写真６）。

その後、宿坊に付くと粥が出されている（①、②、⑦。ただし、①、②は二菜付き）。⑦の道中記にはこの粥について「落付にかゆを出し」と記されているので、④の「ヲチ付カイ」も落ち着きの粥のことと思われる。さらに、⑤と⑥ではその後、湯（風呂）に入っている。

夕飯の食事については、①と②において、「夜食に餅をつき砂糖付ケ皿爪もミ汁も付酒も出ス。硯蓋二面出ル。」、「夜食ニ餅を出し砂糖付酒も出ス。硯蓋二面出ル」と記されているので、砂糖付の餅と酒、硯蓋が２面は出されたようである。ただし、硯蓋でどのような品が出されたかは不明である。

⑦の道中記には、「酒　口取りニ茄子のからしあゑ」とあり、まず酒と茄子の辛し和えが出されている。さらに、「跡ニ粉糯と白糯と前ニ白砂糖少しあり。夫より酒ノ口取、太平　五月ささげ、うり、硯蓋　長芋、氷ごんにやく、かんてん、長ひぢき、大皿　とんがんにて龍のかたちを作り」と記されていることから、餅と白砂糖が出され、さらに太平椀に五月ささげ（インゲン豆）と瓜、硯蓋に長芋、氷こんにゃく、寒天、長ひじきが盛られ、大皿には冬瓜を龍の形にしたものを作って提供しているようである。芦峅寺集落で「かんてん（寒天）」と言えば、溶かした寒天と玉子を混ぜ、砂糖、醤油、塩で味付けされた「べっこう」が思い浮かぶものの、同一のものなのかは不明である。

それにしても、⑤の道中記では、立山登拝前の宿坊での夕食を「夕食ヲ喫シテ」と記しているのに対して、下山後の宿坊での夕食を「多大ナル御馳走ニ預リ」と表現している。また、⑦の道中記では、出発の朝（24日）にも「二ノ膳付　御飯、坪、とんがほそ引、皿ミ島、赤青白ひぢき、かんてん花壱ツ、呑口、ささぎ胡麻あゑ、汁　うり、平　丸ふ角ふ、前付　大根漬二タ切、茶碗、ゆバ、みよが、引物　竹の子、しい茸、長芋、婦ぬすび、かんぴう、大丼ニ御地走に相成」と二ノ膳付きでたくさんの料理が出されており、ここで記されている「坪」が「ツボ煮」のことだとみられる。①と②の道中記でも、翌朝の食事について「一汁七菜ニて御飯出し」とあり、④でも朝の御膳は二ノ膳付と記されているのである。

そうすると、『立山民俗』の報告書に記されたような御膳は、立山登拝前（宿坊到着後）ではなく、登拝後の宿坊での夕食や翌日の朝食、つまり立山から無事に下山してきたお祝いの御膳が、「宿坊での接待料理」の一例であったように思える。しかも、報告書や道中記の記載から、ゼンマイやススタケ、ワラビなど立山で採れた山菜を使用した料理が提供されている。

そこで次に、『立山民俗』の報告書やここで紹介した道中記に記された接待料理と、現在の芦峅寺集落で食べられている料理とを比較してみたいと思う。

３．芦峅寺集落での聞き取り調査から

立山山麓で採れるたくさんの山菜には、ススタケ、ゼンマイ、ワラビ、クゴミ（※芦峅寺集落では「コゴミ」を「クゴミ」という）、ウド、フキ、ヨシナなどがあり、ほとんどの山菜は保存食とされて、現在でも多くの料理に使われている。

ところで、享保～元文年間（1716～1741）に、江戸幕府は全国諸藩に対して領内の天産物、栽培作物などの実態を調査させ、提出させている。芦峅寺一山会の『越中分　産物書上帳』（芦峅寺一山会蔵、富山県指定文化財）は、この全国産物調査に際して、享保20年（1735）に芦峅寺での産物を書き上げて加賀藩へ提出したものの写しで、これを見ると、

御尋ニ付書上申候
覚

木之類　立山ニおゐて
一杉
一禅定松　見付ハとがの葉の如し／実の色紫
一ぶなの木
一山桜　花の色白し／ひとへ花
一硫黄　色青し
一来鳥　形ははとの如し、鳥さかハ目の上赤く、背ハねづみいろ、下はら白シ、たかをも白シ、是ハおとりなり
めとり右ニ同形、とつさかハめの上赤シ、背も赤く、下はら、をともニ白シ

麓におゐて
一大豆　実之色白し
一小豆　実之色赤し／黒し
一菜　かぶらな
一大根　味にがし
一いも　ゑごの芋
一茄子　色赤し
菓子類
一梨　実少し／色青し
一柿　大小
草之類
一うど
一わらひ
一せんまひ
一くゞみ　出初　わらび手の如し／後ニも同し
一ぎぶき　ぎぼしとも申候
一すすき　色青きニ／白すし有
一あさミ　青き花の／色
鳥之類
一鶯

一山鳥
一きし
　獣之類
一くま　色黒し
一大犬
一むしな
一むま　毛色かげ
　虵之類
一まむし
一山かげ
一からすへひ

右之品々所ニ相知れ申物之分書上申候。
此外書上可申品、無御座候。以上。

享保二十年五月日　立山芦峅寺
衆徒中（黒印）
社人中（黒印）
寺社御奉行所

と記されている。享保20年（1735）の「草之類」の項にも、うど、わらび、ぜんまい、くぐみなどの山菜が芦峅寺の産物として記されているのである。さらに、その他にも、大豆、小豆、蕪菜、味が苦い大根、えごの芋、色が赤い茄子などが挙げられている。

そこで、芦峅寺集落の女性たちに行った聞き取り調査の中から、山菜料理を中心にまとめてみたい。

（1）ススタケ

芦峅寺集落では、ススタケは煮しめやみそ汁の具、炊き込みご飯、天ぷら、昆布締めなど様々な料理に使用するため、毎年６月に立山へ採りに行く人が多い。立山で採るススタケは山麓で採るススタケとは違って柔らかく、立山町米道の女性からも「芦峅寺のススタケは味が違う」と伺った。

採ってきたススタケは、すぐに皮をむき、茹でる。ススタケと水入れて瓶に詰め、瓶が隠れるほどたっぷりの熱湯で３時間ほど煮詰める。蓋を強く締めて冷まし、保存しておく（又は缶詰にする）[23]。

（2）ゼンマイ

ゼンマイは、毎年５月～６月に採りに行き、１本１本綿をとってからたっぷりの熱湯で茹でる。煮立ってきたら湯からあげ、あまり力を入れない程度に揉みながらトタンの上に広げて乾燥させる。

（3）ワラビ

ワラビは、毎年４月～６月くらいに採りに行き、茹でてアクを抜く。芦峅寺集落では塩漬けにすることが多いという。

（4）クゴミ（コゴミ）

享保20年（1735）の『産物書上帳』や『立山の民俗』の報告書など記される「くぐみ」はクゴミ（コゴミ）のことだと考えられる。

クゴミは、毎年４月下旬から５月上旬にかけて採りに行き（写真７・８）、たっぷりの熱湯で茹でる。煮立ってきたら湯からあげ、大きさを揃えながら、ゼンマイと同様にあまり力を入れない程度に揉みながらトタンの上に広げて乾燥させる（写真９）。

クゴミは、ツボ煮、油炒め、煮しめ、天ぷら、胡麻和え、お浸しなどに使用するために、料理をする前日に乾燥したクゴミをたっぷりの熱湯で茹で、耳たぶくらいの柔らかさになったら火を止めてそのままにしておく。冷めたら、水で洗い、何度か水を替えながら漬けておいたものを使う。まんだら食堂で提供しているツボ煮のクゴミも、芦峅寺地内で採集されたものであり、芦峅御膳の人気に伴い、大量に保存して置く必要があるというのである。

（５）ウド

ウドは５月から６月くらいに採りに行き、皮を剥いて水に浸し、アクを取る。水を切り、たっぷりの塩で漬ける重石をし、10日ほどしてから漬けかえる。

料理に利用するときは、塩漬けしたままのウドを水を入れた鍋に入れて煮る。煮立ったら火を止め、塩気が無くなるまで何度も水を替えて漬けておく。煮しめ、きんぴら、醤油づけ、胡麻和え、天ぷらなどにする。

その他、フキ、エラ、ヨシナなども毎年５月から６月くらいに採りに行く。これらも保存食として、芦峅寺集落では塩漬けにすることが多いという。

また、立山芦峅ふるさと交流館内のまんだら食堂が提供している「芦峅御膳」の内容も、ご飯の他に、漬物、ツボ煮、焼きつけ、ウドの胡麻和え、きゃらぶき（フキを醤油などで煮たもの）、里芋の田楽、ススタケやゼンマイなどの煮物、べっこう、ワラビの酢のものなどである[24]（写真10）。べっこうや里芋の田楽がジャガイモのかっつる[25]になったり、漬物などもその時にあるものになったりと、季節や食材によって一部変更されるが、御膳のメインはやはりツボ煮などの山菜料理である。

報告書にあった夕餉の膳の「こうこう」は香の物のことであるから、漬物とともに「わらび、ぜんまい、すゝたけ、くぐみ、大根など」とあるのも、塩漬けにしたものであったと考えられる。また、「お平」の「あぶらげ、ぜんまい」は煮しめと推測できる。

先述した「べっこう」は、水で戻した寒天を煮溶かし、砂糖、醤油で味付け、溶かした卵を入れて沸騰させたものを容器に入れて冷ましたものである。芦峅寺集落では、日常でも食べるが、昔は田植えや法事、結婚式の時に作ったというので、接待料理として提供された可能性が高い。

また、『立山民俗』の報告書にも接待料理の一つとして、「つぼ　さといも、ぜんまい、にんじん、赤豆（隠元豆）」と記されているツボ煮は、芦峅寺集落では初七日や三十五日（五七日）の法要の時などに食べるものであったが、現在では「郷土食」として人が集まったときなどに作られている。

ツボ煮の作り方は、次のような手順である。

①前日に乾燥させたくごみを鍋に入れ、たっぷりの水を入れて煮る。沸騰したら、火をとめて蓋をして蒸らす。鍋が冷めたら、水を捨て、くごみを洗ってカス（粉）を取り除く。これを数回繰り返す。新しい水に浸して一晩置いておく。

②一晩置いておいたくごみを洗い、くごみを揃えて２センチメートルくらいの大きさで切ってザルに入れる（写真11）。里芋と人参の皮をむいて、それぞれサイコロ状にカットする。厚揚げも洗ってから同じような大きさにカットしてザルへ入れておく。昆布だしを別の鍋でとっておく。

③鍋に大さじ２杯ほどの油をひき、カットした里芋と人参をよく炒め（昔は「里芋に粘りが出るほど炒めなさい」といわれたという）、カットしたくごみも入れてさらに炒める（写真12）。そこに、事前にとっておいた昆布だしをひたひたになるくらいにいれて、野菜が柔らかくなるまで煮る。

④野菜が柔らかくなったら、たくさんの酒（調理酒）、お玉１杯ほどの醤油を入れて味付け（甘さが欲

しい場合は砂糖を入れる人もいる）、最後にカットしておいた厚揚げを入れ、煮ながら醤油を足して味を調えて完成である。

昔は小豆を入れていたというが、今は入れないという。また、報告書には「ぜんまい」と記されているが、クゴミ（コゴミ）を使っている。「くごみぜんまい」と呼ばれることもあるため、くごみをぜんまいと記した可能性もある。ツボ煮の味付けなどは家庭によって違い、昔は冬には油を多めにした濃い味で食べる人もいたという。

おわりに

本稿では、昭和43年・44年の調査報告書である『立山民俗　立山地区民俗資料緊急調査報告書』をもとに、立山登拝した人々の道中記から宿坊での食事内容の様子を見てきた。そして、芦峅寺在住の佐伯照代さんと佐伯順子さんから平常食や行事食などの「食」に関する聞き取り調査を行った中から、特に宿坊で提供された御膳に関わると思う山菜料理についても紹介した。

しかし、昭和43年・44年時の調査成果と江戸時代の宿坊の接待料理では、産物も食事の事情も違う可能性が高い。それでも、芦峅寺集落の食文化を調査するにあたり、国の重要有形民俗文化財「立山信仰用具」の「宿坊生活関係」と「宿坊接待関係」の用具の使用方法なども考察しながら調査しており、今後の「立山信仰用具」の活用にも役立てることができると思われる。

聞き取り調査は現在も継続中で、確認できていない道中記や古文書の調査も行ってまとめていくつもりである。また、他地域の、特に三山を巡る人々の道中記を見ていることから、白山や富士山の宿坊での接待の様子や提供された料理なども併せて考えていきたいと思う。

［附記］

今回の聞き取り調査では、佐伯照代さんに大変お世話になりました。また、佐伯照代さんには協力者への声掛けにもご尽力いただき、話者として佐伯順子さんに、令和３年度に行った芦峅寺の郷土食作りには佐伯洋子さん、志鷹節子さん、黒田洋子さん、志鷹崇子さん、佐伯千秋さんにご協力していただきました。

ここに記して、皆様に感謝申し上げます。

［註］

（１）農林水産省のホームページには、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食;日本人の伝統的な食文化」について、「南北に長く、四季が明確な日本には多様で豊かな自然があり、そこで生まれた食文化もまた、これに寄り添うように育まれてきました。このような、「自然を尊ぶ」という日本人の気質に基づいた「食」に関する「習わし」を、「和食；日本人の伝統的な食文化」と題して、ユネスコ無形文化遺産に登録されました」と紹介されている。

（２）国の重要有形民俗文化財「立山信仰用具」は、昭和45年（1970）３月に芦峅寺集落の〈立山信仰関係用具及び山樵関係用具〉1,083点が国の重要民俗資料の指定を受け、令和２年３月に岩峅寺の旧宿坊家の資料と芦峅寺の旧宿坊家の特徴ある資料をあわせた160点が新たに追加指定された、総数1,243点の資料群である。詳しくは、『研究紀要』第26号（富山県［立山博物館］、2019年３月刊）所収の、加藤基樹「『立山信仰用具』覚書－活用と課題－」や、富山県［立山博物館］開館30周年記念・前期特別企画展「立山信仰と山麓のくらし―国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」の世界―」展示解説書（令和３年７月刊）を参照のこと。

（３）「立山信仰用具」は、「宿坊生活関係」「宿坊接待関係」「登拝装束関係」「唱導布教関係」「祈祷関係」の５つに分類されており、宿坊での接待に関する資料は「宿坊接待関係」に含まれる。さらに、中分類として「道者衆」「女人講」「参連衆」「岩峅寺」と分けられているが、宿坊の調度品や登拝者に対して宿坊の主人が用いたものなどは明確には分類されていない。

（４）宿坊での接待体験イベント「道者衆の接待－坊家御膳の再現―」は、富山県文化振興財団事業として実施されていたが、新型コロナウィルス感染症の影響により、令和２年より実施していない。

（５）富山県［立山博物館］開館30周年記念・前期特別企画展「立山信仰と山麓のくらし―国指定重要有形民俗文化財「立山信仰用具」の世界―」（令和３年７月17日～８月29日開催）内で、かつて接待に使用されていた朱塗りの御膳を展示するのにあたり、参考資料としてまんだら食堂で提供されている芦峅御膳をもとにした食品サンプルを製作した。この食品サンプルは、芦峅寺集落の「食」を展示するのには視覚的にも効果があり、来館者にとても好評であった。特別企画展終了後も、教算坊の展示コーナーにて、宿坊での接待の御膳の一例として展示している。

（６）『立山民俗　立山地区民俗資料緊急調査報告書』（富山県教育委員会、昭和44年３月刊）。この調査をもとに、「立山信仰用具」1,083点が昭和45年（1970）に国の重要民俗資料（現在の重要有形民俗文化財）の指定を受けた。芦峅寺大仙坊に生まれ、雄山神社宮司もつとめていた佐伯幸長氏の著書『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年９月刊）の300～306頁には昭和初期頃までの立山登山の様子が記されている。

（７）佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年９月刊）、300頁。

（８）佐伯立光『立山史談』（大用堂、昭和40年７月刊）、54頁。

（９）『立山町史』上巻（立山町、昭和52年10月8日刊、810頁）にも、

> 師檀関係をもたない参詣人は、参連衆と呼ばれ、その待遇も粗略なものであったが、檀那衆に対しては、道者衆と称して、たばこ盆・渋うちわ、茶・紅白の落雁を出すなど、その扱いは丁重を極めた。また用具も、参連衆には、黒漆ぬりの膳や椀などを用いたのに対して、道者衆に対しては、水指し以下、すべて朱塗の食器が使われ、酒もドブロクに対して白酒とされた。道者衆は参詣の折には、燈明料・什物・常夜燈・石垣・石像仏などの寄付奉納があり、このような師檀関係を一部の衆徒が昭和の初期まで継承した。

と記されている。

（10）註６に同じ。

（11）註７に同じ。305～306頁。

（12）下山後の様子については、佐伯立光も『立山史談』（註４に同じ、52～53頁）に、

> 立山仲宮寺では、衆徒と諸国の檀那との間に深い連りがあったので、夏季の六・七月中には自他国よりの参拝者が、仲宮寺の参詣を含めて、六・七千人もあったと記録されている。而して道者は、立山とか仲宮寺への参詣の時には番帳に於て国名・氏名を帳に記入し、必らず指定された坊家に泊って登山などの用意を行ない、登拝するのであるが、下山後は、しばらく坊家に滞在して仲宮寺の姥堂・講堂に参籠し、立山信仰に関する知識を得て帰国するのであるが、帰郷後は、立山講支部を結成し、信者を集めて翌年には先達となり多くの信者を引きつれて、立山に登山している。

と記している。

（13）文化10年（1813）の『三禅定道中日記』ともに、文政７年（1824）の『三禅定道中記』、天保４年（1833）の『西国道中記』の３冊がネットオークションに出品されており、個人が購入したもののため、資料の詳細は不明である。

（14）『立山町史』上巻（立山町、昭和52年10月刊）、805頁。

（15）立山博物館の展示館で展示中の「三山神名札」（中央に［不動明王種字］立山和光大権現、右に［大日如来種字］冨士淺間大菩薩、左に［十一面観音種字］白山妙理大権現と三山の神名が記された刷り物）も個人がネットオークションで購入したため、詳しい来歴は不明であるが、左下に「三学坊」と朱印が捺してあり、この資料も静岡県内の古美術商から出品されたという。

（16）筆者について、福江氏は「日光坊の大正時代の檀那帳には、伊藤家の当時の当主徳太郎（文久二年［一八六二］生まれ）が宿家として記載されており、前述のとおり彼が明治一三年『三禅定道中確』を記したものと推測されている。」という。福江充『立山信仰と三禅定―立山衆徒の檀那場と富士山・立山・白山―』（岩田書院、2017年11月刊）、220～221頁参照。

（17）註16に同じ。同書には、

> 日光坊の元治二年（一八六五）「芦峅寺日光坊火災類焼に付き再建奉加」（芦峅寺日光坊所蔵）に伊藤家の当時の当主藤右衛門（文政五年［一八二二］生まれ。文政一〇年『三禅定道中記』を記した藤右衛門の息子。名前を世襲したもの。）が寄進者のひとりとして記載されており、この頃には伊藤家は日光坊と師檀関係を結んでいたものと推測される。

と記されている。

（18）筆者の伊藤孝義は、明治13年の『三禅定道中確』を記したとされる伊藤徳太郎の息子である。

（19）尾張国知多郡鍛冶屋村（現在の愛知県知多市）から出立するにあたり、「浜ニテ汐ゴリ致シ」とみえ、三禅定が単なる物見遊山の旅ではなく、出立前に塩垢離などの禊・作法を行っていた様子がうかがえる。芦峅寺宿坊での食事内容についても詳細に触れており、他書にない記述が多くある。

(20) 芦峅寺の宿坊に到着する前のことについて、「此川上りて岩倉ナリ。此所ニ立山前立アリ、之レヘ参詣してよし。岩倉より足倉へ三里、此所ニ立山の坊アリ。足へ宿致したるハ午后五時頃なり、一泊ス。」とあり、宿泊した芦峅寺の宿坊名は記されていない。

(21) 大府市歴史民俗資料館所蔵の文政６年（1823）の『三山道中記』にも、下山後の藤橋について、

一　ふじばし　是迄酒むかい有
酒　せきはん　しだし
此ものニ壱人ニ五拾文とらせ申候

と記されており、「酒むかい」とある。この道中記は、知多郡大符村（現・大府市）の高持百姓である平七が12人と一緒に白山、立山、富士山と巡った際の記録である。

(22) 近迎い（近迎え）の弁当箱は、個別のものが10点、弁当箱を入れる木箱とセットになっているものが４点、外の木箱だけが１点あり、「ちかむかえべんとうばこ（弁当箱）」と「ちかむかえべんとうばこ入れ（弁当箱入れ）」という資料名称で、国指定重要有形民俗文化財の「立山信仰用具」に含まれている。そのうち、資料番号498(写真６)は善道坊所持の弁当箱入れで、内側が朱塗りで外側が黒塗りの弁当箱が11個入っている。木箱の蓋の裏には「三」「天保十四夘七月／善道坊什物」と墨書があり、資料番号499と500も弁当箱がいくつか無くなっているものの、同じ弁当箱入れで、弁当には善道坊の「善」といった印があることから、近迎い（近迎え）用の弁当箱入れを宿坊ごとにいくつも用意していたと考えらえる。

(23) 缶詰にして保存する場合は、缶詰工場に皮をむいたススタケを持って行ってしてもらうという。

(24) 芦峅御膳は、毎年４月から11月ごろまで、まんだら食堂で 2,000円にて食べることが出来る（要予約)。山菜などの天ぷら付きにすると2,500円。

(25)「かっつる」は、小さなじゃがいもを皮のままキレイに洗ってから柔らかく煮て、油をひいた鍋で味噌・砂糖・醤油・水で炒め、少し弱火で煮詰めたものである。

写真１　「坊家御膳の再現」の様子
（富山県文化振興財団主催イベント）

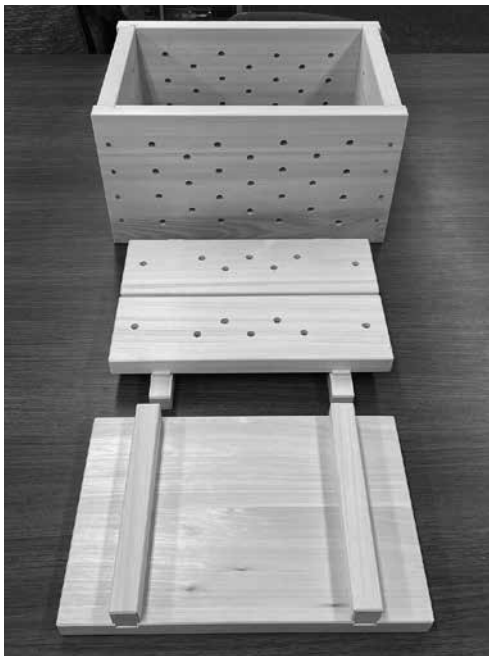


写真２　復元させた豆腐の型箱

写真３　道者衆への接待
（昭和43年の調査報告の再現写真より）

写真４　とっぺざら
（当館蔵、国指定重要有形民俗文化財・資料番号415）

写真５　参連衆への接待
（昭和43年の調査報告の再現写真より）

写真６　ちかむかえべんとうばこいれ
（当館蔵、国指定重要有形民俗文化財・資料番号498）

写真７　クゴミ採り

写真８　芦峅寺で採れるクゴミ

写真９　クゴミを乾燥させる

写真10　まんだら食堂の芦峅御膳

写真11　クゴミを揃えて切る

写真12　クゴミと里芋・人参を炒める

＜研究ノート＞『日本旅行案内』にみる立山
―西洋近代登山の成立とイギリス人の立山登山―

河野　史明

はじめに

江戸時代、立山は地獄・浄土の世界をこの世で体験できる山として全国的な信仰を集め、多くの人が登った。一方で西洋では、キリスト教が社会に浸透して以降、山は悪魔や竜が住むところとして人々から恐れ忌み嫌われる存在であった。しかし、ルネサンスや大航海時代の影響によって、少しずつ山の見方が変化し、山が持つ神秘性がはぎ取られていった。科学者や作家が調査・研究目的でアルプスを登り、その様子を記録し、表現していく中で、恐怖の対象であったアルプスが登山の目標となり、また観光旅行の行先の１つとなる時代がやってきた。こうした中、山へ登る行為自体に意義を見出すアルピニズムが西洋で誕生した。とりわけ、イギリス革命と産業革命を経て市民社会と資本主義経済が成立した1800年代のイギリスでは、多くの登山家が様々なルートで我先にとアルプスを登った。西洋で誕生したアルピニズムは、幕末から明治にかけて来日したイギリス人外交官、政府招聘学者や技術者、宣教師などを通して、日本にも広まっていった。

明治14年（1881）、駐日イギリス公使館の書記官だったアーネスト・メイスン・サトウ（1843 ～ 1929）とアルバート・ジョージ・シドニー・ホース（生年不詳～ 1897）は、自身らが旅した日本の都市や山岳地域の情報をまとめ、当時世界的に有名だったロンドンのマレー社のガイドブックを参考に、外国人向けの日本旅行ガイドブック『HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN CENTRAL & NORTHERN JAPAN』（邦題：『中部・北部日本旅行案内』）を出版した。３版以降、執筆者を代え、『HANDBOOK FOR TRAVELLERS IN JAPAN』（邦題：『日本旅行案内』）の題で改訂増補をかさねながら９版まで出版されたこのガイドブックは、多くの訪日外国人が手にし、その情報をもとに日本各地を旅したとされる。立山についての記述も多くみられ、９版ある中で最も頁数が多い２版においては、立山について書かれた「ルート34越中から飛騨」をめぐるルートが25頁も割かれている[(1)]。掲載された全64ルートの中で５番目に多いボリュームである。「越中と飛騨」より頁数の多いルートが東京や京都、大阪、東海道など明治初期の主要な都市や街道であったことを考えれば、ルート34の注目度がいかに高かったかが想像できる。ルート34では、北アルプスの標高、植生、生物、岩石などの分析とともに、旅の順路や宿泊先、見どころが記載されている。これらの情報はサトウやホースをはじめとするイギリス人たちが、地元の猟師などを雇い、その案内のもとに次々と高峰へ実際に登って得たものである。イギリス人たちは登山情報を交換しあい、成果を日本アジア協会[(2)]で発表し、そこでの情報をまとめ『日本旅行案内』が出版された。明治21年（1888）に初来日し、日本における近代登山[(3)]の父として位置付けられているウェストンも、この本の情報をもとに日本アルプスの高山を登っている。また、ウェストンは３版以降では資料提供者となり、出版に貢献している。

『日本旅行案内』の読者は外国人に限らず、日本人著述家や登山家にも影響を与えた。明治27年（1894）に『日本風景論』を刊行、「登山の氣風を興作すべし」と呼びかけた志賀重昂もその１人である。志賀自身は登山家ではなかったため、『日本風景論』における中部山岳地帯の案内は、主として『日本旅行案内』を下敷きとしている[(4)]。その後、志賀の著作によって登山に目覚めた小島烏水が、明治38年（1905）に日本山岳会を設立したことを考えると、イギリス人の登山活動やその成果である『日本旅行案内』刊行は日本における近代登山の進展にとって、重要な出来事であった[(5)]。

本稿では、西洋において山の認識がどのように変化し、近代登山の成立に至ったかを考察し、『日本旅行案内』の記述を参考に、立山に訪れたイギリス人たちが何を見て、どう記録したかをまとめていく。外国と

立山の関係の黎明期を見ることで、今後、外国人から見た立山という視点で、立山の魅力を発信していく方法を考える際の一助としたい。

１．ヨーロッパにおける近代登山の成立

Ⅰ　古代からルネサンス期における登山

1574年にスイスの歴史家ジョシアス・シムラーはアルプス登山を扱った『De Alpibus Commentarius』を著した。この本は、1904年に W.A.B. クーリッジによって『Josias Simler et les origines de l'Alpinisme jusqu'en 1600』(6) の中でラテン語からフランス語に翻訳され、近代以前のヨーロッパアルプスの歴史や自然について知ることができる１冊となっている。巻末には付録という形で、シムラーが様々な年代記、歴史書や修道院の記録などから、近代以前の登山に関する記述を抜粋したものが18編掲載されている。また、フランシス・グリブルの『The Early Mountaineers』(7) にも近代以前の登山についてまとめられている。両書から近代以前の登山を取り上げ、古代、中世、ルネサンス期の各時代における山の認識を確認し、その変化について考察していきたい。

古　代

第一に紀元前218年のカルタゴ将軍ハンニバルによるアルプス超えがある (8)。ハンニバルがローマを奇襲するべく大軍を率いてアルプスを越えたことは有名である。紀元前181年にはマケドニアのフィリップ王が現在のブルガリア共和国の首都ソフィアの近くにあるハエムス山を登った。フィリップ王は頂上から黒海、アドリア海、ドナウ川、アルプスを見ることができるという話を聞き、ローマ人との戦争に役立つと考え登頂を試みた。３日かけて登頂したものの満足いく成果は得られなかった (9)。

古代ローマでは地理・歴史学者であるストラボンがエトナ山を登っている。ストラボンは紀元前63年から21年の間を生き、その間にシチリア島のエトナ火山へ登ったとされる。彼は古代ギリシアの哲学者エンペドクレスが火口に飛び込んだ際の青銅のサンダルが、頂上付近に残っているという伝説を確認すべくエトナ山へ登った。火口でエンペドクレスのサンダルを見つけることはできなかったが、ストラボンは火山の活動について分析・記録している (10)。126年から132年の間には、ローマ皇帝のハドリアヌスが領内を見渡すためにエトナ山に登り、そこで日の出を眺めた。また別の機会に、日の出を見て黙想するためにカシオス山へ登った際には、雨が降ってきて稲妻が落ちたと記録されている (11)。カシオス山はトルコとシリアの間にある現在のジャベル・アクラ（Djebel Akra）ではないかと考えられる。362年ごろにはローマ皇帝のユリアヌス（位361～363）が同じくカシオス山を登ったが、記録には登ったということと山の形について簡単に書かれているにすぎない (12)。

395年にローマ帝国が東西に分裂し、帝国の北方の防備がおろそかになると、土地不足やアジア系遊牧民フン人の圧力によってゲルマン諸部族がローマ領内に侵入しはじめた。その中で、ゲルマン諸部族のうちの１つであるランゴバルドのアルボイン王が569年にイタリアのモンテ＝マジョーレに登っている。ランゴバルドはライン・エルベ両河の間に定住していたが、６世紀半ば過ぎに移動をはじめ、アルボイン王は多くの兵を率いてイタリアに達した後、モンテ＝マジョーレへ登った。頂上からの景色を眺め、山で出会った老人と野生の水牛について話したとされる (13)。

ストラボンのように学術的な関心を持っての登山もあるが、古代の登山のほとんどが為政者による軍事的なものであり、人々が積極的に登山を行ったという記録は見当たらない。

中　世

フランスのモン＝スニの麓にあるノヴァレーズ修道院の年代記には、1025年から1050年の間にイタリア

とフランスの境にあるロシュメロンに挑んだ記録されている。ローマの建国神話に登場するローマの建設者であるロムルスがロシュメロン山中に莫大な財宝を残したという話を聞き、それを得るためにどこかの伯爵が登ったが、頂上に近づくと上から石が投げつけられたという。その後、多くの聖職者を連れ、聖水や十字架を持ち山へ登ったが、結局登頂することはできなかったという[(14)]。1276年から1285年の間に、アラゴンのピエール３世がピレネーの山に登頂した際に、頂上で竜にあったと記録されている[(15)]。この部分については『山岳　第３巻　山の芸術』[(16)]に訳出されているので以下に引用する。

アラゴンのピエール３世は、悪評高い山の頂きへ行ってみようと思いつき、そのため２人の騎士を伴って出かけた。さて、既にかなり高いところまで登ったとき、まことにおそろしい雷鳴のような音を聞いた。とりわけ、稲妻と雷光が眼の前に光り、嵐が襲いかかった。王の２人の従者は勇気を失いはじめた。疲れ切って歩けなくなり、雷鳴におびやかされて息もたえだえになった。ピエールは、彼らにあくる日まで待っていてくれるように頼んだ。もしそれで戻ってこなかったら、山を下りて、好きなところへ行ってもいいといった。王はそれからたいそう難儀をして、ただ一人登りつづけた。そして山頂まできたとき、まさにそこに湖をみつけた。彼は湖に石を投げた。

そうすると、巨大なおそろしいドラゴンが飛び出し、空中を息吹きて暗くおおいつつ、あちらこちらを飛びはじめた。その後ピエールは、従者といっしょになって下山した。

1290年頃にジェノヴァ司教の Jacobus de Voragine が書いた歴史書にも、スイスのルツェルン湖を見下ろすピラト山に住む悪霊の伝説が登場する[(17)]。長文のため、小泉武栄氏が『登山の誕生』[(18)]の中で行った要約を引用する。

イエスを捕らえた総督ピラト（ラテン語ではピラトゥス）は、ユダヤ人の世論に負けてイエスに死刑を宣告し、十字架にかけてしまう。その直後、ローマのティベリウス帝から使者がやって来て、皇帝が癩病にかかってしまったので、どんな病気でも治すという評判の医師を連れてこいとの命令を告げる。この医師とはイエスのことである。ピラトは当惑するが、どうしようもなく、処刑したことを隠そうとする。しかし使者はイエスの弟子のヴェロニカという婦人に会って真相を知り、ヴェロニカを伴ってローマに帰ることになった。ヴェロニカは、イエスの顔を映したという神聖な品「ヴェロニカのハンカチーフ」を持参し、それによって皇帝の病を治す。

病の癒えた皇帝はピラトを捕らえてローマに連行した。ピラトには考えられるかぎりの恥ずべき死を与えることになったが、これを聞いたピラトはナイフで喉を刺して死んでしまう。皇帝は呪われた男の死体をティベル川に投げ入れさせた。ところが悪霊たちがやって来てピラトの死体を川から取り出し、それを担いで空中を飛びまわったので、大地は震え、水は波打ち、激しい稲妻と雷鳴が起こった。

人々は不安におびえ、死体をティベル川から引き上げて、ロッテンという別の川に投げ込んだ。しかしここでも同じことが起こったため、死体を川から出し、ローゼンというところに送り、土の中に死体を埋めることにした。だが、ここにも悪霊たちが押し寄せ、土を掘って荒らす始末。ローゼンの人びとはやむをえず、そこから40時間ほどかかる高い山の上に運び上げた。

そこはルツェルンの背後の山で、この山の岩峰の下には小さな沼があり、死体はそこに投げ込まれた。ピラトはここで悪霊となった。そしてときどき沼から脱け出しては、身の毛もよだつ妖怪となって草原を駆け抜け、牧人たちを驚かせて牧場から追い出したり、家畜を蹴散らして崖下に落としたりした。またしばしば恐ろしい嵐を起こし、畑や牧草地を水びだしにしたり、家や人間を押し流したりした。

中世のヨーロッパでは、山は悪魔や怪物の巣窟で、モン＝ブランにおいても、煉獄にいる魂が氷河のクレヴァスの中に積み重なっており、嵐や土砂崩れ、雪崩の責任も山に住む怪物や竜の仕業とされた[(19)]。山に登ること自体を楽しんだという記述は見られず、キリスト教が浸透した影響で、修道士の登山や登山中の迷信的、神秘的な出来事が記録されている。

ルネサンス

11世紀末から始まった十字軍の遠征やイベリア半島におけるレコンキスタ（国土回復運動）で、イスラームとの接触が増えた12世紀の西ヨーロッパでは、イスラーム世界から流入した本が大量にアラビア語からラテン語へ翻訳されるようになった。イスラーム固有の学問や、イスラーム世界においてアラビア語で保存されていたギリシアの古典文化が流入し、その刺激をうけて学問や芸術が花開き、各地に大学が設立された。14世紀に入ると、北イタリアの諸都市は東方との貿易や金融業によって経済力をもち、それを背景に北イタリアでルネサンスが始まる。ルネサンスの時期や概念は多様に解釈され、具体的にいつの何をもって始まったと論ずるのは困難である。ここでは、北イタリア諸都市が繁栄した14世紀からイタリアルネサンスが衰退し西ヨーロッパ諸国へ広がりを見せた16世紀にかけての時期をルネサンスとし、山に関する記録をシムラーやグリブルの著作から取り上げる。

1336年４月26日にイタリアの詩人でルネサンス的人間の先駆とされるペトラルカがフランス南部にあるヴァントゥ山を登った。途中、昔この山に登ったことがあるという年老いた羊飼いに出会い、登っても疲れて後悔が残るだけで、岩やいばらで体や衣服がずたずたになってしまうからやめたほうがいいと話をされたが、そのまま登り続け、頂上に達した。ローヌ川の谷が下に見え、ペトラルカは周りを見回して、広々とした下界の眺望に感動し、茫然と立ち尽くした。遠くにあるはずのアルプスの山々やマルセイユの海が見えることにも驚いた。自然や風景に感動している一方で、登山の最中に人間の生死の問題や聖アウグスティヌスのこと、魂の偉大さについて考えており、宗教的な側面も見せている[(20)]。

1492年にはアントアーヌ・ド・ヴィルらがシャルル８世の命を受け、頂上に聖母マリアの祠を建てるため、フランスのモン・テギーユを登頂し、梯子を用いて岩壁をよじ登ったと記録されている[(21)]。1511年にはレオナルド・ダ・ヴィンチが Monte-Bô に登った。山から流れる川や、みぞれを観察・記録している[(22)]。チューリッヒの医師、古典文献学者にして博物学者のコンラート・ゲスナー（1516～1565）は、1555年にスイスのピラト山に登って森、谷、川、泉、草地を観察し、その景色のすばらしさについて述べている[(23)]。

ルネサンスにおける登山は中世のようにキリスト教の影響を受けたものから、ペトラルカのように中世とルネサンスの両方の特色を感じさせるもの、ダヴィンチやゲスナーのように調査研究のために登ったものまで様々である。山を含む自然へのまなざしが、中世から少しずつ変化していったことは、先述した十字軍の遠征に伴うイスラーム学問からの影響はもちろんのこと、15世紀以降のオスマン＝トルコの勢力拡大から逃れ、ビザンツ帝国の学者や聖職者が西ヨーロッパへ移住してきたことも大きな要因である。貴重なギリシア語の文献をたずさえ、ローマ教皇庁やイタリア諸都市の有力者の庇護をたのんで移住してきたことで、ギリシア・ローマの古典文献が大量に流入した。これまでアラビア語からの翻訳を通じて知るにとどまっていた古典ギリシアの学芸を直接原典で学ぶことが可能になり、翻訳されたアリストテレスの『動物誌』やテオフラストスの『植物誌』などは人々の目を自然へ向けたとされる[(24)]。ゲスナーもアリストテレスとテオフラストスなどの古典に親しみ、ルネサンス期を代表する博物学者となった人物である。

Ⅱ　17 世紀以降の登山

15世紀末の新大陸の「発見」によって、ヨーロッパ人の活動は全世界に向けて拡大することになった。彼らは世界各地に探検航海を行い、南米やインド、中国、日本、東南アジア、アフリカなどから民族や自然、文化に関する膨大な資料を持ち帰った。そうした資料の蓄積やルネサンス期に古典ギリシアの学芸が盛んに学ばれたことは、17世紀から18世紀にかけて、ヨーロッパに博物学ブームをもたらした。博物学は、地球上の生物の分布や生態、鉱物や化石、自然景観や地質、地形の成り立ちなどを研究する学問であり、当時最先端の学問分野として社会における人気も極めて高かった。博物学が盛んになるにつれ、地質学者や植物学者が争ってアルプスの調査・研究をはじめ、文学でも山の美しい景観を描写した作品が誕生した。

科学者たちのアルプス調査

ヨハン・ヤーコブ・ショイヒツァー（1672～1733）は山の自然を調べるため、アルプスへの旅を繰り返し行い、スイスのほぼ全域を歩き回り、アルプスの地図を作成した。また山の植物や動物を観察し、氷河の運動に注目した最初の人物である[25]。ショイヒツァーは若いころは医師になるための教育を受けたが、途中で化石や植物に関心をもち、研究にのめりこんだ。高度の測定のほか、動植物の分布調査、気象観測、氷河と雪崩の観察を行ない、化石も採集し、1706年にスイスの自然史についてまとめた『Beschreibung der Natur-Geschichten des Schweizerlands』[26]を刊行した。ただし、彼は中世から近代科学確立に至る過渡期の科学者だけに、悪霊の存在は信じていないものの、竜については実在すると考えていたらしく、彼の著作には竜や蛇のような生き物が載っている[27]。

1744年にはピーター・マーテルが、サヴォイ氷河をイギリスにいる友人に向けて報告した２通の書簡に脚註を付し、銅版地図・図版を加えて『An account of the glacieres or ice Alps in Savoy』[28]を出版した。著者マーテルについては詳しいことはわからないが、アルプス最高峰のモンブランがはっきりと登場する初めての書物とされる[29]。スイス出身のオラス・ベネディクト・ド・ソシュール（1740～1799）は計７回の旅と氷河についての学術的観測を『Voyages dans les Alpes』[30]にまとめた。ソシュール自身は1787年にモンブランを登頂しており、これはモンブランの第二登とされている[31]。

1843年にはスコットランド出身でエジンバラ大学教授のジェームス・デビッド・フォーブス（1809～1868）がサヴォイ地方のアルプス（シャモニ付近）を旅行した際の見聞についてまとめ、『Travels through the Alps of Savoy and other parts of the pennine Chain』[32]を出版した。本では氷河の現象を科学的に分析・著述している。

アルプスを賛美した文学者たち

科学者たちがアルプスの調査を進める中で、山へ関心を持ち、登る人は増加していった。しかし、研究目的の登山は、散発的、断続的に行われたにすぎず、社会に大きな登山の流れをもたらしたものではなかった。一般に広く山の魅力を発信したのは作家たちであった。アルプスの景色を求め、観光目的で多くの人々がスイスを訪れるようになるのは、19世紀になってからであるが、16世紀より英国貴族たちは、スイスを訪れアルプスを見ていた。英国貴族の子弟は、国際人としての教養を身につけるため、グランドツアーと称し、数年以上をかけてヨーロッパ大陸をめぐる大旅行を行っていた[33]。主な目的地は先進国のドイツやオランダ、美術と文芸の発達しているフランスとイタリアが最も重要な必須の訪問国であり、スイスはイタリアへ向かうときに、やむをえず通過する交通上の通り道であった[34]。スイスで山を鑑賞しようとする発想は見られず、イタリアへ着くために通らざるをえなかった不便で恐ろしい山越えに過ぎなかった。英国人旅行者たちは、スイスで山越えをしたときの不快感をしばしば書き残している。「奇妙でとんでもなく恐ろしい岩だらけの山道を登った」[35]、「不格好な岩や、普通じゃない住民たち。もう二度と見なくて済むことを願う次第」[36]など17世紀から18世紀前までの記録には、スイスの山に対する不快感が綴られている。

18世紀半ば以降にヨーロッパで「崇高」美の概念が流行すると、スイスに所縁のある著名人がアルプスを訪れ、その景観について親しみをもって記述し発信するようになっていく。崇高とは、畏怖を伴うことによって感じる美であり、たとえば断崖絶壁、洞窟、渓谷、氷山、切り立った岩や山、火山の噴火、滝や荒天の海など、人間の力ではとうてい及ばぬ事物・事象や景観に対して美を見る感性である[37]。スイスの詩人アルブレヒト・フォン・ハラー（1708～1777）は 1729年に詩集『アルプス Die Alpen』を執筆し、アルプスの自然を賛美し、未だ文明に毒されていない自然の最後の避難所こそが山の世界とし、山の美しさと山里に住む素朴な人々を一種のユートピア（理想郷）として紹介している[38]。この著作は何ヶ国語にも翻訳され、山への認識に大きな影響を与えたとされる。さらに、ジュネーヴ生まれのジャン・ジャック・ルソー（1712～1778）は、1761年に『エロイーズ』の中で、アルプスの風景や生活を賛美し、小説の舞台となっ

た地域は、小説の広まりと共に、外国人旅行者にとって人気の滞在地となっていった。スイスにおけるルソー所縁の土地は、どこもグランドツアー中の英国人にとってスイス旅行中に訪れるべき場所となり、イギリスで発行されたスイス旅行ガイドブックには、必ずルソーと関わりのある町々が取り上げられた。

クックの団体旅行とウィンパーのマッターホルン登頂

科学者たちの登山や山を賛美する文学作品が広まりをみせ、19世紀に入るとアルプスがイギリスの人々にとって流行の土地となり、山麓をトレッキングしたり、氷河を見学したりすることがスイス旅行の定番となっていった。英国の鉱物学者ジョン・マーレー（1786頃～1851）は1829年に出版した『スイスの美と崇高のまなざし』で、当時のイギリスの人々にとって崇高美の代表格である氷河を訪ねることが最大の関心ごととなっているとしている。19世紀半ばを過ぎると、産業革命によって経済的に豊かとなった市民が、余暇活動を充実させるべく、アルプス観光に訪れた。1863年にはトーマス・クック（1808～1892）が団体でのスイス旅行を実施した。クックは世界で最初の旅行代理店の創始者といわれており、130名を引率し、1863年６月26日ロンドンを出発した。パリを経由し、28日にスイスに入り、各地を回った[39]。クックのスイスツアーから５年後の1868年、ヴィクトリア女王（位1837～1901）がスイスに旅行し、馬でピラトゥス山にも登っている。女王のスイス旅行は、イギリス人のスイス旅行熱に拍車をかけた。

多くのイギリス人がスイスへ訪れる中で、アルプスの未踏峰の征服をもくろむ登山家が現れた。彼らは地元の猟師などにガイドを依頼して、次々に4000メートル級の巨峰に挑み、10年ほどの間に主要なピークはほとんど陥落された。1854年のアルフレッド・ウィルスによるヴェッターホルンの初登頂から 1865年のイギリスのウィンパーらによるマッターホルンの初登頂までの 12年間をアルプス登山の黄金時代または「金の時代」と呼ばれている[40]。また、その間の 1857年には、イギリスで最古の山岳会であるアルパイン・クラブが誕生している。ウィンパーが自身のマッターホルン登頂と下山中に起きた悲劇を記録した『アルプス登攀記』は優れた登山記として現在も読み継がれている。

中世の時代に、悪魔や竜の棲み処とされ、恐れられたヨーロッパの山々は、ルネサンス期以降の調査、研究のための登山や、博物学の隆盛、文学者たちが作品中で山の自然美を讃えたことにより、観光そして踏破する存在へと変化していった。イギリスではこの傾向はより顕著で、ヴィクトリア期に増大した中産階級は喧噪とした都市を一時的に忘れさせてくれるアルプスの山へ向かった。山は恐れる存在ではなく、科学的調査、研究のフィールドかつ自然を感じるレクリエーションの場と考えるイギリス人たちは、19世紀半ばの自由貿易帝国主義の傘下におさめるべく向かった幕末の日本でも同様の関心を持って山岳へ向かった。

２．イギリス人、日本の山へ

嘉永７年（1854）、徳川幕府は鎖国政策を転換し開国に踏み切り、アメリカと和親条約を結んだ。同年にイギリス、55年にロシア、56年にオランダと同様の条約を結んでいる。58年には、これらにフランスを加えた５ヵ国と修好通商条約を結び、近代的外交、通商関係に入ったことで、日本の山岳に外国人の足跡が及ぶ状況が生じた。

外国人による日本国内での最初の登山は、初代イギリス公使ラザフォード・オールコック（1809～1897）ら８名による富士山登頂である。オールコックは、日本滞在中の経験をもとにした自身の著作『The capital of the Tycoon』[41]（大君の都）で富士登山について詳細に記している。

万延元年（1860）９月４日、オールコックは富士登山のために神奈川のイギリス領事館を出発した。富士登山の目的は、「外交使節団は首都に居住し、かつ日本国内のどこでも自由に旅行する権利が保証されている。」という条約の規定を自らが実行することに加え、外国との新たな関係に対する怒りや、外国人に対する敵意というものが政治の中心から離れたところで存在しているのか確かめるといったものだった[42]。

幕府は、国内が不安定であること、江戸から離れると危険であること、季節が遅すぎるということ、下層階級しか行かぬ巡礼にイギリス公使が出かけるのはふさわしくないこと、さらには山が裂けて登山者を飲み込んでしまうというような奇想天外な理由で延期や取りやめを求めた。しかし、これらの理由は条約を楯にとる各国の要求の前では効果はなかった。

登山隊はオールコックをはじめとするイギリス人８名、日本側からは副奉行１名、役人３名、目付１名、そしてその家来衆を含めて、30頭以上の馬と100人ほどの行列となった。大行列は東海道を進み、５泊を重ねて村山口（富士宮市）へ着いた。珍しい外国人の行列に見物に飛び出してきた群衆は「シタニリョ（下におろう）」の一声で土下座させられてしまう[43]。村山口で、案内役の３名と、ポーターとして数名の強力が一行に加わった。山頂手前の山小屋では、夜の寒さと蚤に苦しめられたと記録している。頂上では、イギリス国旗を掲揚し、オールコックのピストル５発に続き、全員交互に計21発の礼砲を頂上火口に向けて撃った。イギリス女王万歳を三唱して国歌を斉唱、最後はシャンパンで乾杯した。一行は諸種の観測ののち頂上付近に泊まり、翌日下山、熱海に向かった。この富士登山は単なる物見遊山ではなく、国内の情勢や自然環境などの調査も目的としており、登山メンバーの中には、植物学者や観測担当の軍人が含まれていた。彼らは道中や富士山中における植物の植生調査や山頂の溶岩や砂礫の採取、標高や温度など様々な観測活動を行っている。

オールコックの富士山登頂に、日本の庶民らは、至高の霊峰と仰ぐ山を異教の徒が穢したと拒絶反応を示した。当時のかわら版では、黒船に乗った天狗が風雨で異国人を吹き落としている様子が描かれ、霊山富士に異国人が登ったために神の怒りに触れたという内容で伝えられた。かわら版の文末は「いじん登山すべからずはやく下さんいたすべしと御こへ有し」と結ばれている[44]。しかし、その後も外交官らによる富士登山旅行は続き、慶応３年（1867）には２代目のイギリス公使ハリー・スミス・パークス（1828～1885）が夫人とともに富士山に登り、雪に覆われた頂上に達している。パークス夫人は外国夫人として初の富士登頂者となった[45]。

パークス夫妻以後、外国人の富士登山は急増した。明治10年（1877）前後から、文明開化の指南役に招かれた外国人科学者や技術者たちによる登山活動が、日本各地の山岳地帯で見られる[46]。彼らは職業上、山岳を調査、研究や観測の対象とし、高山植物、地形、地質、鉱物資源や火山、地震の調査、標高の測定や気象、天文の観測のため山に登り川を遡った。日本の山岳を欧米人研究者や技術者の眼で捉えた成果は、報告、研究論文、著作として発表された。日本人の官吏や学生らも同行し、その知識や技術の習得に努め、山岳は科学の対象、研究の場として見直されていった。

３．サトウとホースの『日本旅行案内』

明治５年（1872）、在日外国人たちが日本研究を交流・蓄積する「日本アジア協会」を横浜に設立した。イギリス公使館のサトウとホースは、会員や自らの日本行脚と研究を集成し、来日・在日外国人のためのガイドブックとして『日本旅行案内』を出版した。本章ではガイドブックが盛んに出版された時代背景と、『日本旅行案内』の編集者たち、立山を取り上げた「ルート34 越中と飛騨」の部分を詳しく見ていきたい。

Ⅰ　増大する旅行者

西洋では、19世紀は旅行と旅行記の世紀といってもよいほど特徴をもった時代であり、イギリスでは1840年までには約10万人が物見遊山に大陸へ渡ったとされる[47]。1836年には、マレー社の旅行ハンドブックの最初の巻（『ヨーロッパ大陸旅行案内』）がロンドンで出版され、以後80年間にわたってマレー社は様々な国や地域のガイドブックを刊行している。また1867年には汽船による太平洋横断の定期航路が開設され、1869年にはアメリカ大陸横断鉄道が完成、同年末にはスエズ運河が開通するなど、1870年代には、世界旅

行は飛躍的に便利になり、冒険家や特別の人ばかりでなく、一般の人も格段に容易に世界を旅行できるようになった[48]。1872年に連載されたジュール・ヴェルヌの空想小説『八十日間世界一周』もこの時代背景を反映している。この小説はスエズ運河開通のニュース記事とクック社のパンフレットにヒントを得て書かれ、1874 年には舞台化された。日本でもこの小説は翻訳出版された[49]。この小説には横浜が寄港地として登場しているように、現実でも1867年に太平洋郵船がサンフランシスコ－香港間の定期航路を開設し、その経由地に横浜が入ったことにより、旅行者たちは横浜に訪れていた。1870年に書かれたウィリアム・エリオット・グリフィス（1843～1928）は『皇国』の中で、横浜に多くの旅行者が訪れていることを記している[50]。

旅行熱に拍車をかけた要因として、1851年のロンドン博覧会をはじめ19世紀の後半に欧米各地で開かれた万国博覧会があげられる。もともとは自由貿易を先導するイギリスが、自国の産物や最新の技術を誇示する場であったが、そこを訪れた人々は、未知の世界、はるか遠い異国の物品や人々に出会う機会を得た[51]。19世紀後半の西洋世界のジャポニズム（日本文化愛好）の流れに博覧会は大きな影響を与え、旅行者のなかには、こうした風潮のなかで日本に憧れ、日本旅行へ出かけた人もいたとされる。

しかし、明治初期の日本では、外国人旅行者や居留民が自由に国内を旅行することは難しかった。安政５年（1858）の日米修好通商条約をはじめする欧米諸国との通商条約により、自由に行くことができる範囲は遊歩区域内に限られており、その範囲を超えて旅行することを内地旅行といった[52]。ただし、外交官に関しては内地旅行の制限を受けず、公使・領事は職務の遂行のため日本国内を旅行する権限が条約で認められていた。遊歩区域外、日本国内を自由に旅行したいという外国人の内地解放の要求に日本政府は種々の旅行免状（パスポート）を発給することで対応していった[53]。明治８年（1875）６月、外国人旅行免状を外務省から発行することが決定し、一般外国人の旅行許可書はこれに一本化された。明治13年（1880）には居留地に住む欧米人1,852人に対して、1,155通の免状が付与されている[54]。あくまで免状の付与数であり、実際に旅行へ赴いたかは定かではないが、かなりの割合で発行されている。内地旅行は実質的に少しずつ緩和される方向にあったが、名実ともに許可されたのは明治32年（1899）の条約改正による。これ以後、すべての外国人が日本国内を自由に旅行することが可能になった。外国人旅行者は日本国内を旅行する中で見聞きしたものを旅行記や紀行文のかたちで残していった。また内地旅行が活発になるにつれ旅行ガイドブックの必要性が高まっていった。旅行ガイドブックは 1780～1870年の間に確立しており、特にマレー社の旅行ハンドブックはシリーズ化されており、1836年の大陸旅行者のためのハンドブック（オランダ、ベルギー、ドイツ北部を対象）を皮切りに、1838年のスイス案内、1839年の北欧案内（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）、1843年のイタリア案内、1847年のエジプト案内などが刊行されていた[55]。サトウはマレーのガイドブックの日本版を作ることを目指し、明治12年（1879）に友人に宛てた手紙の中で、これから作成する日本のガイドブックをマレーのシリーズに組み込んでほしいという気持ちを記している[56]。結果として、明治14年（1881）に完成した『中部・北部日本旅行案内』は横浜のケリー社から出版され、サトウとホースによる自費出版であったが、２版以降はマレーのシリーズとして出版されたため、のちに1881年に出版されたものが『日本旅行案内』初版となった。

Ⅱ　『日本旅行案内』

① 全体の構成

『日本旅行案内』はハンドブックという書名が付けられ、Ｂ６版という携帯に便利な大きさである。しかし９版までの平均で560頁に及ぶ厚手の本となっており、各頁には８ポイント相当の小さな活字が二段組でぎっしり詰め込まれている。１冊に詰め込まれている情報は膨大である。９版までを通して、「序文」「序論」「案内」から構成されている。版によって内容は異なるが、「序文」には作成に当たって協力や情報提供を受けた人物の名前が記されている。「序論」は日本に旅行へ行くときにあらかじめ頭の中に入れておくべき情報やサトウなど当時の日本学研究の第一人者たちの研究成果が項目ごとに記されている。「案内」に関して

は各地の地理的案内にとどまらず当該区域の歴史と伝説や民話を豊かに加えて自然と人文の両面から地域を分析した地誌となっている。サトウをはじめとする外交官や政府招聘外国人たちが実際に各地を旅して得た情報が編集されている。初版から９版までの刊行年、総頁数、序論頁数（項目数）、案内頁数は下表の通りである。

【表 1】各版の刊行年および頁数

版次	刊行年	総頁数	序論頁数（項目数）	案内頁数
初版	明治14年（1881）	510	21（15）	489
２版	明治17年（1884）	705	119（24）	586
３版	明治24年（1891）	459	50（27）	409
４版	明治27年（1894）	528	72（29）	456
５版	明治32年（1899）	577	92（29）	485
６版	明治34年（1901）	579	92（28）	487
７版	明治36年（1903）	586	92（28）	494
８版	明治40年（1907）	570	91（28）	479
９版	大正２年（1913）	555	95（28）	460

初版と２版はサトウとホースによって、３版以降はバジル・ホール・チェンバレン（1850～1935）とウィリアム・ベンジャミン・メイソン（1853～1923）の編集となっている。２版の完成を前にサトウとホースは離日しており、その後の編集をチェンバレンとメイソンが引き継いでいる。表１で３版から総頁数が激減している理由として、３版の編集者であるチェンバレンが明治24年（1891）に『日本事物誌』を出版していることがあげられる。『日本事物誌』は日本に関する社会、経済、歴史、言語、伝統、宗教、芸術などの広範囲にわたる事項を百科全書的にまとめあげたものであり、『日本旅行案内』の２版（1884年刊）まで「序論」にあった「動物」「植物」「絵画」「彫刻」「地理」の５項目は『日本事物誌』の中に転載されている。旅行に直接必要と思われる項目は『日本旅行案内』に、各項目についての専門的な知識は『日本事物誌』へという編集方針がとられている。

② ルート34の全体像と立山に関する部分

『日本旅行案内』において立山は「ROUTE34 Etchiū and Hida」の中で紹介されている。９版の中で最も立山についての記述が多い２版のルート34の立山（富山）に関する箇所は下表の通りである。

【表 2】ルート34の見出しと主な情報提供者

見出し（ページ）		主な情報提供者
概　　説	（311 ～ 312）	ガウランド、ミルン、サトウ
大町から針の木峠を越えて富山へ	（313 ～ 315）	サトウ、ホース
立　　山	（316 ～ 318）	アトキンソン、ディクソン
富山から宮川渓谷を経て高山へ	（318 ～ 319）	サトウ、ホース
富山から高原川渓谷を経て高山へ	（319 ～ 320）	サトウ、ホース
土村から秘境有峰	（320 ～ 321）	マーシャル、ダイヴァース

概説には、越中から飛騨にかけては日本で有数の山々が連なる山岳地帯であり、「日本のアルプス」（Japanese Alps）と称してもよいと書かれている[57]。越中から飛騨にある高山で注目される山として、「Tate-yama」（立山）、「Goroku-take」（五六岳）、「Yari-ga-take」（槍ヶ岳）、「Norikura」（乗鞍）があげられ、立山の標高は9,500フィート（2,896メートル）としている（９版では2,996メートルとなっている）。山脈の地質学的組成や植生、動物相も紹介されている。具体的なルートに関しては、越中と飛騨のエリアにおける、出発地点と到着地点、距離、宿泊施設、見どころが複数提示してある。

「大町から針の木峠を越えて富山へ」では長野県大町市から針の木峠を越えて富山へ向うコースが紹介されている。針の木峠を越え越中へ至る道は、明治９年（1876）から明治10年（1877）にかけて完成した「Shindō（New Road）」を利用し、一人当たり５銭、荷物持ちの人夫は７銭を払うと通行可能と書かれている[58]。道順に加えて、各山岳の様相（標高や植生、地質の分析）が随所に書かれており、越中に入ってからは、黒部の小屋で宿泊が可能であること、ザラ峠、立山温泉、芦峅、小見、上滝、富山への道や各地の宿泊施設に関する記述がみられる。

「立山」では、芦峅寺での宿泊先、立山開山の祖を祀った神社の話、芦峅寺から立山への登山道、材木坂の伝説、地獄谷の様相、山頂から一望できる各地の山々について記述されている。

「富山から宮川渓谷を経て高山へ」と「富山から高原川渓谷を経て高山へ」では、富山から高山への道が２つあり、それぞれ趣のちがう景色を楽しめるとしている。両ルートともに風景や宿泊地について書かれており、神通川にかかる「kago-no-watashi」（籠の渡し）については詳細に記述されている。

「土村から秘境有峰」は他と比べ文章量は少ないが、サトウが聞いた有峰の集落に関する噂と、実際に訪れたマーシャルとダイヴァースが見た様子が書かれている。

③ 立山を訪れたイギリス人

サトウがルート34を執筆するにあたって情報提供を受けた人物の略歴と、旅の記録や論文から立山がどのように記述されているかを確認していく。

アーネスト・サトウとＡ・Ｇ・Ｓ・ホース

〈サトウ略歴〉

アーネスト・メイスン・サトウは1843年６月30日にロンドンで生まれ、ユニヴァーシティ・カレッジ在学中にイギリス外務省の通訳生試験に合格し、文久２年(1862)に初めて日本を訪れた。イギリス公使館付通訳生、通訳官、日本語書記官へと昇進し、日本語を自在に駆使して討幕派のみならず幕府側とも交流するなど、イギリス公使館にとって不可欠な外交官となった。明治２年(1869)２月に恩賜帰国をするまでの約６年半日本に滞在し、幕藩体制が崩壊し明治政府が樹立される近代日本の姿を目撃した。明治３年(1870)11月、約１年８ヵ月ぶりに日本に帰任し、外国人として初めて伊勢神宮に参拝するなど日本各地を旅行し、言語、考古、歴史、民俗、地理、宗教に関する論文や旅行案内など数多くの著作を日本アジア協会を中心に発表し、日本研究の第一人者となった。明治17年(1884)バンコク(シャム)総領事に転出、85年には公使に任命された。1889年モンテヴィデオ(ウルグアイ)、1893年タンジール(モロッコ)の公使をへて、日清戦争後の明治28年(1895)５月、日英関係強化のため日本公使に任命され、同年７月、12年ぶりに日本に赴任した。その後極東情勢の急転により1900年８月駐清公使に任命され、義和団事件の事後処理にあたった。1906年５月清国での任務を終えたサトウは日本経由でイギリスに帰国、45年におよぶ外交官生活から引退した。帰国後はオタリー・セント・メリーに隠居し、1929年８月26日86歳で亡くなった[59]。

〈ホース略歴〉

アルバート・ジョージ・シドニー・ホースの出生について詳しいことはわからない。サトウの『外交官の

見た明治維新』[60] には、慶応元年（1865）に英、米、仏、蘭の四国艦隊が兵庫に遠征した際、英国の旗艦プリンセス・ローヤル号上でホースにあったと書いてあり、このころは英国東洋艦隊に所属していたとみられ、サトウとはそれ以前から親交があったようである。慶応３年（1867）には横浜で「横浜周辺外国人遊歩区域図」を作成しており、図中の「REFERENCE」には慶応２年（1866）に神奈川県を騎馬で周遊したと書かれていることから、このころホースは横浜周辺にいたと考えられる。『佐賀藩海軍史』[61] には明治元年（1868）に佐賀藩士に砲術を教授していた写真が「明治元年長崎砲術伝習員及教師英人ホース氏」というタイトルで掲載されている。明治５年（1872）からは築地の海軍兵学寮勤務、明治11年（1878）には海軍省の英語・数学教師となった。明治17年（1884）に海軍省を退職し、1885年ナイアサ領事、1889年タヒチ島領事、1894年ハワイ国ホノルル府駐在総領事となり、1897年にホノルルで亡くなった。

〈サトウとホースが見た立山〉

サトウとホースは越中と飛騨へ向け、明治11年（1878）７月17日に東京を出発した。この旅行の記録をサトウは日記に残しており、イギリスの国立公文書館にサトウ文書として保存されている。ここでは昭和53年(1978)刊行の『富山県史だより３』に所収されている、福沢都茂子訳の「英国公使館書記官アーネスト・サトウの立山登山日記―「アーネスト・サトウの日記」―より」[62] と庄田元男訳の『日本旅行日記１』[63] を参考に、サトウとホースの立山での行程をまとめ、立山や富山に関する記述を抜粋していく。

【行程】

東京を出発し、鴻巣－安中－碓氷峠－軽井沢－小諸－上田－田沢－池田－大町と進み、７月22日野口に宿泊。
〔７月23日〕野口－針の木峠－黒部川－平の小屋
〔７月24日〕平の小屋－ヌクイ峠（苅安峠）－千草峠（ザラ峠）－立山下（立山温泉）
〔７月25日〕立山下－松尾峠－室堂－地獄谷－室堂
〔７月26日〕室堂－鏡石－姥石－桑谷平－材木坂－芦峅寺（等覚坊・佐伯正範宅泊）
〔７月27日〕芦峅寺（休養日）
〔７月28日〕芦峅寺－シナキ（千垣）－岩峅寺－上滝－福沢－二本松－牛ヶ増－町長－薄波－吉野
吉野を出発し、猪谷－船津－大坂峠－高山－黍生谷－野麦－日和田－西野－木曽福島－御嶽－木曽福島－松本－和田－軽井沢－熊谷を経て、東京に８月13日に帰着。

【立山や富山に関する記述】

新湯「直径40ヤード（※36.58m）のこの池の側面は急にゆるやかな勾配になって、青緑の水をたたえている。中心では泡を噴き、蒸気や硫黄臭い臭気を発している。指の先をちょっと突っ込むだけでも熱い。男が二人、池の縁でいわゆる「硫黄の花」－すなわち水に沈殿した硫黄－を捜していた。宿の主人の話によると、この池は 1858年２月25日の大地震まではただの真水の池であったそうである。」

立山温泉「おおやけには有峰として知られている温泉があり、深見六郎が経営している。彼はそこを立山下の温泉－リュウザンはすなわちタテヤマのこと－ともよんでいる。出湯は、華氏124度で多量に湧き出ていて、入浴者のために冷水を混ぜている。それは冷たいものも熱いものもあり、味は全くない。」

安政の大地震「地震の際に、山の大部分が谷に真向いにくずれ落ちて、川（真川・湯川）をすっかりせき止めた。１ヶ月後雪が解けると、水は鉄砲水となってその障壁をつきやぶり、下方の部落は泥の海となった。」

有峰「宿の主人（立山温泉）が有峰のことを話してくれた。彼らは平家の子孫で、血族結婚をする奇妙な氏族である。11軒だけが残っており、それぞれ３、４つの所帯からなっていて、お金を持つことは絶対に許されない。容姿は互いによく似ていて、仲間うちだけしか話が通じない。」「（芦峅の宿の主人が）有峰には行かないようにと忠告してくれた。有峰へは、芦峅からミズシマまで３里。そこから一軒の家もない山道を８里登っていく。有峰の住人は「ひえ」と汁のかわりの塩水を食するだけだから、米、その他の食料品は持っ

ていかねばならない。12、３軒しか家がなく、それぞれに３、４つの所帯が住んでいる。彼らは血族結婚するが、身体の大きさも知能も普通の人に劣ることはないそうだ。平家の落人の子孫であることは疑いないらしい。言葉は普通の日本語とはかなり異なり、ききなれた人でないと話が通じないそうだ。個人名も古めかしい。」

地獄谷「環状孔がたくさんあり、最大のもので直径20フィート（※ 6.096m）ぐらいはあり、地孔の中では熱湯と泥、硫黄を多量に含んだ水が猛々しく煮えたち、泡立っている。泥水と硫黄の地孔の一つで直径15フィート（※ 4.572m）ほどのが、力いっぱい空中に躍動している。大地にあいた深い割れ目の縁まで噴きだされたものが消え去り、またもとどおりになり、表面にいつまでも円形の波がたっている。別の黒い泥の噴水地が万物を圧倒するかのようにはりきっている姿は、滑稽にさえ思えた。しかし、それはいつも目的を達成することなくもとの溜池に落ちついた。深い地孔や割れ目から噴出する蒸気の音は耳をつんざくばかりであった。どの池も最高温度は華氏190度から180度で、硫黄の池はたった160度であった。そして、地孔の片端から流出している川の中に、温度が42度しかない温泉がブクブク湧いている。大きいものから直径２インチ（※ 5.08㎝）ほどの小さいものまで、すべての地孔を数えるのは無理であろう。」

室堂「参拝人のためのこの小屋は、木造でとても風通しがよい。松材のたき火で暖をとるので、煙が目にしみて痛い。寝具はないし、食器やその他の用具もほとんどない。食物として手にはいるのは水米だけである。山はふつう７月20日から９月８日までの50日間が参拝人を近づける。今年はすでに100人の参拝者が登っていた。この地点からは、富山平野がよく見晴らせる。浄土山への道は右へ、主峰の権現堂へはまっすぐに登る。三番目に別山という山がある。」

鏡石「その石は道の右側にあり、表面が平らで直立した大きな石で、下部に像が刻まれている。」

姥石「姥石－ナース・ストーン－と呼ばれるもう一つの標識石のある地点に着いた。雨がふると水路となる道には大きな石がごろごろしていたが、この石は、そういう石がいっぱいある道の中央に立っていた。」

材木坂「ある婦人が、宮の開祖の切り倒した材木をまたいだため、材木がこれらの石に変えられたという伝説がある。」

芦峅寺と雄山神社「宮の神官の長の家に泊まった。その人は、以前は神仏混淆の仏教徒であったが、自分の利益を守るために神道に改宗した。彼は酒を出し、ディランやガウランドが数年前来た時に話してきかせたインギリス（イギリス）の首都ドンドル（ロンドン）の話をたくさんしてくれた。」「芦峅の佐伯マサノリ宅で一日休んだ。彼は立山開山の祖佐伯有頼を祀って701年に建立された御上の神社という宮の神官の長である。本殿あるいは祈願殿の後ろにある有頼の墳墓は、３フィート（※ 91.44㎝）ほどの小丘で、上に常緑のシラカケが植えてあり、不揃いの石で８フィート（※ 2.4384m）四方が固められている。杉の老木の立派な森の中である。文武天皇を祀った大宮と、手力尾神を祀った若宮の２つの宮がある。有頼の父はこの近辺地域の領主で、鷹狩りが好きであった。彼の父が朝廷へ出かけて留守の間に有頼は、もし逃がしたら家に帰らないという条件で、父の気にいりの鷹を義母から借りた。そこで彼はここから25マイル（※ 40.2336㎞）北にあるカジカノに鷹狩りに出かけた。そしてその鷹を見失い現在岩峅寺の建っている場所まで追いつめていった。すると１匹の熊が現れ、鷹はその熊の姿におそれをなして戻ってこない。有頼が熊めがけて矢を放つと、熊も鷹も川の上流に逃げていった。彼が捜しに山に入っていくと、室堂の反対側のほら穴で鷹と熊が不動明王と阿弥陀如来になっているのを見た。そこで、彼はその地に３年３か月留まり、宮を建立した。彼の家臣も皆佐伯の姓を継いだ。その姓は芦峅寺に11軒、岩峅寺に37軒ある。以前はそれぞれの神社に対して50俵、家に対しては13俵ずつ寄進米が与えられていたし、その上、建物は藩の費用で建てられていたがこの寄進米は現在政府によって禁止されている。村には絵のように美しい茅葺きの民家がある。」

W・ガウランド（1842 ～ 1922）

〈ガウランド略歴〉

ウィリアム・ガウランドは 1842年にイギリスのイングランド北東部にあるグラム州サンダーランドに生まれ、英国化学専門学校に入学、1868年には英国鉱山学校に転学し、科学及び冶金学を専攻した。明治５年（1872）に大阪造幣寮の化学と冶金の技師として招聘され来日した。貨幣鋳造技術の発展に貢献し、大阪陸軍砲兵工廠の顧問も務めた。日本各地の古墳の研究を重ね「日本考古学の父」と呼ばれる。本州中央部の山に登り、「日本アルプスの命名者」として知られる。明治21年（1888）に造幣局を満期解約しイギリスにもどり、1922年にロンドンの自宅で亡くなった。

〈ガウランドの立山登山〉

サトウは『日本旅行案内』初版の序文で、吉野と飛騨・信濃地区の山岳の地質と後者の主な高峰の詳細な情報について世話になったとガウランドの名前をあげている。しかし、ガウランド本人による登山記録は残されておらず、周囲の情報をもとに足跡を見ることしかできない。ガウランドの登山について窺い知ることができる資料として、①地震学者ジョン・ミルン（1850～1913）の論文「EBIDENCES OF THE GLACIAL PERIOD IN JAPAN」[64]（日本における氷河期の遺跡）、② 1895年12月９日の英国地学協会の例会におけるウェストンの論述「Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894」についての検討会中のガウランドの発言[65]、③サトウ日記の芦峅寺での記録、④「高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）」がある。

①ジョン・ミルンの論文「EBIDENCES OF THE GLACIAL PERIOD IN JAPAN」

論文中でミルンは各地方の高山の標高とミルン自身を含めた外国人の登山実績を示している。その中の記述として、自身は越中南部から飛騨、信州の間に至る山脈を１回だけ旅したことがある程度で、詳細は知らないが、大阪のガウランド氏から山の高度表と岩石標本をもらいまとめることができたと感謝を述べている。立山については「北緯36度35分。標高9500フィート。旧火山でその一部は溶岩状を呈している。ガウランド氏はこの山には特に雪が多いと言っている。その雪田は長さが半マイルも続き、万年雪となっている。」と書かれている。

②「Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894」についての検討会中のガウランドの発言

1895年12月９日の英国地学協会の例会において、ウェストンが滞日中の登山実績を報告した。その後の検討会でガウランドの発言が記録されている。1873年の２年後にエドワード・ディロンと立山に登ったこと、立山の硫気孔が他とくらべてとりわけ強度の鉱水であること、槍ヶ岳、爺岳、五六岳、乗鞍岳の初めての登山者が自分であることなどを発言している。

③サトウ日記の芦峅寺での記録

先述したサトウ日記の1878年７月26日に「ディランやガウランドが数年前来た時に話してきかせたインギリス（イギリス）の首都ドンドル（ロンドン）の話をたくさんしてくれた。」との記録がある。

④高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）

高山市教育委員会所有の「高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）」は明治９年（1876）～明治17年（1884）までの９年間に高山町に宿泊した外国人旅行者関係の文書をまとめたものであり、そこにディロンとガウランドの旅行免状の写しが綴られている。それによると明治10年（1877）７月ガウランドとディロンの二人が、地質風土査明（調査）のため、現在の新潟県・長野県を経て飛騨地方へ入り、近江・大和・紀州を廻って帰阪したとされる。７月19日に高山で宿泊していると高山町戸長が岐阜県権令（知事）に報告している。

ガウランドが立山に訪れ得た、山の高度や岩石についての情報をサトウが『日本旅行案内』に生かしたことは序文と①～④から想像できる。ルート34で掲載されている山の名前や高さはミルンの①と一致。ガウランドが立山に訪れた時期については複数説があり、②だとすれば明治８年（1875）ということになるが、三井嘉雄氏は『丹生川村史』[66]の資料や④をもとに明治10年（1877）と考証している。

R・W・アトキンソン（1850 ～ 1929）

〈アトキンソン略歴〉

ロバート・ウィリアム・アトキンソンは 1850年にイギリスのニューキャッスルで生まれ、英国化学学校および英国鉱山学校で学び、明治７年（1874）に日本のお雇い教師（化学）として東京開成学校に赴任した。日本酒醸造についての最初のまとまった科学的研究や、染料としての藍の研究を行った。また日本古来の青銅鏡についての研究もした。明治12年（1879）の夏、工部省のお雇い外国人だったウィリアム・グレイ・ディクソンと東京大学の学生だった中沢岩太と甲斐・信濃・飛騨・加賀・越中の各地を歩き、八ヶ岳・白山・立山に登った。明治14年（1881）にイギリスへ帰り、帰国後はウェールズに事務所を設け、技術の顧問として炭坑や鉄鋼業者のために働いた。1929年に79歳で亡くなった。

〈アトキンソンの立山登山〉

アトキンソンは明治12年（1879）の７月16日から８月15日にかけて信州・飛騨・越中方面に旅に出て、その紀行を「YATSU-GA-TAKE,HAKU-SAN,AND TATE-YAMA.」と題して翌年の『The transactions of the Asiatic Society of Japan』に発表している[67]。立山に関する部分は渡辺芙時雄が訳出しており[68]、アトキンソンの立山に関する記述をまとめてみる。

【行程】

７月16日に東京を出発し、川越－栃本－海尻－木沢温泉－伊那部－木曽福島－御母衣－白山－牛首－鶴来－金沢－津幡－石動－高岡－小杉と進む。

〔８月 ７日〕神通川の舟橋を渡り、平井屋旅館に宿泊

〔８月 ８日〕常願寺川沿いにさかのぼり、上滝から原村へ

〔８月 ９日〕籠の渡しで川を渡り（真川と湯川の合流地点付近か）、立山温泉へ

〔８月10日〕松尾峠を通り鏡石を経て室堂、地獄谷へ

〔８月11日〕雄山に登頂し黒部へ

〔８月12日〕針の木峠を越えて大町へ

【立山や富山に関する記述】

真川と湯川「流れを横切るために“籠の渡し”という装置が設けられているのである。この装置の名前には一種の空想的な響きがあるが、我々としてもその名を聞いて少なからず興奮したものだ。というのも、原村でも言われたことだが、この渡しの装置は、籠の中に何か一つのものしか乗せて運べないという。その呼び名はまさに、狭くて両岸がそびえ立った峡谷の姿を彷彿とさせる。川面高くに綱が渡され、行き来する籠が不安定に揺れながらぶら下がっているという姿である。だが、この場所に来て一目見たとき、そんな空想的な思いは消えていた。川面から８フィート（※ 2.4384m）か10フィート（※ 3.048m）上に綱が渡され、両側は岩にしっかりと結び付けられている。綱には、よく山で使われる籠がぶら下がっており、その綱を伝って対岸から対岸へと籠を運ぶのである。」

多枝原谷「川床に散在する巨大な岩－これには、川の流れの力によって垂直に大きな割れ目ができている。また、雷鳴のような音を響かせながら大きな石を流し運ぶ水流－これらがすべて重なり合って、多枝原谷の壮観さを生み出している。」「巨大な岩石が累々と重なった広いところがあったが、これは1858年の大地震でできたもので、片側の山の半分ほどが崩れたのだという。」

立山温泉「ここはよく繁盛しているようだが、宿や浴場のどちらを見ても、貧相である。」

室堂「室堂の状態は、白山のよりもひどいものだった。すきま風が自由に中を吹き抜けるし、寝床も粗末、ましてや粗朶を燃やす煙はそれ以上にひどかった。」「巡礼登山者の数が白山よりもずっと大いにもかかわらず、その施設、待遇の貧弱なことは驚くべきことである。」「夜の冷たい風を防ぐのに寝床となる筵を戸に当

てがい、それを手で押さえているほかなかったのである。」

地獄谷「我々は有名な噴気孔を見学に行くことにした。この噴気孔は小屋から６町ほど離れた谷あいにある。室堂を出て左手の方へ行くと、二つの池の間を通る。一つはなだらかな斜面にある浅い池、もう一つの左側にある池は切り立った縁を持ち、水の色もかなり濃い緑色をしている。これはおそらくナウマン氏が論じているように、旧火口の一つと思われる。その池の間を過ぎて先へ行くと、丘陵の崖っぷちに出た。晴れた日なら、ここから噴気孔一体の鳥瞰が得られることだろう。その石ころだらけの崖を下っていくと、柔らかなぬかるみ状の谷底に達した。そこは、適当な距離をおいて、浅黄色の小丘が２つ３つできている。」「近寄ってよく見ると、それは白っぽい岩石、たぶん変質した花崗岩と硫黄とが混ざりあった状態のものであることがわかった。」「噴気孔の一つは恐ろしいほどの音を立てており、その勢いは噴気孔から10～15メートルも離れた所に硫黄の塊を付着させているほどである。これらの噴気孔がシューシューと音を立てている様子を見ているうちに、この勢いを利用すれば、何か大きな動力が得られるのではないかと思われた。」

雄山（途中）「室堂から860フィート（※262.128m）登った所にある第一の神社をすぎてからは、困難な登りになる。この第一の神社は最高点の御本社と浄土山とを結ぶ稜線上の平坦地にある。第二の神社（室堂からの高さ1,050フィート（※ 320.04m））からの山々の眺めはすばらしく、北西の方向に延びた能登半島や日本海までが目に入った。しかも、我々がこの地域に入ってから初めての富士山の姿を見ることができたのである。」「この上には非常に美しい社殿がある。この稜線から頂を見上げれば、なぜここに立山（そびえ立つ頂の意）という名が冠せられたかわかろうというものだ。他のどの山よりも高く、その肩から上の頂をのぞかせて、船人にはいい目印になっている。一回の休みもとらずに登り続けたが、ちょうど一時間かかった。」

雄山（頂上）「白山からの眺めも素晴らしかったったが、立山の頂上からの眺めそれをはるかにしのぐものだった。朝の好天に恵まれ、あらゆる地点を簡単に見分けることができた。この立山とは反対側の海に近いところにある美しい円錐形の富士山に至るまで、次から次へと連なる山波のうねり、そのどの一つをも極めてはっきりとした姿で目にすることができたのである。」「巡礼者たちはしばらくの間神官と話をしているが、その間にも要領の大意が何回も伝えられる。そして神官は社殿の前にひざまづいて腰を低くし、巡礼者たちも神官を取り巻くように膝をついて、祈りがささげられる。その祈りのなかには、タテヤマとかイシカワという名が何度も繰り返されていた。神官が手を打ち、そのあと“南無阿弥陀仏”と大きな声で唱えて祈りを終えると、熱心な信者のほとんどが“ありがとう”と言う。それから神官は立ち上がり、信者への説教を行ない、伊弉冉、伊弉諾の話を聞かせる。そのあと神官は様々な聖宝－たとえば槍の穂先、剣、各種の硬貨や鏡など－を持ち出してくる。信者たちはそれを見て感嘆の声を発し、充分な満足感を味わうのである。」「そして巡礼者たちが立ち去るとき、お米とお神酒が振りまかれるのだが、これはあらかじめ祈祷料として渡しておいたものである。儀式そのものは、まるで仏教と神道が典型的に混淆したもののようであった。巡礼の人びとは常に“南無阿弥陀仏”と唱和しているのであるが、口の中でもごもご唱えているので、その音は“ナ・アム”のようにしか聞こえない。」

【ディクソンの見た立山】

アトキンソンとともに旅したウィリアム・グレイ・ディクソンは 1854年にスコットランド、グラスゴー近郊のベイズリーに生まれた。明治９年（1876）に日本政府に招かれて来日し、工学寮英語教師として明治13年（1880）まで在職した。イギリスに帰国後、『The Land of the Morning』(69) を著し、その中で立山を含む日本の山を紹介し、ディクソン自ら「THE SUMMIT OF TATE-YAMA WITH YARI-GA-TAKE IN THE DISTANCE」と題して雄山山頂をスケッチしている(70)。長老派教会牧師として、オーストラリア、ニュージーランドで布教。1928年にニュージーランドのダニーデンで亡くなった。立山での行程は基本的にアトキンソンと同様である。先述のアトキンソンの発表後のディスカッションにおいてディクソンが立山について話している。

多枝原谷「最近ある日本人から聞いたところによると、私たちが通過した多枝原谷は日本人の間でも、日本

の全体的に柔らかく絵のように美しい風景の中で特筆すべき荒涼としたもので見応えがあるとされている。渓谷の上にそびえ立つ荘厳な断崖には鋭角的な岩が続いているので、恐ろしい鬼が住むとされ鬼ヶ島（悪魔の城）という名前がつけられている。」

針の木峠「この針の木峠周辺には一つの悲劇が語り継がれている。太閤時代の佐々成政の話で、彼は信州から敵の手を逃れる途中ここで飢えたため一族もろとも非業の死を遂げたというのである。」

D・H・マーシャルとE・ダイバース（1837～1912）

〈マーシャル略歴〉

イギリス出身のデイヴィット・ヘンリー・マーシャルは明治６年（1873）から明治14年（1881）まで工部大学校で数学と物理を教えた。明治８年（1875）に日本アジア協会に所属し、活発に研究活動をした人で、発表論文の中には日本の地理に関するものが見受けられる。「Notes on some of the Volcanic Mountains in Japan」[71] では立山はとても高い火山だが現在は休火山であると書かれている。帰国後、ダブリン大学で特別講義を行い、のちカナダのキングストンにあるクィーンズ大学で物理学を教え名誉教授に推された。

〈ダイバース略歴〉

エドワード・ダイバースは1837年11月ロンドンに生まれた。専攻は化学であったが、医学も修め、1870年にはミドルセックスホスピタルメディカルスクールで法医学の講座を担当した。明治６年（1873）に工部大学校の教師となり、化学を担当したほか、明治15年（1882）には同校の教頭となって学校行政にも携わった。日本における無機化学研究の基礎を作り、タカジアスターゼの高峰譲吉や下瀬火薬の下瀬雅允は門下生である[72]。明治32年（1899）まで日本に滞在し帰国。1912年にロンドンで亡くなった。

〈マーシャルとダイバースの有峰訪問〉

ガウランドの箇所で取り上げた高山市教育委員会所有の「高山町旅行外国人宿泊関係文書（明治九年～同十七年）」にマーシャルとダイバースが明治12年（1879）７月から８月に松本・飛騨・富山にかけて旅行する旨を記した旅行免状の写しが残っている。また、先述したアトキンソンの発表後のディスカッションにおいて、ディクソンに続いてマーシャルも発言しており、ダイバースとともに有峰へ訪れたことを報告している[73]。

【有峰に関する記述】

「横浜のヘラルド社の記者が去年、立山の麓の温泉で聞いた話だが、この村には非常に排他的な人々が住んでいて、よその土地の人々とはいろいろな取引もせず、お金の使い方も知らないようだ。住人同士の近親結婚が多いせいか、人々の容姿が似ており、また知識も低いという。この種の話は、高原川渓谷の東茂住で鉱山を経営する一見知識のありそうな人からも聞いた。それによるとこの土地の住民は全く風変わりで、よそ者とは話もしなければ食料もわけてやらないらしい。性格は極端に鈍く、風貌がよく似ているというのだ。」「有峰の村には13軒の住居があり、いずれも美しい緑の高台に散在している。」「私の見たところでは村の人の様子は普通の集落の人のそれと殆ど変わりはない。彼らは訪問者にとても礼儀正しいが、食料については、予想していたように譲ってくれる余裕はないと言っていた。しかしながら食料を持参していると説明すると、村長は安心して我々をその家に泊めてくれた。各地では少なくとも一頭の馬を大切に飼っていた。家や神社には馬の絵が奉納されていて大事にされているとの印象を受けた。泊めてくれた家の主人は、寝具がないので粗末なむしろを敷き、木の枕で寝てもらうしかないといっていた。」「翌朝、出発する前に、村民の全部が私たちを見にやってきた。男、女、子供、彼らの誰を見ても痴呆じみた容姿は認められなかった。また、顔つきが似ているということもなかった。そして、品物の交換とかお金の使い方もわきまえていた。」「村民は総じて非常に貧しいが、幸福そうな生活をしており、外国人を見たのは私たちが最初であったにもかかわら

ず、子供たちですら怖がらず、ビスケットを差し出すと受け取ってくれた。」

おわりに

明治初期に立山へ訪れたイギリス人の記録をみると、彼らの立山登山はアルピニズムであり、調査研究目的でもあったことがわかる。彼らは立山の自然や山に登ること自体を楽しみながら、動植物や地質、文化や歴史について幅広く記録している。記録からは、明治初期の立山の自然環境、山頂での宗教儀礼、当時の暮らしなどを窺い知る上で有用な情報が記されており、明治初期の立山の地理、社会状況の理解に新たな手掛かりを与えてくれる。

さらに、外国人の眼差しが示されている点にも注目したい。旅行ガイドブックは不特定多数の人にその地域の魅力を伝え、実際の場所へ誘うという目的を持つ。そこには読み手が求めている情報、筆者が旅行者に伝えたい情報が記載される。外国人向け旅行ガイドブックである『日本旅行案内』には、明治初期のイギリス人を含む外国人が、魅力を感じ、見るに値した立山の自然、歴史、文化について書かれている。

本稿では、西洋における近代登山の成立について考察し、『日本旅行案内』の記述をもとに、情報提供者たちの日記や紀要にあたり、立山に訪れたイギリス人の足跡、記述をまとめた。現在、立山博物館は立山への文化観光拠点として複数の事業に取り組み、立山の魅力を発信し、国内外から多くの人に博物館へも足を運んでもらうことを目指している[(74)]。目下、令和６年度の事業の１つとして、英語版WEBサイトの制作を進めている。「外国人から見た立山の魅力とは何か」の眼差しを持ち、内容、構成を検討中である。今後ますます増えると予想される外国人旅行者に対して、立山の魅力を伝えるべく、引き続き立山における外国人登山に関する調査を継続していきたい。

［註］

（１）２版の総頁数は705頁であり、序説を除くと586頁が各ルートの案内となっている。
（２）1872年に、日本や他のアジア諸国に関する事柄についての情報を収集し、出版するという目的で横浜在留の外国人によって設立された学術団体。
（３）市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」展示解説書（市立大町山岳博物館、2014年３月29日刊）。同書の58頁には、山に登ること自体を目的とした登山であり、地元住民による狩猟や薬草・鉱物採集、博物学者などの調査研究や職務として仕事、あるいは信仰を目的とした、それまでの登山とは一線を画すものを近代登山と説明している。
（４）布川欣一『目で見る日本登山史』（山と渓谷社、2005年刊）、69頁。
（５）庄田元男『異人たちの日本アルプス』（日本山書の会、1990年刊）、６頁。
（６）Coolidge,W.A.B（1904）．Josias Simler et les origines de l'Alpinisme jusqu'en 1600．Grenoble : Allier frères
（７）Gribble,Francis.Henry（1899）．The Early Mountaineers．T. F. Unwin
（８）註６、前掲書75頁～78頁。
（９）註６、前掲書672頁～674頁。
（10）註６、前掲書678頁～682頁。
（11）註６、前掲書682頁。
（12）註６、前掲書684頁。
（13）註６、前掲書684頁。
（14）註６、前掲書686頁。
（15）註６、前掲書688頁～692頁。
（16）『山岳　第３巻　山の芸術』（朋文堂、1958年刊）、42頁より引用。
（17）註７、前掲書43頁～45頁。
（18）小泉武栄『登山の誕生』（中公新書、2001年刊）、43頁～45頁。

(19) 註18、前掲書21頁。
(20) 註６、前掲書692頁～710頁。註７、前掲書18頁～24頁。
(21) 註６、前掲書714頁～728頁。
(22) 註６、前掲書728頁～730頁。
(23) 註６、前掲書746頁～768頁。
(24) 西村三郎『文明の中の博物誌―西欧と日本―上』（紀伊國屋書店、1999年刊）、260頁。
(25) 註７、前掲書69頁。
(26) Scheuchzer, Johann.Jakob（1706）．Beschreibung der Natur-Geschichten des Schweizerlands．Zürich : In Verlegung des authoris
(27) Scheuchzer, Johann.Jakob（1723）．Ouresiphoítes Helveticus, sive itinera per Helvetiæ alpinas regiones facta annis MDCCII. MDCCIII. MDCCIV. MDCCV. MDCCVI. MDCCVII. MDCCIX. MDCCX. MDCCCXI．Lugduni Batavorum : Typis ac sumptibus P. vander Aa
(28) Martel, Peter（1744）．An account of the glacieres or ice Alps in Savoy : In two letters, one from an English gentleman to his friend at Geneva; the other from Peter Martel, engineer, to the faid English gentleman．London : P. Martel
(29) 信州大学付属図書館．“書物で繙く登山の歴史１―ヨーロッパ近代登山と日本―（1）”． https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/matsumoto/find/tenjikotani1-01.html,（参照 2024-12-28）
(30) Horace-Bénedict de Saussure（1786-1796）．Voyages dans les Alpes, précédés d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Geneve．Genéve : Chez Barde, Manget & comp
(31) モンブランの初登頂は、1786年８月８日、モンブラン登山の玄関口であるシャモニー出身のジャック＝バルマ（1762～1834）とミシェル＝ガブリエル＝パカール（1757～1827）によって遂げられた。この登山はソシュールの懸賞に応じたものであった。
(32) Forbes,J.D（1843）．Travels through the Alps of Savoy and other parts of the pennine Chain : with observations on the phenomena of Glaciers．Edinburgh : Adam and Charles Black
(33) ピアーズ・ブレンドン、石井昭夫訳『トマス・クック物語―近代ツーリズムの創始者―』（1995年刊）の27頁において、グランドツアーはもともとエリザベス女王の時代に、教育の洗練された形態とて、「国民に古典時代の国々を実体験させることによって貴族教育の仕上げをする」べく始められたものと説明されている。18世紀が深まるにつれグランドツアーに出る人は増加していき、18世紀の終わりごろには常時４万人くらいの英国人が大陸に滞在していたとされる。
(34) 河村英和『観光大国スイスの誕生―「辺境」から「崇高なる美の国」へ』（平凡社、2013年刊）、18頁。
(35) 註34、前掲書19頁。
(36) 註34、前掲書20頁。
(37) 註34、前掲書50頁。
(38) 市立大町山岳博物館　ユングフラウ鉄道全線開通100周年記念 スイス政府観光局・市立大町山岳博物館共同企画展「スイス山岳観光の黄金期と日本人―その魅力と文化を伝えた人々―」展示解説書（市立大町山岳博物館、2012年7月14日刊）。
(39) 註34、前掲書によるとクックのスイス旅行のコースは、ルソー所縁の地と、氷河、滝、湖、２つの高山をめぐるというものだった。
(40) ジェッフリー・ヒンドレイ著、近藤等訳『図説　探検の世界史４　世界の屋根に挑む』（集英社、1975年刊）。
(41) Alcook Rutherford（1863）．The capital of the Tycoon. Longman,Green,Long
(42) 富士山かぐや姫ミュージアム　リニューアル１周年記念展「富士登山列伝　頂に挑むということ」展示解説書（富士山かぐや姫ミュージアム、2017年６月３日刊）。
(43) 註４、前掲書36頁。
(44) 異人登山に富岳の怒り（仮）. Digital Cultural Heritage https://dch.iii.u-tokyo.ac.jp/item/5c0a0eff-c82b-4838-8856-9066fd3abbf6/（参照 2025-01-04）
(45) 註４、前掲書39頁。
(46) 外国人科学者の山岳調査と観測については、註４の36頁～37頁にまとめられている。
(47) 註34、前掲書第１章。

(48) 横浜開港資料館「世界漫遊家たちのニッポン―日記と旅行記とガイドブック」展示解説書（横浜開港資料館、1996年７月31日刊）。
(49) ジュール・ヴェルヌ著、川島忠之助訳『新説　八十日間世界一周』（慶応義塾出版社、1880年刊）。
(50) 註48、前掲書18頁。
(51) 寺本敬子「1878年パリ博覧会における前田正名の役割―ジャポニズム流行の立役者―」（佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』所収、思文閣出版、2015年刊）。
(52) 外国人は開港された５港（横浜・函館・神戸・長崎・新潟）の開港場とその周辺の遊歩区域外へは立ち入ることができず、また開港場と開市場（東京・大阪）以外で貿易活動に従事することはできなかった。A・G・S・ホースが作成した「横浜周辺外国人遊歩区域図」（1867年）では、地図中に赤線で遊歩区域の境界が示されている。
(53) 丸山宏「近代ツーリズムの黎明―「内地旅行」をめぐって―」（吉田光邦編『19世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985年刊）に詳しい。
(54) 註53、前掲書108頁。
(55) 註53、前掲書110頁。
(56) 註５、前掲書14頁。
(57) Japanese Alpsの提唱者は大阪造幣局に勤務したウィリアム・ガウランドであるが、活字になったのは『日本旅行案内』のこの箇所が初めてとされる。
(58) ここでいう「Shindō（New Road）」は、大町市野口から針の木峠、黒部川、ザラ峠、立山温泉を経て富山市原に至る全長20里18町、巾員２間の信越連帯新道のこと。民間資本により着工され、部分的に竣工して通行可能となった区間はあったが完成は見なかった。信越連帯新道については、富山県 立山カルデラ砂防博物館第17回企画展「異人たちが訪れた立山カルデラ－立山新道と外国人登山－」展示解説書（富山県 立山カルデラ砂防博物館、2006年７月20日刊）で詳しくまとめられている。
(59) 横浜開港資料館『図説　アーネスト・サトウ―幕末維新の外交官―』（横浜開港資料館、2000年刊）。
(60) アーネスト・サトウ著、坂田精一訳『外交官の見た明治維新』（岩波書店、1960年刊）。
(61) 秀島成忠編『佐賀藩海軍史』（知新会、1917年刊）。
(62) 福沢都茂子翻訳「英国公使館書記官アーネスト・サトウの立山登山日記―「アーネスト・サトウの日記」―より」（『富山県史だより３』所収、富山県史編さん班、1978年刊）。
(63) 庄田元男『日本旅行日記１』（平凡社、1992年刊）。
(64)『The transactions of the Asiatic Society of Japan』9,Asiatic Society of Japan,1964-09.
(65) “Exploration in the Japanese Alps, 1891-1894: Discussion”, The Geographical Journal, Vol. 7, No. 2（Feb, 1896）, pp. 146-149, https://www.jstor.org/stable/1773724
(66)『丹生川村史』（大野郡丹生川村史編纂委員会、1962年刊）、1212頁。
(67)『The transactions of the Asiatic Society of Japan』8,Asiatic Society of Japan,1964-09.
(68) 渡辺芙時雄訳「明治12年、お雇い外国人の『八ガ岳・白山・立山』紀行」（『山と溪谷』562号所収、山と溪谷社、1983年刊）、247～253頁。
(69) Dixon, William Gray（1882）The Land of the Morning : an account of Japan and its people, based ona four years' residence in that country, including travels into the remotest parts of the interior. Edinburgh : J. Gemmell
(70) 註69、前掲書655頁。
(71)『The transactions of the Asiatic Society of Japan』6,Asiatic Society of Japan,1964-09.
(72) 手塚竜麿『英学史の周辺』（吾妻出版、1968年刊）、10頁。
(73) 高成玲子「アーネスト・サトウ『日本旅行記』と『日本旅行案内』―D. H マーシャル、E. ダイバースの「有峰訪問記」をめぐって―」（『大山の歴史と民俗』第８号所収、大山町歴史民俗研究会、2005年刊）。
(74)「立山博物館を中核とした文化観光拠点計画」については、『富山県［立山博物館］年報・第33号』の２頁において、要点や取り組みがまとめられている。

編 集 後 記

このたび、富山県［立山博物館］の『研究紀要』第31号を発行いたしました。本号に掲載した論文等は、令和６年４月から令和７年３月までの研究成果を基にまとめたものです。

多くの皆様にご高覧いただき、広く活用していただければ幸いです。

富山県[立山博物館]研究紀要　第31号

編集・発行　富山県［立山博物館］
〒930-1406　富山県中新川郡立山町芦峅寺93-1
TEL:076-481-1216　FAX:076-481-1144

印　　刷　薮下紙工印刷(株)
〒935-0024　富山県氷見市窪1971-6
TEL:0766-91-3338　FAX:0766-91-0517

発　行　日　2025年３月31日